

あやいと

第五号



あやいと

第5号

# あやいと

第5号



北海学園大学

人文学部Ⅰ部 2025年度田中綾ゼミ

## 刊行の辞

『あやいと』という名称は、先生のお名前に含まれている「綾糸」に由来しており、「美しい色とりどりの糸」や「あやとりに使う糸」「機織り機の掛け糸」という意味を持っています。

### 『あやいと』創刊号より

この度、二〇二五年度田中綾ゼミより、文学誌『あやいと』第五号を刊行いたしました。ゼミ誌としては第十五号となります。無事に皆様の元へお届けすることができたことを大変嬉しく思います。

田中綾ゼミでは十二人の学生が三年次から創作を行なっており、互いに作品を読み合いながら表現力の向上に努めてきました。いずれの作品も、作者一人ひとりの才能と努力の結晶であり、その人にしか描けない世界へと通じる扉です。また、それぞれの物語の後にあとがきを書かせていただきました。そちらも本編と併せてお楽しみいただければ幸いです。

言葉それ自体は会話中に空気を震わすだけであり、言葉の記された書物もやがては朽ちていきます。しかし、言葉というものを吟味して人文学を学んできた私たちは、言葉が時代や地域を越えて人間の心に働きかけ、受け取った人の人生を豊かなものにすると信じています。十二色の糸で織りなされた『あやいと』が、皆様の疲れた日には休息の毛布となり、雨の日には一歩を踏み出す勇気のレインコートとなることができたなら、作者一同、これに勝る喜びはありません。

最後となりますが、本誌刊行に際してお力添えいただいた皆様、そして『あやいと』を手に取ってくださった皆様に心より感謝申し上げます。

北海学園大学人文学部一部田中綾ゼミ  
『あやいと』第五号 ゼミ長兼編集長

四年 寺田望

『あやいと』第五号 目次

刊行の辞

目次

龍鳳

理想の恋人

匿名の人生

ピーターパンが来ないから

フレンチトーストをつくる

100万円のマジック

アシンメトリー

愛すべき非日常

ウオトウカを一箱

なりやまず

旭

中村鈴蘭

永田志生

七輝

石橋わたる

味噌

シロガネ

相良茂

幾里

253 221 189 155 125 97 67 35 7 4 2

## 目次

「閲覧注意」ロイコクロリディウム	湖浜微	281
プログラム・ブレイブ	菱川立花	309
私の幸せだとしても	小鳩	343
編集後記		376
ごあいさつ		380
各作品の後に、作者によるあとがきを掲載しています。あわせてお楽しみください。		



龍鳳

旭



## 1

トップアイドルが死んだ。

私の双子の片割れであるユウキが死んだのだ。全員に愛された国民的アイドルは誰も知らない暗い部屋で一人で死んだのだ。新聞の一面にユウキの顔と名前が大きく載り、テレビでは一日中ずっとユウキのことが報道されている。独りで死んでもユウキの名前はあいかわらず輝いていた。双子なはずの私の名前はユウキの隣ですらない隅っこの方にひっそりと載せられていた。

国民的アイドル STARBIT のセンターであるカネダユウキは私の双子の片割れである。男女の双子という存在自体が珍しく大体が似ていないことが多いが私たちはとてもよく似ていた。幼少期はどちらも女の子にも男の子にも見えるような中性的な姿をしていたためよく間違えられた。大人になった現在はもちろん性別による体格などの差はあるが顔はそっくりだった。ユウキはあるときオーディションを受けアイドルとなってから着実にトップアイドルへの道を上っていった。ユウキは漫画の主人公の様に明るく裏表

のない性格だった。その性格から周りとの関係も芸能界と聞いて想像するようなどろどろとしたものは一つもなく、家族ともメンバーとも業界の人ともファンですらない人とまで良好な関係を築いていた世にも珍しい完璧なアイドルである。

一方、双子のもう一人である私、カナダカエデはユウキの人生からすればいたって普通の道を歩んでいた。普通に進学しまあまあ大手の会社に勤め、真面目に生きたことで昇進もしていた。ユウキとは比べられないが普通に幸せと言える人生を歩んでいる。顔は隠せないからユウキと家族であることはすぐにばれているがそれが大きく生活に支障をきたすことも特になかった。とても普通な人生を歩んでいたところユウキが突然死んだ。

ユウキは普通よりも数ランクも上の漫画のような幸せを手に入れているのになぜ死んだのだろうか。

「カネダユウキ。二十五歳。死因は窒息死です。このアロマキャンドルに揮発性のある毒が仕込まれていたようです。ユウキの手元にはファンからの手紙が複数あったことからこの部屋でファンからの手紙を読んでいる間に何者かに仕掛けられたアロマキャンドルの毒によって意識がなくなり最終的に亡くなったとみられています」

「コンサート終わりだったようだがマネージャーや他のメンバーが様子を見ることは無かったのか？」

「一度マネージャーとメンバーのチアキさんが様子を見に行こうとしたようですがその時には鍵がかかっていたため引き返したようです。また、メンバーの家族が来ておりユウキさんの家族のうち双子の……あのカネダカエデさんが本人と接触しているようです」

「容疑者はその三人ということか」

「いえ、カエデさんは一度被害者のユウキさんと二人で話していました。話

している姿も目撃されてしまったしその後家族とほぼ一緒に過ごしていたように大勢の人がいる場所で目撃されています。何せ被害者のユウキさんと顔が本当にそっくりなためとても目立つようです。証言もとれているため犯人ではないかと」

「確かに一人で動いていたとしても顔が有名アイドルとそっくりであればとても目立つだろうな」

「一度トイレに向かっていますがトイレでいない間には被害者はまだ部屋ではなくステージ裏で目撃されています。メンバーのリクさんは会話もししていました。カエデさんは容疑者から外してよいでしょう」

「ファンは完全に帰って入れない状況だからマネージャー、メンバー、スタッフの誰かの可能性がとても高いだろう」

「メンバーに関してはアリバイがあります。全員控え室にいるか三名ほどで常に行動。トイレまで一緒にいるそうです」

「なかなか珍しい仲の良いアイドルだな。大体は裏では不仲……。なんてことばかりなのに」

「基本的にステージ外で一人で行動する様子はあまり見られませんが、大体が集団で活動している姿が防犯カメラにも写っているためメンバーは除外しても良いでしょう」

## 3

警察に事情聴取というものをされた。ユウキのことについて聞かれているにもかかわらずどこか自分に全く関係ない他人について聞かれているようだった。私はまだユウキが死んだことを実感していない。街に出てもユウキは映っているしテレビにも新聞にもいつも名前と写真が載っていたからだ。忘れるどころかまだ存在しているような感覚になった。

STARBITのメンバーはこれまた芸能界では珍しく全員黒い噂のまったくないテレビの姿と裏の姿が一緒のアイドルだった。そのため信じられないほど仲が良くまるでアイドルを題材としたアニメを見ているかのように見

える。

遠慮のない良好な関係はとても羨ましいものだった。

4

「メンバーへの疑いは晴れましたね。家族も全員シロだと思われます」

「あと残っているのはマネージャーと舞台スタッフか」

「ユウキさんはあんなに完璧だったのに、なぜ殺されたのでしょうか」

「完璧が羨ましかったんじゃないか？ 誰にでも優しく美しく全てを手に入れたアイドルなんて誰もが羨むだろう。羨ましいものを見るとどんどん自分が下に見えてくる。ないものねだりは激しくなつて、最終的に完璧を消せばいいという決断にたどり着く」

「完璧すぎるのも良くないですね。俺は欠点だらけだから縁のない話だ！」

私たちの家族はいつも完璧と言えた。母は優しく天然であつたが料理が上手でたまに怒らせると何よりも怖かった。父は母の尻に敷かれているが真面目に働きの役職にまでついて私たちにやりたいことを何でもやらせてくれていた。双子として生まれた私たちはいつも同じだった。行く場所も見た目もやることも。成長するにつれそうはいかなくなりユウキはアイドルという夢をかなえるために家族のもとを離れたがそれでも双子であることは変わらないと思つていた。

国民的アイドルという立場はどんなに頻繁に会ついても伝説の中の人のようなどこか現実的じゃない雰囲気を持つ。ユウキはアイドルになったことでいつも一緒にいる双子である私にさえもそう思わせるようなアイドルになった。どんなに会う機会を作つてくれても以前と違い他人と話しているように感じられた。

私たちはいつも同じだったのに。

「マネージャーが犯人だとは」

「部屋で死んだとされる時間の前にアリバイがないのは一人別部屋で仕事していたというマネージャーだけだ。男性の力が必要な重さの段ボールを部屋の前からよけている映像も見つかっている」

「マネージャーが犯人でほぼ決まりでしょう」

（カネダユウキが生きている）

SNSは直ちにそんな言葉で埋め尽くされ歓喜で満ち溢れる。

発表されたオーディションのプロフィールには国民が忘れられない完璧なアイドルであるカネダユウキの顔があった。



正確にはカネダカエデであつたが。

性別は違つても全員が愛した顔であるカネダユウキの顔を持つカネダカエデはさまざまの人に愛された。

年齢が少し周りの参加者よりも高かつたがそんなことは誰も気にしなかつた。性別も違いグループの形も活動場所もメンバーカラーでさえ違つたがファンにとつては伝説のアイドル、カネダユウキの復活だつた。

何より悲劇的な事件で双子の片割れを無くし残されたもう片方が無念を晴らすようにアイドルになるというストーリーは誰もが興味をもつた。アイドルに関心がなかった人もカネダカエデを応援した。

カネダカエデはそれに答えるように今まで一般人であつたと思えないような完璧なアイドル姿を見せた。

事件はもうほぼマネージャーが犯人というところで片付きそうだつた。カネダカエデはテレビのインタビューにまっすぐ前を向いて答えた。

「私のきょうだいであり国民的アイドルのカネダユウキは一年前悲しい事件によつて亡くなりました。いつもユウキはそばにいましたが突然いなくなり

ました。国民的アイドルと一般人という立場になっても私たちの関係性は全く変わらずユウキは大事なファンの方に会う忙しいスケジュールの中でも家族との時間を作りました。私がそんな完璧でもう二度と会えないユウキの代わりにはなれないと思います。同じ顔は持っていますがユウキのような素晴らしい人間はもう存在しません。ただ私がユウキのアイドルとしての夢の続きをどうしても叶えたいと思ったのです」

国民はカネダカエデのスピーチに釘付けだった。

8

「ユウキさんは最近このアロマキャンドルを気に入っていたようでその話を聞いたファンたちによる差し入れのアロマキャンドルに毒入りのものが混じっていたようです。また、防犯カメラには正体不明ですが体格的に二十〜三十代の男性の姿が映っています。メンバー、家族にはアライがあるため

マネージャーの犯行だと思われませんが本人は否認しています。」

「マネージャーが容疑者なのはわかったが動機はあるのだろうか？このグループは誰に聞いてもグループ間や会社、マネージャーとのトラブルについて全く悪い話を聞かない。今一番国民的アイドルとして輝いていて多くの国民から信頼されているこの時期に問題について全く聞かないグループを壊すようなことをするだろうか？」

「でもこの犯行を実現可能なのは今のところ彼しかいません」

## 9

幼少期の私は何をするにもユウキの隣にいた。幼稚園の頃なんか指定のスモッグにお母さんが付けてくれたワッペンまで一緒に、同じ顔、同じ身長、同じ声、同じ性格の私たちはよくみんなを惑わせた。自分がもう一人いることが当たり前だった私は、もう一人の自分であるユウキが常に自分と同じで

あることで自分が正解であると確認できている気がしてひどく安心させられていた。

小学三年生の時、正月に会った親戚のおじさんが私たちにぬいぐるみをプレゼントしてくれた。私には淡いピンクのウサギのぬいぐるみ、ユウキには茶色のクマのぬいぐるみを渡していた。ユウキはとても喜んでクマのぬいぐるみにたくさん話しかけていたが私は謎の嫌悪感を抱いていた。ユウキは私と違うものを持っている。その嫌悪感を意識した瞬間から生活の中の小さなことでユウキとの違いを感じた。そこからどんどん私たちは「違うもの」になっていった。男女の違いもはつきりと表れだし一緒だった声も全然違うものになった。ユウキはどんどん私とは違う方向へ歩みだしアイドルとかかけ離れた存在にいつの間になくなってしまった。顔はそっくりだと言われているけどその顔でさえそこにいる犬の方が私と似ているのではないだろうか。私であるユウキは全然違う人間へと変貌し私の幼少期から抱いていた安定感や安心感は消え去ってしまった。

全然違うものとなってしまったユウキ。とうとう違うどころかこの世に存在しなくなってしまうた。私はいまだにユウキという存在がもう無いことが実感できなかった。

ユウキは自分と全然違うものになっていく私に対してどのように感じていたのだろう。あんなに一緒にいて、あんなに同じことをしていたのに私はユウキが生きているときも死んでもからもおユウキの考えていることが一つも想像できなかった。

あたりまえの存在であつたユウキがいない世界になってしまった。

## 10

「防犯カメラに映る男性の姿は一七五センチメートル程度で結構な高身長に見えます」

「この身長であるならば部屋のドアの上に密室の仕掛けを取り付けることも

すばやく容易だろう。疑いのある女性は高くても一六五センチメートルであるのでやはり犯人は男性でしょう」

「この男性。この最後の部分ほんの少しだけ笑っているように見えるんですよ。その笑った口角というか……口元が被害者のユウキさんに似てるかもなって」

「そうか？ 俺は本物の双子の片割れに会ってるから全然違う人に見えるぞ」  
「まあ、気のせいでしょう」

11

今日はSTARBITが結成十周年の日だ。そしてユウキが生きていれば二十五歳の誕生日。ユウキが死んでもなおSTARBITの赤色担当センターのカネダユウキは確かに存在していた。

「十周年記念の日ってわがまま言ってもいい？」

「地元の思い出のホールでイベントやりたいんだ」

ユウキが居なくなってもメンバーは全員ユウキのその要望を叶えようとした。ファンは国民全員と言えるほどいたがユウキの意思を尊重し十年前グループが始まった時のようなキャパシティのイベントとなった。当然ファンは大騒ぎだったが大層な問題なくイベント当日を迎えた。

地元のホールに入る最大限の人数約二千人。全員が熱狂していた。ステージ裏からそれを見るとあの人は本当に愛されていたんだと実感する。最後の曲になった時私はポジションについているメンバーの間を通り、あけてあったカネダユウキの位置に立った。自分の所属するグループの青い衣装を着ていたが、メンバーカラーレッドのセンターカネダユウキとしてステージに立つ。

会場がざわざわとどよめきだす。

メンバーもスタッフも会場のファンたちも全員私を見ていた。

「音楽を流してくれ」

メンバーも会場もこの言葉でユウキの代わりに双子である私が踊るのだと

理解した。

音楽が流れ始める。

私は小さい頃からユウキとずっと一緒にやることも身につけているものも一緒だった。そのはずなのにいつからここまで差異が生まれたのだろう。ユウキと同じになろうとすればするほどユウキは上へと足早に進んでいき追いつけなくなってしまった。だからユウキの時を止めれば、自分に時間さえあればまた追いついてユウキと同じ場所に立てると思った。世間は殺害動機は嫉妬だと言うけれどそんなじゃない。ただ私は同じ位置にいたいだけだ。結局ユウキの時間を止めてもユウキの名前は出てきてメンバーもファンも全国民もユウキが生きているかのようにその名前を出し続けていた。

全然時間が止まらない。

なら全部なかったことにすればいい。

私とユウキが別物になる原因になったグループもファンもステージも。

私は腕を振り下ろして振り上げて全力でステージで動いているうちに衣装が自分のメンバーカラーの青ではなくユウキのメンバーカラーの赤になって



いることに気が付いた。

ユウキがみんなに忘れられれば私だって追いつくことが出来る。

汗が流れる。

私が指を指すとその先は真っ赤になった。

会場全体が俺とユウキの色になった。

ユウキと同じぐらいみんな俺に注目している。

やっとユウキと同じ位置にいる。

12

「令和最悪の惨殺事件とされる「STARBIT事件」から三十年。なぜあのような凄惨な事件が起きてしまったのか当時の状況を振り返っていきましよう。この事件を起こした犯人は金田楓、当時二十五歳。彼はSTARBITのセンター金田優紀の双子の弟でした。彼は二〇二五年七月五日実の姉

である金田優紀さんをイベントの使われていない楽屋で殺害。巧みに証拠を隠滅し最初はマネージャーの唐澤が容疑者として検挙され彼は疑われることはありませんでした。それどころかオーディションを受け、男性アイドルグループとしてデビューした際、番組では悲劇の主人公として取り上げられています。まずは姉の金田優紀さん殺害の流れについて解説いたします」

「金田楓が犯行に利用したのは金田優紀さんとそっくりな『顔』です。優紀さんと金田楓は双子で男女ではありませんでしたが顔が慣れていても間違える時があるほどそっくりでした。もちろん男女間の体格差はあるため実際は違う人であるという印象を受けます。しかし、この体格の特徴を曖昧にした場合どうでしょうか。金田楓はまず金田優紀さんが気に入っている店のアロマキャンドルがファンからたくさんプレゼントとして送られてくることを利用し毒が含まれているキャンドルを紛れさせます。『これさつき会場でファンの方に姉に渡してほしいと頼まれました』と伝え自然に紛れさせたようです。金田優紀さんはライブ終わりにファンレターを読む習慣がいつもあったようです。独りでじっくり読むことを好む優紀さんの習慣を利用し空き室へ誘導。

この時はマネージャーや家族も一緒にいたようです。さっきファンの人から預かったということを金田優希さんにも伝え自然にそのキャンドルを使用するように誘導。独り部屋にこもった優紀さんはファンレターをじっくりと読む長い時間の中で静かに亡くなったようです」

「途中で彼女が部屋を出ることは完全になかったのでしょうか？」

「それについてはドアに簡単な細工がされているのが発見されました。一度防犯カメラに部屋付近に男性が近づくのが目撃されています。この男性の姿が映った後も優紀さんの姿が目撃されたという証言があったため金田楓は犯行を実行不可能として犯人から除外されていましたが、実はこの時目撃された金田優紀さんの姿は金田楓の変装でした。金田優紀の死亡時刻を彼女とそっくりの自分の顔を利用することでごまかしたのです。まずは体格を大きめのパーカーで隠す。少し前かがみになったり、しゃがんだ体勢を見せることで身長もごまかし、声は生成AIを利用して作成した音声でした。目撃情報はいずれも至近距離ではなく物陰や少し離れた場所であったため細かい違いには気づかれなかったようです」

「……金田楓はこの綿密な金田優紀さん殺害計画から見るとかなり頭脳明晰な人物だったようですね」

「はい、実際金田楓は金田優紀同様に完璧な人間であつたと言われています。かわつたことのある方は全員金田楓のことを笑顔が素敵でアイドルのような好青年だったため事件を起こしたことが信じられないとあつけにとられていた方が多いです」

「そしてこの事件の一年後二〇二六年八月九日。金田優紀さんが望んでいた日にSTARBITは結成十周年イベントと優紀さんの誕生祭を実施。場所はSTARBITの結成場所であり優紀さんの地元にあるホールでした。実施されたイベントの最後に披露されたデビュー曲の最中、金田楓が乱入。メンバー五人をステージ上で刺殺し会場に仕掛けた爆弾を爆破。死傷者千五百人を超える大事件を起こしました」

「へーこの曲って金田楓の事件のグループのだったんだ。お母さん知ってるの？」

「もちろん！ 私が高校生の時は知らない人はいなかったのよ S T A R B I  
T。それはもう衝撃的な事件だった」

「金田楓の名前とかアイドルが殺人みたいなのは知ってたけど姉のこととか  
グループまでちゃんと知らないわ」

「嫌だ、ジェネレーションギャップ」

旭

## あとかき

アイドルという職業はあまりにも「イメージ」というものに左右されている。アイドルはみんなの憧れであり、容姿も中身もやっていることもどこか自分とは現実離れたものでなくてはいけない「離れた輝く存在」というイメージ。そのイメージが少しでも崩された瞬間にアイドルはある一定数の人にとってアイドルではなくなる。また、一度アイドルが噂されて「悪いイメージ」が付いた瞬間それが本当であろうと嘘であろうと濃く残り続けて誰かにとっては「悪いイメージ」が真つ先に出てきてしまう存在になる。この「悪いイメージ」はアイドルを現実離れた存在から一気に薄暗い現実を生きる人間という存在に引き戻してしまう。特に現代は情報が一瞬で拡散されるうえに一生残り続けるため「イメージ」が重要なアイドルたちは歌ったり踊ったり以外のことに精神を費やしている。

人間が人生を過ごす間で一番悪いイメージがつくもの。「殺人」。人のこれからの時間を勝手に奪うとともにその人に関わった人の時間まで奪う許され

ない行為である。アイドルの現実離れしたきらびやかなどこ架空のようなイメージはあまりにも圧倒的でこの裏に「殺人」という最悪のイメージを結び付ける人はめったにいない。アイドルは夢を与える職業である。そのためにアイドルのイメージは常に完璧でなければいけない。人間の完璧の中に最悪である「殺人」は絶対にならない。想像されない。でも、もし、そんな完璧を保っているきらびやかな伝説上の人物のような国民的なアイドルという存在が「殺人」と結びついたら世の中はどんな反応をするのだろうか。

さて、今回の小説の登場人物のような双子という存在にはこれまた「イメージ」が強くかわつてくることがある。中国では今回の物語の登場人物のような男女の双子は龍鳳胎と呼ばれとても縁起が良いものとされてきた。逆に他の国では双子という存在自体が縁起の悪いものとして忌み嫌われ幼いうちに排除された双子もいるらしい。文化によって双子に対する「イメージ」は全く違い、そのイメージによって双子は人生を左右されることもある。

また、似ているからこそ比べられ「イメージ」をつけられやすいのも双子



である。こっちの方が優しいとかこっちの方がかっこいいだとかこっちの方が優れているだとか。似ているからこそ違う部分は浮き彫りになるだろう。「アイドル」でも「双子」でもない私を書いたこの小説に出てくる双子もアイドルも私によって作り出された何となくの「イメージ」である。

ちなみにこの小説を書いている現在、絶賛アイドルのオーディション番組を視聴中で、くるくると変わっていく練習生への世間の評価に改めて「イメージ」の影響力の絶大さを実感させられている。

あとがき



理想の恋人

中村鈴蘭

私には恋人がいる。二十歳のときから付き合ってもうすぐ五年。今までたくさん喧嘩してきた。一方的に私が怒ることが多かったけれど。待ち合わせに一時間半遅刻してきたときもあったし、部屋の掃除が出来なさすぎて大激怒したこともあった。でも、嘘が付けない彼は疑われるようなこと、ましてや浮気とかそんなものとは本当に無縁だった。彼とは同じ大学で社会人になつてからも順調に交際を続けている。「社会人になつたら環境も変わるし、どうなるかわからないよ」と、もっと直接的に言うなら、別れてもおかしくない友人に通告されたが互いに忙しすぎるがあまり、仕事終わりはほとんど予定も入れずすぐ帰宅。同棲はしていないが週に数回は泊まりに行ったり来たりという感じ。そんないかがわしいことは何も起こらなかった。明るくて優しく友達も多い彼は、いつだって私の自慢の彼氏。本当に大切な、私の大好きな恋人だ。……そう思っていたのに。

＊

「美桜ってもうちょっとで付き合つて五年だよね？」

「うん、もう五年だって。あつという間だよ」

「いいなあ。大樹くんいい子だもんね」

「でも最近会えてないんだよね。向こう残業めっちゃ入ってて」

「そうなの？ でも毎週泊まりに行ってるんでしょ」

「それが最近行けてなくて。忙しそうだし、邪魔かな……みたいな」

「美桜って昔からそんな感じだよー。なんか変なところで遠慮するっていうかさ。大樹くんだって顔見たいと思うよ」

「そうかなあ、そうだといけど」

高校の時の同級生である穂香と偶然同じ会社に就職した私は、休憩時間が合うときはこうやって一緒にランチをとりながら近況報告をしている。

「穂香最近お弁当だよ、自炊頑張ってるんだ？」

「あ、これ？ 実は彼氏できたんだ」

「え！ いつから？ どんな人？ きっかけは？ 何歳？ イケメン？」

「多い多い！ほんと付き合ったの先週で、もうほんとかっこいいし。ハーフっぽい顔でさ。私が料理苦手なぶん作ってくれるし。歳はね、三個上でもう年上の余裕を感じまくってる！ほんと、理想の恋人なんだよね」

「年上、料理上手、ハーフ系って高校生のときから言ってた穂香の理想まんまじゃない？ そんな人と付き合えるとか最高すぎるね」

「……そうだね、ほんとに理想って感じ」

穂香は手作りのお弁当を愛おしそうに見つめながらそう言った。穂香は高校生のときから理想のタイプを貫き通していた。そしてこの理想に見合う男子がそんなに簡単に見つかるはずもなく。だからこそ穂香に彼氏ができて自分のことのようにうれしい。

「なんか穂香の話聞いてたら大樹に会いたくなってきた。今日家行っちゃおうかな」

「いいじゃんいいじゃん！ ケーキとか買ってっちゃいなよ！」

「今日何の日でもないのに？」

「そんなの関係ないよ！ 久しぶり元気だったかな記念日！」

「なにそれ」

そんな穂香の言葉に背中を押され、私はケーキを買って帰ることを決めた。合鍵も持ってるし、サプライズで大樹の好きなビーフシチューでも作って

待つてようかな。大樹の太陽のような笑顔を想像しながら、私は午後の仕事に取り掛かった。

\*

定時に退勤した私は、お気に入りの黒のワンピースに着替えて、少しお高めの苺のタルトを買って、ビーフシチューの材料も買って大樹が住んでいるマンションの扉を開けた。しばらく来ていなかったが相変わらず部屋は整理整頓されている。キッチンに行き冷蔵庫を開けると、中はほとんど空だった。外食が多いのかな。忙しかったら自炊する気力もないよね。冷蔵庫にタルトを入れて、さつそくビーフシチューを作ろうと準備していた。そういえば前に置いて帰った私のエプロンが部屋のどこかにあるはずだと思い、手当たり次第探す。ここ一か月は連絡は取るものの会ってはいなかった。きつとエプロンは洗濯してクローゼットにかけておいたはず。私はクローゼットを開いて、エプロンを発見する。その隣には大樹のスーツがいくつかハンガーにかかっていた。よくみるとその中の一着に違和感を覚えた。ポケットにふくらみがある。私はなぜか冷や汗をかいだ。こういうときの女の勘は嫌というほ



どあたる。まだポケットの中を見ていないのに何が入っているかわかるような気がする。でも今まで一度も女の影を見たことがない。約五年間付き合っていて一度も。付き合ってから異性と二人で飲みにも行かず、複数の中に異性がいたら必ずどんな関係かを伝え、終電で帰るような人だ。今まで数えきれないほど喧嘩しても、私が怒って口を利かなくなるとメソメソしながら謝ってくるような人だ。このふくらみが、ハンカチやティッシュではないことはわかる。もしかしたら、忙しさによるストレスで煙草を吸うようになったのかもしれない。きつとそうだ。私は大樹のことを信じてる。そして、ポケットに手を入れた。

「嘘……」

ハイブランドの真っ赤な口紅が入っていた。しかもケースにローマ字で名前が刻印されている。

「め、ぐ、み」

そこには確実に「めぐみ」と刻印されていた。大樹には姉や妹はいない。母親の名前も「めぐみ」ではない。どうしようどうしよう。私は頭が真っ白

になった。

「え、美桜？」

思考がショートしていたからか、大樹が玄関の鍵を開けたことすらも気付かなかつたらしい。

「大樹、これ何」

私は泣きたい気持ちを抑えて、大樹の目の前に口紅を突き出した。きっと私はまだ期待している。この口紅には何か理由があるはず。

「えっ……口紅……えっと」

「何、ねえこれスーツのポケット入ってたよ」

「え、なんでだろ……」

「なんでだろうって何……しらばっくれなだけでよ。これ女のやつじゃん」

「違うよ……俺浮気とかしないよ……美桜のこと大好きなんだよ」

「嘘つき！　だってめぐみって書いてるよ、最近残業あるとかいってその女と遊んでたんでしょ！」

「めぐみ……？　違うよ！　男だ、そいつ俺の男友達だって」

「は……？ 苦し紛れの言い訳すぎる。今までどんなことも許してきたよ。長時間の遅刻も……直してっていったことがなかなか直らなくても。でも浮気は無理……」

「それはごめん……でも浮気はしてないよ……」

「私の五年返してよ！」

私は怒りに任せて口紅を大樹に向かってぶん投げた。どうして大樹は泣きそうな顔をしているんだろう。泣きたいのはこっちの方なのに。

「もう疲れた……別れて、もう顔も見たくない」

「待つて美桜、誤解だつて違うつて」

「大っ嫌い」

私は合鍵も大樹に投げつけて家を飛び出した。私の五年。替えの利かない、人生で一番密で一番幸せだった五年。こんなにも終わりにはあつてなかった。走馬灯のように大樹との思い出がよぎる。勇気を出して私から誘った水族館デート、まさか向こうから告白されるとは思わなかったな。大学生のときはお金も時間もあつたから、東京とか大阪とかいろんなところに旅行に行ったよ

ね。社会人になってからは時間もないし、旅行とかは特別行けなかったけど、お互いの家行き来して一緒にご飯作ったり映画見たり、そんな何気ないことが楽しかったんだよね。将来の話とかもしたよね。もし生まれてくる子が男の子だったら野球やらせたいとか、意外とピアノとかやらせたらギャップ萌えだよとか。女の子だったら何がいいかなあ、バスケットかっこいいよね。でもやっぱり、一番やりたいことをやってほしいよねって。まさかこんな形で終わるなんて。私に魅力が無くなったのかもしれない。でも浮気するなら、私とちゃんと別れてからしてくれればよかったのに。

＊

「別れたの!!」

翌日穂香と昼休憩が被ったので、昨日あった出来事をそのまま話した。穂香は当たり前だが驚いていた。そして私の真っ赤に腫らした目を見て悲しい顔をした。

「浮気か……辛いね。よく頑張って仕事来たね」

「働いてた方が気まぎれるし……休んで迷惑かけたくないし」

「うんうん、えらいよ美桜。大樹くんの連絡先とかどうしたの？」

「もう全部ブロックして消した。……写真はまだ消せてないけど」

「まあ落ち着いたらいろいろ考えればいいよ」

「……うん」

「大丈夫？ 大丈夫じゃないよね」

「おはようとかおやすみとか、毎日連絡してたのがなくなるのが辛い。自分からブロックしたのにね。あいつだって浮気したのに、もしかしたら通知きてないかなとか思ってたトーク画面開いちやう」

「そっか……」

穂香は少し言いづらそうに、だけど心を決めたような顔をして私の方を向いた。

「美桜さ、【理想の恋人生成AI】って知ってる？」

「なにそれ。聞いたことない」

「実はさ、私の彼氏もそれで作ったんだよね」

「え？ どういうこと？」

「今流行ってるんだよ！ 【理想の恋人生成AI】はね、容姿も性格も自分好みに出来てほんとにいいの！ 話せば話すほど自分が欲しい言葉をくれるようになるし。学習してくれるっていうか。気休めにしかないかもけど、おはようとおやすみは言ってほしいとかなら設定すれば言ってくれると思うし！ やって見たら？」

「うーん、でも今はいいかな……」

「そっかあ、まあ気が向いたらやってみて。これだから」

穂香のスマホには薄いピンク色のボックスに赤いリボンが結ばれた、プレゼントのようなアイコンがインストールされていた。下には【リソコイ】と書かれている。まさか穂香の彼氏がAIだとは思わなかったけど。でも今の時代って多様性だし、飛行機と結婚したとかでニュースなった人もいたよね。今思えば、あの高い理想に当てはまる人が急に現れるとは奇跡すぎるような気もする。昼休憩が終わり午後の仕事をこなし、自宅についたときもなんとなく頭の片隅に【リソコイ】の話が残っていた。こうやって部屋を見ると、ところどころに大樹の私物が残っている。この色違いのマグカップとか、

旅先で買ったシーサーのストラップとか。歯ブラシとか髭剃りとかは昨日捨てたけど、こういう思い出の品みたいなのはまだ捨てるのに躊躇する。でも大樹の私物が残ったままなのもなんだか気持ち悪い。もう家に来ることはないはずなのに、玄関を開けてただいまって言ってきそうな気がする。私はまだ寂しいんだろうな。

「【リソコイ】、やってみようかな」

そんな寂しさを埋めるために、私はスマホで検索をかけた。この一番上に出てるやつかな。私はためらいながらも、人差し指でクリックすると、自動的にアプリがインストールされていく。膨大なデータの量があるのか、インストールするのに一時間くらいかかったものの、アイコンと同じような【理想の恋人生成AI】という薄ピンクの可愛らしいページに飛んだ。

「あなたの理想が恋人になる。あなたの名前を教えてください」

という質問から、年齢、相手の容姿、どんな性格かなど十個の質問に答えていった。特に明確なタイプもないので、あまり深く考えずに回答していく。次に赤い文字で注意事項が書かれている。

【誹謗中傷、過激な要望、危害を加えるようなことはしてはいけません。もし、理想の恋人を解約したい場合は、契約者様から「別れたい」と伝えてください】

そして最後には要望欄があり、

【要望があれば、入力してください】

私はおはようとおやすみの連絡を毎日してほしい、と打ち込んで確定と書かれたボタンをクリックする。アップロード中と表示され、意外と簡単に作れるんだな、彼氏って。特に私は穂香のようにはつきりとした理想もないし、本当に理想の恋人なんてAIに作れるのだろうか。

【理想の恋人が完成しました】

待っている間に彼氏ができたらしい。すると、画面が急に明るくなってフラッシュを焚いたときのようにまばゆい光が部屋の中にあふれた。

「はじめまして、和紗です」

光の中から飛び出してきたのは、艶やかな黒髪にすらっと伸びた足、切れ長の瞳。どこかの俳優のような顔立ちとスタイルのよさに、私は茫然とした。



「う、うわ……」

「美桜ちゃん？ 大丈夫？」

「あ……え？ 大丈夫です」

「そんな敬語使わないでよ。僕たち同年でしょ？」

そうだった。私はこのイケメンを同い年に設定したんだった。人とはたえ彼氏と別れた直後でも、目の前に息をのむほどの男が現れるとすぐに元カレとの記憶に霧をかけてしまえるのだと、このとき初めてそう思った。

「これからよろしくね」

「よろしく……お願いします」

「だから敬語じゃなくていいって」

簡単な挨拶が終わると、私はとりあえず部屋の案内をした。トイレはここ、お風呂はここ、和紗くんの部屋は私がもう着ない服を置いている物置と化した場所を、二人で一緒に片づけて使えるようにした。

「ごめんね、来て早々掃除手伝ってもらっちゃって」

「いやいや、むしろ部屋作ってもらってごめん」

「全然だよ。あ、これどうしよ大樹のじゃん」

「大樹？」

私としたことが迂闊だった。物置には大樹からもらったなかなか捨てられないプレゼントなどが置いてあった。

「元カレなの。最近別れたんだけど、まだ捨てられないものとか多くて」

私は大樹とお揃いで買ったマグカップを手にとって見つめる。

「無理に捨てる必要はないよ。大切なものなんでしょ？ そのプレゼントたちをどうしたいか、一緒に考えようか。今無理に決める必要はないから、いつでも相談してね」

自分が欲しい言葉をくれる、という穂香の言葉を思い出した。人は迷っているとき、頭の中が混乱していて自分の考えが正しいのかわからなくなってしまう。そんなとき、誰かに「それでいいんだよ」と肯定されることで、自分の考えは間違っていないかと思えるようになる。和紗くんはきつとそういう存在。私のことを肯定して、尊重して、いつも私の欲しい言葉をくれる彼氏になる。

「……和紗くんありがとう」

「まって泣いてる？　ちよっと泣かないでよお」

自分勝手に浮気するようなアイツとは違う、私はこんな彼氏が欲しかったんだ。

＊

「今日はディナー連れてきてくれてありがとう」

「いやいや、和紗くんいつも家にいてつまらないでしょ」

「えー？　部屋の掃除とかするの僕好きだし、晩ご飯の献立考えるのも楽しいよ」

「そういつてくれるのはありがたいけど……」

「本当だよ、あ、ソファア座って。僕こっちに座るね」

【リソコイ】を利用して数週間。私なりにわかったことがある。それは、設定に忠実だということだ。大樹が浮気したのはお互いの仕事が忙しくてすれ違いが起きたことが原因だと感じた私は、和紗くんの職業を【専業主夫】に設定することで、浮気の可能性を少しでも潰すことにした。すると和紗く

んは、家事も掃除もすべて完璧にこなしてくれる理想の恋人になったのだ。

「これおいしそう、こっちもおいしそう！」

「たしかに……じゃあ両方頼んで、半分こにしよっか」

「え、和紗くん食べたいものなかった？」

「僕もこれおいしそうだと思ってたから、全然大丈夫だよ」

和紗くんは氣遣いが素晴らしい。テーブルにソファアールと椅子があつた場合、絶対にソファアールを譲ってくれるし、私の意見を尊重できる最善の策をいつもとってくれる。車道側を歩くとか、荷物は持つてくれるとか、世間一般的氣遣いポイントはもちろん、些細なことも氣遣えるところが素晴らしい。

「お肉もお魚もおいしいね」

「ね、めっちゃ柔らかい」

大樹と付き合っていたときってこんな氣遣われたことあつたっけ。外食するときはだいたい遅刻してきてたし。それで私が怒って大樹が捨てられた子犬のような目でいつも説教を聞いてた氣がする。

「美桜ちゃん、大丈夫？」

「え？ うん」

「そっか、なんか疲れてそうだと思って。サクツと食べて早めに帰ろうか」  
「そんなことないよ、ごめんごめん」

理想の恋人を手に入れておいて、どうして大樹を思い出すんだろう。今付き合ってるのは和紗くん、こんな気持ちのままでは和紗くんに申し訳ない。私ってこんなに面倒な女だったつけ。

「みーおちゃん！ またどっかいつてる」

「違うよ、和紗くんのこと考えてたの」

「えっ本当？ うれしい」

「和紗くんとまたいろんなところ行きたいなって」

「行きたいよね！ 僕水族館とか行きたい」

「水族館？ チョイスがなんかかわいいね」

「水族館ってバカにできないから！ 大人になったらなっただ、違う楽しみ方ができるんだよ」

そして次のデートの行先や日程を決めつつ、私たちは他愛もない話をしな

がらディナーを食べ終えた。お会計を払うと、「僕払うよ！」と和紗くんが申し訳なさそうにする。私はいつも家事してくれるお礼だから、と笑って言った。

＊

「最近和紗くんどう？ いいかんじ？」

穂香とベンチに座りながらランチを食べる。穂香のお弁当箱には彼氏が作ったであろう、彩り豊かな野菜やふわふわな卵焼き、小ぶりの豆腐ハンバーグなどが入っている。

「うん、今度水族館行くの。和紗くん好きなんだって、かわいいよね」

「いいね！ よかったよ満喫してるみたいで」

和紗くん特製本日のお弁当は鯖の塩焼き、きんぴらごぼう、ブロッコリー、ゆで卵と健康によさそうなものばかりだった。

「すごいよね、やっぱりAIだと自動的に健康志向になるもんなのか」

「彩りとかもすごい考えてくれてるよね、私にはできないよ」

「みんなAIと付き合えば健康になりそう」

和紗くんも穂香の彼氏も完璧に家事をこなしてくる。手伝おうとしても、仕事で疲れてるんだから休んでての一点張り。大樹は料理があんまり得意じゃなかったから、大学生のときに初めて作ってくれたお弁当は生姜焼きにウインナー、ご飯の上にはそばろと謎の目玉焼き。申し訳なさそうにせめてもの彩りとしてミニトマトが入っていた。ザ・男飯のような感じで、お弁当の蓋を開けた瞬間にフリーズした私を見て、友達は大爆笑。みんな私のお弁当の写真を撮っていた。

「なんかさ」

「どうしたの」

「和紗くんって完璧だなと思って」

「そりやA Iだからね。ネットのありとあらゆる情報が頭の中に入ってるし、なんていうか会話の最適解を常に出せるんだよ。だから喧嘩になることもない。そう考えれば、幸せじゃない？」

「まあそうなんだけど、なんていうんだろうな」

「家事全般やってくれて、気遣いもできて、博識で、もちろん性格も容姿も

自分好きな相手と付き合えてるんだよ。これ以上幸せなことなんてないよ」

「幸せか……」

私の幸せっていったいなんだろう。たしかに和紗くんは完璧な彼氏で、この先これ以上の人に出会えるかと聞かれれば確実にノーだ。それならどうして、不器用で気遣いとは無縁な大樹を思い出してしまっただろう。

「何が私にとっての幸せなんだろう」

＊

私と和紗くんは約束通り車で約三十分の水族館に来了。有名な観光地というわけでもなく、こぢんまりとした水族館ではあるが、地元民に愛されるような場所だった。

「きれいな水族館だね。ショーとかもあるんだ」

「私ここの水族館大好きなの。なんか寂しいときとか来たなあ」

「おすすめの魚何？」

「寿司ネタみたいに聞くじゃん。ショーもいいんだけど、私はクラゲの水槽が好き。ふわふわでかわいい」



「えー楽しみなんだけど」

そんな会話をしながら私たちはいろいろなブースを見ていった。昼食は水族館の生き物パンを売店で買って食べた。私はウミガメ、和紗くんはマンボウのパンに決めて、クリオネの水槽を眺めながら和紗くんは私にいろんな話をしてくれた。それは昼食を食べ終えても、いろんな水槽を見ながら魚の特性だったり豆知識だったり。私が知らない知識をたくさん教えてくれた。和紗くんは本当に博識だ。完璧な私の彼氏。でも私が思い出すのは、水槽を見ながらこれはアイツに似てるとか言ってはしゃぐ、かつての恋人の姿だった。ゆったりとした水の動きが、私たちの周りの時間だけを止めてしまっているようだ。

「美桜ちゃん、僕のこと好きじゃないでしょ」

クラゲの水槽に着くなり、和紗くんはそう言った。私は本当に時が止まったんだなと思った。誰もいない、クラゲだけが私たちの話を聞いている。和紗くんは悲しそうに笑っていた。私が和紗くんをこんな顔にさせてしまった。「美桜ちゃんがなんとなく僕に気がないのはわかってたんだ。僕と出会った

ときから。美桜ちゃんは元彼さんのことをずっと想ってるように見えた。僕にはわかるよ」

「私、私ね、本当に和紗くんのこと理想の恋人だと思ってた。かつこいいし優しいし、私が知らないこともたくさん知ってて、気遣いもできて、完璧で、私にはもつたいない人だと思ってる」

「もつたいないよ！ 美桜ちゃんのほうこそ、僕にはもつたいないくらいで……」

「そうじゃないの！ 完璧な和紗くんを見ると、些細なことで喧嘩したりしようもないことで笑ったりしてた日が余計懐かしく思えてくるの。大樹と付き合ってたときは楽しいことばかりじゃなかったけど、辛かったことも悲しかったことも私には必要だったと思う。和紗くんを嫌いになったわけじゃない。大樹にまだ情とか未練があると思われても仕方ないと思うし、最低なことだと思ってる。……本当にごめんなさい」

「……そっか。気づいてあげられなくてごめんね。僕はわからないんだ、A I だから。完璧な恋人と理想の恋人は違うんだね」

「でも、でも和紗くんと過ごした時間は楽しかった。本当だよ……嘘じゃないよ……」

「それくらいわかってるよ。ありがとう」

「和紗くん、別れてください」

まばゆい光が和紗くんを包む。まぶしくて目を瞑り、再び開くと和紗くんは消えていた。スマホにも【リソコイ】というアプリは無くなっていた。

「美桜!!」

そんなとき、私の名前を呼んだのは、忘れもしない私と五年間を共にした大樹だった。

「大樹……」

「美桜は絶対ここにいると思ったんだ。だってここは俺が告白した水族館だからさ。美桜は本当に誤解してるんだって！　お願いだから話聞いてくれよ

……」

私が連絡先をすべて消してしまったから、直接しか会う方法はない。大樹はきつと私に会うためにたくさんこの水族館に来たんだろうな。

「それで！ 証拠連れて来たんだ！ ほら」

大樹の後ろから現れたのは、色白で目が大きくて可愛らしい顔立ちの男の子だった。

「あの僕、恵っていいいます。大樹の高校の同級生で、メン地下やってて、あのリップ僕のなんです」

「え、え？」

「本当にごめんなさい！ 謝っても許されないのはわかってます。このリップ僕がファンの子にもらったもので、えっと、インスタにも載せてて、あとこれ僕の免許証です！ 本当に恵って名前なんです。ちょうど何人かで飲んでたときにリップ居酒屋に置いてきちやって、次の日取りに行ってくれたのが大樹で」

ものすごい勢いで恵は話し始めた。そして、証拠となる写真や当時の大樹との連絡のやり取りを順を追って見せてくれた。

「俺も美桜に誤解を生むようなことをしてしまったのは本当に悪いと思ってる。ごめんなさい。でもさ、もうちょっと俺の話も聞いてくれよ……」

そうだった。明るくて素直な大樹は嘘がつけない。五年も付き合っていて、私は大樹を信じてあげられなかった。

「ごめん、私もごめん……」

「また俺たちやり直せるかな……？」

「うん、やり直したい。五年記念もお祝いしたい」

そういつて私たちは復縁して、水族館を後にした。今までとは違う、清々しい気持ちで。

＊

俺と美桜はとくに過ぎていた五年記念日をやり直した。苺のタルトにビーフシチュー、カプレーゼ。俺の好きなものがテーブルにたくさん広げられている。美桜は本当に可愛い。一度も染めたことのない絹のようなさらさらな黒髪と、ぱっちりとした二重。面倒見がよくて怒ることはあっても、最終的には俺を許してくれる。どんなことをしても。

【あなたの理想が恋人になる。あなたの名前を教えてください】

『田中大樹』

【あなたの誕生日、年齢を教えてください】

『八月五日、二十歳』

【彼女の容姿を教えてください】

『黒髪（地毛）、二重、色白、身長…百六十センチメートル、体重…四十五キロ、清楚系アイドル顔』

【彼女のファッションを教えてください】

『ワンピースやロングスカートなど、女性らしい品のある服装』

【彼女の性格を教えてください】

『優しい、自立している、彼氏想い、面倒見がよいお姉さん』

【彼女の誕生日と年齢を教えてください】

『二月一日、二十歳』

【彼女の職業、将来の希望年収を教えてください】

『銀行員、四百五十万円』

【彼女の興味・関心を教えてください】

『料理』

【彼女の考え方の傾向を教えてください】

『現実的』

【彼女の感情表現の仕方を教えてください】

『喜怒哀楽ははっきりしていて、怒るときは怒る』

【要望があれば、入力してください】

『彼氏がどんなことをしても、最終的には許してほしい』

【理想の恋人が完成しました】

中村鈴蘭



## あとかき

本当のことを言いますと、このような内容を書くつもりはありませんでした。最初は純愛小説を書き始めましたが二千字程度で終わり、次はホラー小説を書きましたが三千字程度で終わりを迎えました。とりあえず、最後がどんでん返して終わるような作品を書きたくて、なんとなく書き始めたものがまさか完成してしまうとは、何があるかわかりませんね。さて、『理想の恋人』という事で理想のタイプを持つ人は多くいるかと思えます。私もあります。題名をつけたとき、最初は「完璧な恋」を描くつもりでした。でも書き終えた今、理想という言葉の裏には、必ず「現実」の影があるのだと感じています。誰かを愛することは、相手を思い描くことよりも、その人の欠けた部分を受け入れることなのかもしれません。AIのように整った恋人よりも、不器用で、言葉足らずで、それでもそばにいたいと思える存在こそが、本当の理想なのだと思います。書きながら、美桜や大樹、そして和紗の中に、自分自身の一部を何度も見つけました。理想を追いかけて、現実に戻って、

それでもまた夢を見る。そんな人間のくり返しが、きっと誰の心にもあるのだと思います。

この物語が、誰かの中の「理想とは何か」を少しでも揺らせたなら、作者としてそれ以上の幸せはありません。



匿名の人生

永田  
志生

午後五時を過ぎて、水平線と空の際がわずかに黄みがかつてきた。海水浴シーズンはとうに折り返しを過ぎたが、町で唯一の観光地であるこのビーチはまだそれなりに賑やかだ。夏らしい青さが残る上空にはジェット機が白くきらめき、飛行機雲ができたそばから消えていく。

今年で六十三歳。未婚、男。

小説家、そして作詞家としてデビューして三十五年。このごろ、体力の低下が仕事に影響を及ぼすようになってきた。この朽ちゆく肉体では、連載を抱えながら作詞の仕事をこなすのは難しい。

もし私生活が健康的で充実したものだっただんならば、こうはなっていないだろう。しかし独身の私のそばには生活を気遣ってくれる人などいない。なぜ病院通いになっていないのか不思議だ。それに、唯一私の暮らしぶりを知る出版社の社員たちも、ただ原稿を催促するばかりである。「孤高の作家」などと長年もてはやされてきたが、その実態はとにかく執筆と打ち合わせ、それから気晴らしの独り身小旅行を繰り返すだけの寂しいものであった。

そんな状況ではあるが、つい先月、単行本上下巻の出版をめたく終えた。

月刊文芸誌での三年にわたる連載は、なかなか骨の折れる仕事である。もう長編は書きたくない、しばらくは作詞で食っていくと担当に伝えると、「は」とだけ返された。老人の戯言だと思われたのだろう。私はしばらく出かけてくるとだけ言い残し、保養のためこの町へとやってきたのだった。

背後の山の方へと向かっていく飛行機を目で追いかけていると、目の前に立つホテルが視界を阻んだ。ここの海水浴客の大半は、このホテルの宿泊客でもある。私もまた、その一員だ。

そのままぼんやりとホテルを眺めていると、バルコニーに男の人影を見つけた。

五階の角部屋。あれは、私の隣の部屋だ。

男はカメラを構え、ファインダーを覗いたり顔を上げたりを繰り返している。歳は私と同じくらいだろうか。レンズはこちらのほうを向いている気がするが、シャッターは切っていないようだ。

まさか、彼は私が誰なのか気づいてカメラを向けている？

しかし、そんなはずはない。なぜなら私は、デビューから一度たりとも本

名も姿も明かしていない、いわゆる覆面作家だからだ。世間から孤高の作家などと呼ばれる所以はここにある。

それに、そもそも私の容姿は「どこにでもいる六十代」そのもので、特徴もなければ魅力的でもない。つまり、彼が私を被写体にする理由は全くない。おおかた、私ではなく背後の海を撮っているのだろう。

しばらくすると男は満足したのか、部屋に戻っていった。私も日光浴に飽きてきたため、そのまま客室に戻ることにした。

山田徳一。あるいは、野沢修二。どちらも私のペンネームである。私の覆面作家人生は、ひよんな思い付きから始まった。

約三十五年前、私がまだどこにでもいる普通のサラリーマンだったころ。雑誌で新人文学賞の募集を知った私は、文学部時代に未完のまま放っておいた「寄港」という小説に加筆し、応募することにした。昔から文章を褒められることが多く、作品の出来には自信があった。

それにもかかわらず、私は小説を書いていることを同僚や地元の同級生に

知られるのが嫌だった。思春期特有の恥ずかしさが心に深く根を張っていたのだと思う。そのため、応募の際には本名にはかすりもしない山田徳一というペンネームを付けた。

同じ頃、私はこれまた雑誌で見つけた新人発掘の作詞コンペに「真夜中の指輪」という題で応募した。歌詞は小説よりも字数が少ないため、正社員として働きながらも書きやすかったのだ。そして、もし小説と歌詞のどちらも受賞した場合、「ダブル受賞の新人」と注目を浴びても困ると皮算用し、野沢修二と名乗って応募した。

しかし、その皮算用は無駄にならなかったのである。応募から約一年後、私は一年で二つの作品を世に送り出すこととなった。小説は単行本として出版され、歌詞は売り出し中の歌手・河合明美の新曲に使われる。山田徳一、そして野沢修二という二人の作家が誕生した瞬間だった。

その後は会社を辞め専業作家になったが、シャイな私は本名や顔を出さなまま活動することにした。『寄港』と「真夜中の指輪」はどちらもヒットし、私は人気作家への道を駆け上がったといった。



夕食バイキングや大浴場を満喫したところで、エレベーターで部屋に戻る。ドアが閉まりかけたそのとき、ひとりの男が駆け込んできた。

「失礼、申し訳ない」

さっきの男だ。バルコニーでカメラを構えていたあの男。どこかで見た覚えのある顔だが、なかなか思い出せない。

記憶を辿りきれないうちに、エレベーターは五階に到着した。しかし、会釈して先に降りていく彼の横顔を見たとき、ようやく気付いた。

「丹波和彦さんですか、写真家の」

私は思わず声をかけた。彼の横顔は、有名写真家・丹波和彦の宣材写真と全く同じだったのだ。

しかし私はその瞬間、自分の発言を悔やんだ。覆面作家ならば、プライベートで声をかけられない心地よさを誰よりも知っているはずなのに、と。

「そうですか……。あら、さっきビーチにいた方かな、あなたは」

声を掛けられることは日常茶飯事なのか、さほど動じていない様子だ。そ

してこの返答からして、やはり先ほどは私のことを見ていたのだろう。

「ああ、いきましたか」

「これはいいところに。突然で申し訳ないが、実はひとつあなたに頼みたいことがありますてね。僕の名前に免じて、聞いてくれると嬉しいのですが」

彼は立ち話もなんだからと言って、部屋に通してくれた。窓の前に置かれた椅子に座ると、

「本当は下のバーで話してもよかったけど、面倒でしょう。もう一度降りるのは」

と言って、私の向かいに腰掛けた。

一息ついたところで、私が何者なのか名乗っていないことに気づく。挨拶のため口を開くと、先に彼が話し始めた。

「さて。単刀直入に言うと、あなたには僕の新作写真集のモデルになってほしいのです」

「はあ」

「知っているかもしれないけれど、僕は今までたくさん女優の写真を撮ってきました。しかし最近は少々考えが変わりましてね。少し違うものを撮ってみようと思って海を眺めていたら、あなたが歩いているのを見つけてビビってきたんです」

そうだ。この人はファッション雑誌の表紙写真や女優のポートレートで有名な写真家だ。なぜ彼が一般人を、しかもこの私を選んだのだろうか。

「それにしたって、私は被写体にふさわしいとは思えません」

「それは、撮ってみればわかることです。ちよつとそこに立ってみてくれませんか」

彼はそう言って、ベッドの前を指差した。言われるがままに立ち上がり背筋を伸ばすと、

「いや、かしこまらなくていいですよ。普段通りに立って、顔だけ少しこちらへ向ける」

と言われる。果たしてこれでいい写真が撮れるのか、疑問でならない。

「そんな感じです。じゃあ、撮りますよ……」

おそらく数枚しか撮っていないうちに、撮影は終了した。プロの手際の良さに驚いていると、再び窓際の椅子へと案内された。撮ったものを見せてくれるという。

「撮って出しますが。どうですか？」

カメラのモニターに映し出されていたのは、何の変哲もないホテルの客室に白髪の男が立っているだけのモノクロ写真だった。しかし、どこか懐かしい感じがする。私には妻も子供もないのに、家族旅行中の写真のように見えるのはなぜだろう。私はこんなにも自分の父親に似ていただろうか。

「……記憶の中の親父、という感じですかね。見当違いなことを言っていたら申し訳ないのですが」

「いや、その通りですよ。失礼を承知で言わせてもらうと、あなたの容姿は極めて一般的。どこにでもいそうな感じですよ。でもそれは時に、強い匿名性を発揮し、既視感を喚起させる。つまり、あなたの容姿は見る人に『誰なのかわからないが、いつかどこかで見た覚えがある』と思わせる力がある、ということですよ」

褒められているのか貶されているのかわからないが、ともかくこの写真が素晴らしい作品であることは確かだ。どれだけ私の容姿が平凡だからといって、写真の心得がない人が撮ってもこうはならないだろう。プロ写真家の力を見せつけられ、これなら被写体になってもいいかもしれないと思う。

「それで、撮影日時や場所などは決めているんですか」

「おや、乗り気になつてくれましたか？ 希望としては、徳島と北海道で撮りたいと思っています。知っているはずなのにどこかわからない、そのような場所で先ほどのような写真を撮るのです。もちろんギャラもお出ししますよ。……まあでも、そちらも都合があるでしょうから、僕の希望通りに撮るのは難しいでしょうね」

思わず、笑いだしそうになった。こんなにも私に都合のいいことがあるのだろうか。次の新作は紀行文で決まりだ。

「ぜひそのお話、受けさせていたきたい」

彼の顔に安堵の色が浮かぶ。

「本当ですか！ よかった。断られることを承知で提案しましたから」

「いえ、こちらにとつてもいい条件ですよ。そういえば申し遅れましたが、私は……山田徳一という名前で、作家をしている者です」  
プライベートの場でペンネームを教えるのは、三十五年の作家生活で初めての経験だった。

幸いにも彼は私の読者だったようで、「写真を発表する際に私の身元は明かさなくてほしい」「撮影地を特定できないようにしてほしい」という要求をすんなりと受け入れてくれた。予想外の事態がとんとん拍子に進んでいることに心底驚くが、私も早く最員の出版社に紀行文の執筆計画を連絡せねばならない。どこか一社くらいは掲載したいと言ってくれるだろう。あんなにも連載に苦労していた過去の自分がまるで別人のようだ。

私は二日後に帰るため、一度別れてそれぞれ準備をすることになった。丹波さん曰く、撮影場所の許可取りや宿の手配などは彼の事務所で済ましてくれるという。

私も出版社での打ち合わせや執筆の計画、それから旅に必要なあれこれを

揃えるために忙しく走り回ることとなった。長年の座り仕事がどれだけ人の体力を奪うものであるか実感したが、氣力が失われることはなかった。

三か月後、私たちは羽田空港で落ち合った。

丹波さんはひとときわ目を引く洒落た秋服で現れた。同行者の自分まで目立ってしまうのではないかと不安になったが、多くの人が行き交う空港において私たちは群衆の一部でしかなかった。

撮影は十一月と十二月の予定で、初めの一週間は徳島で撮影する。そして丹波さんの仕事のため一度東京に戻り、撮影はしばらく休みとなる。その後は北海道へと向かい、稚内に滞在する。

徳島では、丹波さんの仕事仲間でありコーディネーターの吉岡さんという方が全面的に協力してくれるという。彼は徳島出身の四十代で、私のことは撮影に参加する友人として伝えているそうだ。

徳島空港の到着ロビーで吉岡さんと合流すると、さっそく名物である渦潮の観光船へと向かった。船上にて、大迫力の渦潮を前に「ぼく、晴れ男なん

です！」と誇らしげにしている吉岡さんが妙に面白く、丹波さんと共に大笑いしてしまった。

その後も吉岡さんの周到な事前準備により、美術館や人気の居酒屋などを楽しむことができた。一日目から順調な滑り出しで、紀行文の出来にも期待ができそうだ。

翌日、私たちは美馬市脇町へと向かった。そこは江戸時代の商家が立ち並ぶ地域で、今日はとある旧宅での撮影を行う。

大きなリュックを背負ったまま手際よく受付をする丹波さんには、プロの風格が漂っている。ギイギイと鳴る床板を踏みしめながら離れに入ると、古い木材といぐさの香りに包まれた。中庭から柔らかな秋の日差しが差し込む縁側が、今日のメインの撮影場所になるようだ。生活感を出すため湯呑や本、竹箒などの小道具を設置し、光源のチェックを済ませるとすぐに撮影が始まった。

まずは部屋の中央で机と座布団を使ったポーズを撮る。丹波さんの指示を



聞いて、中腰になって片手で座布団の端を持ち上げたり、老眼鏡と新聞を持ちながら座ろうとしたりする。今日の撮影テーマは「年老いた実家の父親や幼少期に見た祖父を想起させる感じ」とのことなので、普段よりも少しだけ背中を曲げてみた。これは丹波さんだけでなく、後ろで見ていた吉岡さんからも好評だった。

室内での撮影が済むと、次は縁側に出る。モノクロ写真は光と影のコントラストが重要らしく、陽光がきれいに差し込む縁側は丹波さんにとって絶好の撮影スポットだという。ここでも座ったり立ったりを繰り返して、さまざまな角度から撮影する。時折外から聞こえてくる鳥の声で心を安らげつつ眠気に抗っていると、まどろむ感じもいいですねと言われて少し恥ずかしくなった。

長めの昼休憩を挟んで、午後からは庭での撮影が始まった。西日の中、縁側からの出入りの場面や、私が竹箒で掃除している様子を撮る。暮らしの中のなんてことない動きを再現していると、自分が昔からこの家に住んでいたのではないかと錯覚してしまう。そのまま家の主になったつもりで、夕飯は

何を食べようか、買い物に行く必要があるな、などと妄想していると、「いい表情ですよ」という声が飛んできて可笑しかった。

初日の撮影は無事に終わり、翌日は別の旧家にて喪服を着て撮影することになった。親戚の家での法事をイメージしているそう。朝からどんよりとした曇り空が広がっていたが、丹波さんは「昨日とは違う写真が撮れる」と喜んでいた。

食器やビール瓶が置かれた机の前に座ったり、縁側で煙草を吸う仕草をしたりと、たくさんの小道具を使いながら法事の日場面を再現していく。途中で、雨が降ってきて急いで雨戸を閉めたが、丹波さんはこの瞬間もしっかりとカメラに収めていたようだ。

翌日は、次の目的地である剣山へ向かう準備のため、撮影は休みだった。しかし丹波さんたちは忙しそう、私だけ休んでいるのも申し訳なく思い、執筆作業を進めた。

そして翌朝、私たちは紅葉シーズン真っ盛りの剣山へと出発した。もとも、モノクロ撮影をしたい丹波さんに紅葉はあまり関係がないようだったが、紀行文の取材を兼ねている私にとっては心躍る目的地だった。

しかし、山の天気は実に変わりやすい。晴れていたのもつかの間、リフトに着くころにはうつつすらと雲が広がってきていた。吉岡さんの晴れ男宣言はどこに行ってしまったのだろうか。

リフトを降りると、いよいよ登山がスタートした。初心者向けの遊歩道コースを進むにつれて、霧は濃くなっていく。もはや紅葉どころではない。体力も登山経験もない私だったが、道が整備されていたため一時間半ほどで山頂に着いた。結局霧が晴れることはなかったが、丹波さんは「表紙に霧の写真を使おうと決めていたからちよほどよかった」と嬉しそうにしている。私が休憩している間、丹波さんは人がいないタイミングを見計らって霧中の山並みを撮っていた。その後の私の撮影ではやけに顔ばかり撮られたが、帰りの車で「疲労した顔を自然に撮るための登山だった」と種明かしされた。

翌日は休養日で、私は旅館で紀行文の続きを書くことにした。紅葉がすぐそばに見える広縁の椅子に腰掛け、登山で疲れた脚を休めながらこれまでの体験を記していく。丹波さんが場所を特定できないように撮影しているおかげで、私は身元の特定を恐れずのびのびと各地での出来事を書くことができた。

ふと、もしこの紀行文が成功すればエッセイ連載の話を持ち掛けられるかもしれないな、などと調子のいいことが頭をよぎったが、これは気晴らしに飲んだビールのせいだろう。吉岡さんがおすすめてくれたすだちの地ビールは、執筆のよいお供になってくれた。初日の渦潮から霧の剣山、宿泊先での食事までしっかりと書き記し、明日のフライトに向けて床に就いた。

早くも徳島を発つ日がやってきた。

空港内で昼食をとりながら、私たちは吉岡さんとの別れを惜しんだ。思えば、初対面の人と山を登るなんて、不健康で孤独だったこれまでの私では考えられなかったことだ。「次の撮影も楽しんでください」という嬉しい言葉と

ともに送り出された私たちは、羽田へと飛び立った。

十二月中旬、私たちは北海道稚内市にやってきた。ここは丹波さんの生まれ育った土地である。ここからは私と丹波さんの二人旅だ。

稚内空港に着いたのは昼過ぎだった。レンタカーの手続きを済ませ、丹波さんの運転で宿に向かう。荷物を下ろしたあとは近くの食堂に入った。

丹波さんの地元での知名度は抜群で、出会う人々は皆スターの帰郷を喜んでいた。あまりにも注目を浴びるので少し困ってしまったが、そのたびに丹波さんが「仕事で来た」と言ってくれるので私の職業がバレることはなかった。

その日の夜は、行きつけだというスナックに連れて行ってもらった。客は常連ばかりだったが、雰囲気の良い店だ。

酔いが回ってきたころ、ママが私に「丹波さん、すごく歌がうまいんですよ」と言ってきた。丹波さんは近くにいた常連におだてられ、せっかくだからと十八番を披露してくれることになった。

拍手の中、イントロが流れ出す。その瞬間、思わず声が出そうになった。「真夜中の指輪」作詞、野沢修二。

三十五年前の私が書いた歌詞を、丹波さんが艶やかな声で歌い上げる。そこには、かつてこの曲で一世を風靡した河合明美の姿が重なる。私はこのときようやく、丹波さんと河合明美が元夫婦だったことを思い出した。

「元妻の曲が十八番だなんて、未練がましくて嫌な男でしょう」

私が野沢修二だと知らない丹波さんは、常連たちの歓声を浴びながら席に着いた。

「いや、とてもいい歌声でしたよ。あのころの河合さんが宿っていた」

自分が初めて書いた歌詞が、自分の知らない土地で歌い継がれている。時や場所を超え、今この最北端のまちで。私の書いた言葉は、誰かの人生に存在し続けている。

もし私が野沢修二だと明かしていれば、スナックカラオケの日常風景をことうやう眺めることはできなかっただろう。偶然が重なり合い、この光景に立ち会えたことを私は心から嬉しく思った。

翌日、私たちは丹波さんの実家が建っていたという場所で撮影を開始した。そこは既に広い空き地になっており、積もった雪から雑草がぼさぼさと飛び出している。撮影許可について訊くと、丹波さんはいたずらっ子のような笑みを浮かべながら「地元はいいですよ。みんな協力してくれるから」と言った。

これまでの撮影ではずっと私服を着ていたが、稚内では丹波さんに見繕ってもらった服で撮影する。雪に不慣れな私が選ぶアウターや靴は、地元の人から見るとどうも観光客らしすぎるというのだ。

そんな地元仕様の装いで撮るのは、「ブレ」を使った写真だ。被写体の輪郭を曖昧にし、記憶の遠さを表現するという。カメラのことは詳しくないが、三脚で固定したカメラのシャッタースピードを下げ、私が少し動くとき図的にブレた写真が撮れるらしい。

それを撮り終えると、今日一番の大仕事の時間がやってきた。

「では、いきますよ」

合図とともに、私は走り出した。丹波さんはカメラを持って追いかける。幼少期の追いかけっこの記憶を写真で再現する試みだ。

走るといっても、若者の駆け足にも満たないスピードだ。それでも、丹波さんに言われた通りに手足を大きく動かせば、必死さが演出できる。重たい曇り空と殺風景な空き地、そしてがむしやりに走る老人が寂寥感で結びついてゆき、奇妙な調和を生み出した。なんとか走り抜けて丹波さんと顔を見合わせたとき、これはいいものが撮れたと確信した。

明朝、丹波さんの運転で大沼を訪れた。春や秋はバードウォッチングで賑わうが、十二月に訪れる人はほぼいないという。今日は晴れているものの、マイナス五度の風が鼻先や耳に痛みをもたらす。結氷した水面には雪が積もり、まるで大地のようだ。日が昇りきって照り返しがきつくなる前に撮影を済ませる。

午前中のうちに稚内港周辺に戻ると、港を背景に数カット撮影した。閑散



期のため周囲に観光客はおらず、撮影はスムーズに進んだ。

キリのいいところで近くの飲食店に入り、昼食をとる。提供を待っている間、地元民らしき二人組の「明日は天気が荒れる」という会話が聞こえてきて、明日を撮休にしておいてよかったと胸を撫で下ろした。

店を出ると、雪が降り始めていた。このままホテルに帰る予定だったが、丹波さんがもう少し外で撮りたいと言ったのでフェリー乗り場まで歩くことにする。

港には濃紺と茜色のラインが入ったフェリーが停泊していた。あれは利尻島か礼文島への便だという。いつかフェリーに乗って小説の取材先に行くのもいいなと思っていると、カメラを構えた丹波さんが「寒いですけど、もう少しそのままぼんやりしててください」と言って笑った。

丹波さんの創作意欲に動かされ、自分の作品が愛されているさまを目撃した私は、もう長編は書きたくないと思っていたことなどに忘れていた。

二人組の話どおり、翌日は一日中強風が吹いていた。せっかくの撮休にも

かわらずどこにも出かけられなかったが、カンヅメで執筆を進めるのには都合がよかった。早いもので、明日はもう撮影最終日だ。

この旅最後の撮影地は、私のリクエストで宗谷岬にしてもらった。ここで朝焼けを見てみたかったのだ。天候はすっかり回復し、丹波さんの運転に身を任せて海沿いを走っていく。

左手一面に海が広がる一本道を進んでいると、突然「ほんの少しだけ窓を開けてみてください」と言われた。車内の暖かさを逃がしてしまうのではないかと疑問に思いつつ、わずかに窓を開ける。すると、夜明け前の透き通ったような冷たい風が車内に細く流れ込み、頬を撫でた。籠っていた熱から解放されたような感じがして、非常に心地よい。

「どう？ 気持ちいいでしょう。ちょうど暖房で顔が火照ってくる頃だろうと思って。冬に帰ってきたときはよくやるんです」

そう言って丹波さんは窓を閉め、暖房の温度を下げてくれた。何気ない出来事ではあるが、北の寒風を心地よく感じられたのはこのときが初めてだっ

た。私はこのことを絶対に紀行文に書こうと思った。

出発から三十分ほど経ち、駐車場に到着した。ここからでもあの有名な三角形のモニメントが見えるが、もちろん無人である。あまりにも寒いので、日の出時刻になるまで車の中で話しながら待つことにした。

「そういえば、なぜ徳島と稚内で撮影しようと思ったんですか」

昨夜、紀行文の続きを書きながら考えていたことを訊いてみた。もう何日も一緒に撮影しているが、丹波さんがロケ地の選定理由を語ったことは一度もなかった。

「それは、あなたが僕の父に似ている気がするから、ですね」

「……どういことですか？」

「はじめて海岸であなたを見たとき、僕が子供のころの父がそこにいると思いました。見た目は全く似ていないのに、なぜか父の姿が僕の中で蘇ったんです。だから、僕が生まれ育った稚内、そして親戚の家があつてよく訪れていた徳島であなたの写真を撮り、僕の記憶の中にある曖昧な父の像を形にし

ようとしたんです」

「じゃあ、この写真集は丹波さんがお父さんを思い出すためのものなんですね」

「そうとも言えます。でも僕は、これまで撮ってきたあなたの写真が、単に僕の記憶の再現に留まるものではないと思っています。……前にも同じようなことを言いましたが、あなたの容姿は見た人の既視感を喚起します。そんなあなたを『どこなのかはわからないが、知っているような風景』で撮れば、写真を見た人があなたの姿に記憶の中の人を重ね、その人を思い出すきっかけになると思ったんです。ぼやけたような写真をたくさん撮ったのは、記憶の曖昧さとリンクさせるためです」

私の写真を見た誰かが、私を通して大切な人を思い出す。これは私がこれまでの作家人生でやってきたこととよく似ている。私の写真を見る人は、私を介して大切な人を見る。それと同じように、私の作品に触れる人もまた、私の作品を介して自分の人生を見る。私というひとりの人間のことは、誰も見ていない。

それでも私は、私が持つ全てを駆使して誰かの人生に寄与する。小説で、そして歌詞で。たとえ最期まで本当の私を知る人が現れなくても、いつまでも書き続ける。

輝く朝日を背に、最後の一枚を撮ってもらった。逆光で顔は全く見えないが、これこそ私を象徴する一枚だ。丹波さんの写真と私の作品がこの岬を超えたはるか先まで届くことを祈り、その場を後にした。



あとかき

この世には、心地のよい孤独が存在する。

旅行先の知らない電車でもどろむとき、映画館で着席して一息つく瞬間、混雑するデパート下の総菜売り場を通り抜けるとき。誰に注目されるわけでもなく、ただ行き交う人々の一部としてその場にいることを心地よいと感じる。しかし、もしその孤独が一時的なものではなく、何十年も続くとしたら？  
そもそもなぜ、孤独を心地よいと感じるのか？

本作の主人公「私」は、覆面作家として活動している男だ。名の通った作家だが、彼の周りには彼がかの有名な「山田徳一」、そして「野沢修二」であると知っている者はいない。彼は素顔で街を歩けど、誰に声を掛けられることもない。覆面作家であり続ける限り、「心地のよい孤独」を享受し続けるのだ。

三十五年の匿名人生で獲得した「何者でもない自分」を初めて他者のため

に使うとき、はたして彼は何を思うのか。

丹波和彦がぼやけた写真ばかり撮るといふ設定は、「距離こそが懐かしさを生む」という話から着想を得た。遠い記憶が霧の中からわずかに顔を覗かせるとき、ふと懐かしさが湧いてくる。その瞬間を他者の胸の中に再現しようとする試みこそが、彼らがつくった写真集なのである。

丹波和彦の思惑は小説の世界を飛び出し、今そこにいるあなたの胸にもやってくる。彼が撮った写真がどんなものなのかイメージするとき、参照されるのはあなたが持つ遠い記憶だ。丹波和彦の写真、そしてそこに写る「私」を通して、あなたはどんな記憶に手を伸ばしたのだろうか。





ピーターパンが来ないから  
フレンチトーストをつくる

七輝

生まれてから早十四年。私の家の窓をピーターパンが叩いたことは一度もない。昔は信じて待っていた。窓を開けて、空を見上げて。でも結局、いつまでたつても来なくて。来たのは蚊だとか蠅ばかり。ピーターパンの靴の先さえも現れなかった。だから、私は大人になってしまふ。子供じゃなくなっちゃったから母さんを引き留められない。

母さんは看護師だから月に何回か夜勤に向かう。私が小さいときは頑張つて夜勤を減らしてくれていたけれど、中学生になったとたん夜勤に行くようになってしまった。一人きりの静かな家は不安と寂しさで満たされる。だから、私はおまじないをするようになった。寂しい夜を越えて明日を迎えるための、おまじないを。

第一夜　ピーターパンが来ないからフレンチトーストをつくる

勉強机に向かい、教科書の上を目が滑っていく。文字の羅列は何の意味も持たず、見たそばから頭から抜け落ちていく。右手に握ったシャーペンは、

もう五分以上も同じ場所で止まっている。頭の片隅にある僅かな思考力が、「このまま勉強は続けられるのか？」という議題を立てた。それに対し、心と身体は即座に「無理である」という結論を下す。無理なら仕方がない、と私はシャーペンを置いて、大きく伸びをする。体からぱきぱきと音が鳴り、大きく息を吐き出す。頭がぼーつとするほどの極度の疲労感だ。疲労感を言いつに、私は自然とキッチンへと向かっていた。

さて、今夜は何を作ろうか。この時間、母さんがいたら「こんな時間に食べないの！」って怒られる。だから、母さんがいない今日は特別。冷蔵庫をあさり、買い足されていた新鮮な卵と、賞味期限の近いヨーグルトを発見した。牛乳の代用としてヨーグルトを使って、今日はフレンチトーストを作ることに決める。頭の中では、コック服の私が、満足げな表情を浮かべるお客さん役の私に料理を説明している。すべて私一人の、虚しい一人芝居だ。

ボウルに卵とヨーグルトと砂糖を混ぜていく。泡だて器を卵黄に押し付けると、温かい橙色がボウルの中に広がる。静まり返ったキッチンに、泡だて器の金属がカシヤカシヤとぶつかる音だけが響く。顔を近づけると、ほんの

りと甘い匂いが漂ってくる。この匂いは、夜の静けさの中で私だけに許された密かな幸福の予感だ。卵液をタッパーに移し、いよいよ食パンを浸す。その前に、私はフォークで食パンにふすふすと無数の穴をあける。このひと手間が、卵液を早く、深く染みこませるための、夜食のプロとしての譲れないこだわりだ。

食パンを浸し終え、この浸している数分間を利用して、ボウルや泡だて器を効率的に洗う。もう染みたか、まだ早いか。迷いながら、意を決して食パンを慎重にひっくり返す。真っ白だった面は、卵液を吸って淡いクリーム色へと姿を変えていた。おお、と小さく声が漏れる。この劇的な変化の瞬間が、たまらなくわくわくするのだ。すぐにでも焼きたい衝動に駆られるが、もう片面も浸さなければならぬ。この待つ数分間は、まるで永遠にも等しい。待つ間におなががぐうと鳴る。晩御飯は食べたはずなのに。きっと、部活も勉強も頑張った私を「えらい、えらい」と褒めてやるための、身体からの正当な要求なのだろう。

ついにもどかしさが限界を迎え、焼きの工程へ。冷蔵庫から取り出したバ

ターを、フライパンへ落とす。バターは熱でじゅわじゅわと音を立てて溶け始め、その一連の音とともに、バターの甘くコクのある、どこか背徳感を纏った匂いがキッチン全体に充満する。バターは間違いない「幸せの素」だ。溶かしたバターを広げたフライパンに食パンをそつと置いた瞬間、じゅわああつと一層大きく、まるで喝采のような音が響いた。

「これこれ。やっぱフレンチトーストといったらこれでしょ」

焦げ付かないように弱火でじっくりと焼き、フライ返しでちらちらと確認すること二回。約三分待ち、三回目の確認で焼き色が深まったので、勢よくひっくり返す。火が通っていないクリーム色の面が隠れ、代わりにこんがりとした美しい黄金色の面が現れた。まばらになっていたバターの拍手が、再び勢いを増す。もう三分ほど待ち、お皿と飲み物の水を準備する。ちょうどいい時間だ。バターはフレンチトーストに吸収され、綺麗な焼き色のフレンチトーストが完成した。

テーブルまで運ぶのがもどかしく、キッチンで立ったまま食べる。行儀は悪いが、それも夜食の醍醐味だ。

「いただきます」

ぱちん、と誰もいないのに手を合わせる。ナイフをそっと差し込むと、じゅわっとバターがしみだしてくる。フォークで口元まで運ぶと、甘い匂いが鼻を満たす。ふうふうと冷ましつつ、満を持して口に入れる。

「はふ、はふっ。ん！ うんまあっ！ ははっ」

歓喜の声が漏れる。ヨーグルトを使ったおかげで、普段より少しさっぱりしている。バターと砂糖の甘みに、ヨーグルトのさわやかさが加わり、最高のタッグになっている。中心が少し染み込みが足りなかったが、それもまた全体の味を調和させるアクセントになっている。美味しすぎて無我夢中で食べ進め、十分もしないうちにフレンチトーストは消えてしまった。

「ごちそうさまー」

食器を洗いながら、口の中に残る甘さに幸せが続いている。こんな時間に食べたら太ることは承知の上だが、この深い幸せが味わるなら構わない。心もおなかもぼかぼかのおまじないが深く効いている。だからこそ、私以外の音が無い静けさにも、部屋の広さにも、目を瞑っていられる。トッピング

も無いし、盛り付けも映えなかったけど、熱々のフレンチトーストは笑っちゃうほど美味しかった。

ピーターパンが来ないから、私は一人で夜を越える羽目になる。

## 第二夜 ピーターパンが来ないから素麵をつくる

ただひたすらに暑い。体がぐったりとするほどの熱帯夜だ。外の気温は未だ三十度近くあり、こんな夜でも勉強しなければならないのが受験生のつらい定めだ。これだけの暑さでは、ピーターパンもさすがに飛べまい。窓を開けたらむわっとした熱気が入り込むだけだろう。机に向かい、ひと踏ん張りしようとしたところで、手元の麦茶が空っぽなこと気づく。イライラしながらコップを持ってキッチンへ向かう。ついでに何か食べちゃおうかな。暑い暑いとは言っても、夏バテとは無縁な身体であるのでおなかはやっと減るのだ。

「おまじない、おまじない。ちちんぷいぷい。あぶらかたぶら」



夏場に熱々のものは到底食べたくない。棚をがさがさとあさって見つけたのは、夏には冷たくさっぱり、冬にはぽかぽか温かく食べられる万能な食材、素麺だ。鍋に水を入れて、火にかける。トッピングを探して冷蔵庫や棚をさがさがさあさすると、見つけたのは白ごまと梅干しの二つ。このシンプルな組み合わせなら、濃いめんつゆではなく、白出汁で、あっさり風味で食べるのが最もふさわしいだろうと決める。

お湯が沸いてきたので、素麺を一束、ぼきつと半分に折って鍋に入れる。長いと焦げやすいのが面倒だし、短い方が吸りやすい。タイマーで茹で時間を計る間に、他の準備をする。冷凍庫から小口切りのねぎを出し、梅干しは種を取って粗めのみじん切りにする。種を取った梅干しを口に入れて転がし、「すつつぱ………」と酸味に顔をしかめる。種についている梅肉を舐めるのは、夜食の準備中における、ちよつとしたささやかな楽しみだ。

梅干しを切り終わる寸前、タイマーがけたたましく電子音を叫ぶ。「あー、はいはい。待つて待つて！」とタイマーに苛立ちを覚えながらも答え、火を止める。誰かに急かされるのは好きじゃない。コンロの前に立つと、鍋から

の大量の湯気が、湿った熱気となって一斉に襲ってくる。顔をしかめつつ、素麺をざるに上げる。暑い、暑い。この熱気を憎みながら、ざるに移した素麺を冷水でしっかりとみ洗いする。最初はぬるかった水は、素麺の熱を奪うことで次第にきんと冷えていき、手先から涼しさが体内に伝わってくるようになった。水の冷たさが肌から体内に染み込み、熱帯夜の苛立ちを沈めてくれる。

素麺をシンクに置いて待たせ、白出汁の用意をする。大きめの器に白出汁と水を目分量で入れていく。人に出すわけではないのだから、適当でいい。つゆが用意できたら、素麺をざるからそのまましゃっと移し、最後にトッピングの梅干しとねぎ、白ごまをざばつと振りかければ、白出汁素麺の完成だ。夜食に映えは一切必要ない。一に美味しさ、二に手軽さだ。三は特に思いつかなかった。

麦茶も用意し、手を合わせる。

「いた……あつ、氷入れようと思ってたんだった」

慌てて冷凍庫から氷を出し、つゆに放り込む。気を取り直して、手を合わ

せる。

「いただきます」

キッチンの灯りを反射して白く輝く素麺をすくって口へ運ぶ。

「んぐ、んん。冷たあい。生き返るわ」

この冷たさのおかげでのごしが最高だ。白出汁にしたことで全体的に柔らかくこざっぱりとしている。そしてなんととっても梅干しの存在感が大きい。最初にずっと酸味を伝えてくれるが、その後にくく白出汁と素麺が、この酸味を良い感じに調和させてくれる。完全に無くすのではなく、後味には梅特有のさっぱりとした風味を残してくれるのが最高だ。氷を入れたことでキンキンに冷えているのが、この熱帯夜にはさらにいい。キンキンに冷えた麦茶と交互に食べ進め、あつという間に食べ終えてしまった。

ふう、とおなかをさすりながら一息つく。満点、満腹、満足だ。この満足感が、私の心を守る盾となる。落ち着いたからか、ふと「これから」を考えてしまう。夏休みが始まれば朝から晩まで勉強漬けだとか、部活引退で運動しなくなるから太るかなあ、とか。色々な「これから」が思い浮かんできて

しまう。

「ああ、もう！ 関係ないっ！」

頭を振り、その思考をぼろぼろと振り落とす。関係ないのだ。未来のことなんて明日の私が考えればいい。今はただ、素麺のくれた幸福を抱えながら夜を越すことだけ考えればいい。だから、今やるべきことは後片付けだ。後片付けまで含めて、この夜のおまじないは完結するのだから。

ピーターパンが来ないから、私は私に私を押し付ける。

第三夜 ピーターパンが来ないから焼きおにぎりをつくる

はあ、と一つため息をついて、のそのそと緩慢な動作で食材をあさりだす。以前と私の様子が異なる理由はただ一つ、迷うようになってしまったからだ。何に？ 夜食を作ることに。おまじないを続けることに。周りも自分も、刻一刻と変わっていく。部活を辞めてから、見た目は変わらないものの、体重

は一・五キロほど増えた。それでもおまじないを止めることはできなくて、ずるずると続けてしまう。先週は、ニキビが二つ同時にできてしまった。自分が「ちゃんと」できてないんじゃないかって不安で眠りにつけなかったこともある。夏休みだって友達と一緒に夏祭りに行けたし、母さんとは映画とハイキングに出かけた。ちゃんと楽しくって、充実した夏休みを過ごせたのに。その思い出が押しつぶされちゃう。なんだか、最近ずっと上手くいかない。どうして、止まれないんだろう。どうして、大人になっていくんだろう。

ピーターパンの薄情者め。私の手を引いて、連れ出してはくれない。

夜食づくりも、以前のように積極的に頑張る気になれない。でも、全部を諦めてしまうのは、多分違う。もしかしたら明日の朝、後悔するかもしれない。明日の私は「馬鹿、何で食べちゃったの」って責めるかもしれない。それでも、作っているとき、食べているときだけは必ず「幸せ」だから。この幸せがある限り、いつか、きつと何とかなるって自分を励ますんだ。

「久しぶりに、焼きおにぎりとか食べたいかもな……」

ぼそりと呟く。私が食べたいと言ったのだから、焼きおにぎりで決まりだ。

明日の私が今日の私を責めるのなら、今の私が今日の私を甘やかしてあげなければ。

そうと決まれば、さっそく作ろう。まずは冷凍ご飯を電子レンジで解凍する。ブウウンと電子レンジが作動する中、冷蔵庫にあった一つのタッパーを手取る。ふたを開けると、中には母さんが作ってくれた南瓜の煮ところがし。作り置きのものは食べてもいいって言われてるし、ちよつともらおう。大きくごろごろとした南瓜を四つほどお皿に移す。電子レンジはまだ音を立てて働いている。手持ち無沙汰に、お皿の上の南瓜をじつと見ている。それは目にいたいほどの鮮やかな朱色をしていて、どこをとつてもつやつやと綺麗だ。流石は秋の色だなと、ぼんやりと思う。いつの間にか季節は進んでいた。そういえば街路樹も紅葉が進んでいたかもしれない。

ピーツ、ピーツ、ピーツと電子レンジが知らせ、扉を開ける。熱いご飯をあちつ、あちつとわたわたしながら取り出し、ラップを開く。ぽわつと湯気が立ち上るとともに、お米のいい匂いが漂ってくる。ほかほかと湯気を立てるご飯をお茶碗に移したら、醤油、みりん、和風だしを混ぜていく。白米が

調味料で均一に色づくように、しつかりと混ぜ終えたら、もう一度ラップで包んでおにぎりにしていく。ぎゅっ、ぎゅっと、焼いてる間に崩れないよう少し固めに握っていく。そうして握ってできたのは、綺麗な三角形ではなく、すこし、いやかなり丸っぽいおにぎりである。昔から、どう頑張っても三角にならない。いびつな形。だが、これもまた愛嬌というやつだろう。

お次はいよいよ焼いていく。フライパンにごま油を敷いて温まってきたら、直前に握ったおにぎりをそっと置く。焼きおにぎりがフライパンに触れると同時に、ぱちっ、ぱちっとはじけるような小気味良い音と、じゅううと唸るような重低音が合わさって聞こえてくる。その音とともに運ばれてくるのは、醤油の焦げる香ばしい香りだ。この匂いに抗うことはできない。思わず涎をぐくと飲みこんでしまう。じゅうじゅう、ぱちぱち。おなかまで共鳴し始めた。

五分ほど経ち、焦がしすぎる前に一度ひっくり返してみる。慎重にフライ返しを差し込み、こびりついていないことを確認して優しくひっくり返す。現れた面は、醤油の色が濃くなりつやつやと光っていた。そしてなにより、

全体的に綺麗な焦げ目がついている。濃い目の茶色と黒い焦げ目のコントラストがたまらない。多少焦げのあまい所もあるが、このアンバランスさがまたいいのだ。

この間に最初に出しておいた南瓜を電子レンジで温める。焼き終わってから温めるとおにぎりが冷めるし、温めなおしてから焼いたら逆に南瓜の方が冷めてしまう。焼きおにぎりも南瓜もどっちも温かい状態で食べたいからね。三十秒、二十秒、十秒、五、四、三、二、一。ゼロになった瞬間に扉を開ける。お皿を取り出すと、湯気につて南瓜の甘い匂いが強く漂ってくる。ほくほくとしていて、冷蔵庫から取り出した時よりも幾分か美味しそうに見える。南瓜が温まったので、残るはおにぎりだけだ。時間的にはもうそろそろいいはずだと判断し、もう一度フライ返しを差し込み、ぽんと軽くひっくり返す。

「よしっ」

現れた面にもこれまたこんがりと焼き目がついていた。これは上出来と言っていい。いそいそと焼きおにぎりをフライパンから南瓜のお皿へと移す。



これで完成だ。食べる前にコップに一杯、冷たいほうじ茶を注ぎ、しっかりと手を合わせて、

「いただきます」

まずは焼きおにぎりから。ふうふうと冷まして、いざ！

「はふっ。………うん、うん、うまい」

醤油の香ばしい匂いとうっすら香るごま油の匂いが鼻を抜ける。外はパリッと固いの、中の方は柔らかいまま。醤油に、焦げの食感やちよつとした苦みがアクセントを加えてくれる。大満足だ。ここで、南瓜を一口いただく。大きくごろんとした南瓜に箸を入れると、ほろほろっと崩れていく。わくわくしながら口に運ぶと、それはもう美味しかった。南瓜本来の素朴な甘みに、噛むたびにぶわっと染みこんでいた煮汁が押し寄せてくる。ほくほくの南瓜と甘じよっぱい煮汁は、どちらもほつとするような、安心感を与える組み合わせだ。口の中が混雑したこのタイミングでほうじ茶を一口飲む。すっきりとした口当たりが、口の中をリセットしてくれる。そしてまた焼きおにぎりをほおぼる。この心地よいサイクルが、私を不安から遠ざけてくれる。

おまじないをやめたくない、でも、やめたい。自分のことなのに、あんまりよくわからない。どうすればいいのか誰も教えてくれないから、苦しいのかもしれない。でも、もし誰かが「やめろ」って言ったら、やめるのかな。

「美味しかった。ごちそうさま」

美味しかったんだよ、本当に。幸せだったの。この幸せはちゃんと明日に持ち越せるかな。持ち越せたなら、明日の私は今日の私を責めないのに。

ピーターパンが来ないから、苦しい。

#### 第四夜 ピーターパンは来ないけど

受験まであと二週間を切った。刻一刻と迫る時間に、いくらやっても勉強が足りない気がする。焦燥感とイライラがぐるぐると身体の奥底を埋め尽くす。うう、とうめき声を上げつつ、どさっと勢いよく机に突っ伏す。ごとんと額がぶつかる鈍い音がしたが、痛みを感じる気力もない。ノートに頬をぺたりと押し付けたまま、はああ、と深く大きくため息をつく。

「疲れたあ」

ぼそりと絞り出すような声で呟く。もし落ちてしまったら？　これまでの努力が報われなかったら？　不安が無限に広がり、そつと目を閉じる。まだ寝るには早いし、眠くもない。ただ単に、何もかもが億劫で、やる気が起きないだけだ。

そのまま何分経ったのか。コンコンと部屋の扉が控えめにノックされた。私はのっそりと顔を上げながら「なあにー？」と返事を返す。すると、ガチャリと扉を開けて母さんが顔をのぞかせた。

「勉強ちゃんと頑張ってるー？」

「今やってる！　なんか用？」

私は少しむっとして、苛立ちを滲ませながらぶっきらぼうに答える。そんな態度を、母さんは気にした様子もなく続けた。

「今、卵焼き作ったら食べる？」

「……えっ、なん、なんで？」

私は不自然なほど動揺してしまった。夜食を食べていることがバレたのだ

ろうか？　心臓がドクドクと鳴り、この音量が母に聞こえてしまうのではないかと不安になる。

「勉強頑張ってるなら夜食にどうかなと思って。いらなかった？」

「……いる」

少し不貞腐れたように言う。私の夜食は、誰にも知られてはいけない特別な行為、秘密のおまじないだったはずだ。母の「夜食にどうかな」という普通の一言は、それが怒られるようなものでもなく、ただのありふれた夜食だと思い知らされたような気がした。私がきらきらした宝石だと思っていたものは実は安価なプラスチックだった、というような、ひどい落胆に襲われる。私の不機嫌が伝わったのか、母さんが少し眉を下げて言う。

「別に、無理に食べなくてもいいんだよ？」

「食べたいから食べるの！」

対照的に私は眉を上げて投げやりに答える。まるで子供の八つ当たりだ。大人になりたくないとは思っていたけど、こんなふうに情けない形で駄々をこねる子供になりたかったわけじゃない。自分の態度が情けなくて仕方な

い。

「そう？　じゃあ作っちゃうからね」

母さんは微笑みながら、そっとドアを閉めた。とんとんと階段を下りる音を聞いてから、私はがばつと勢いよくベッドに転がり込み、枕に顔を埋めて叫ぶ。

「んむうううう………」

たった二、三分のやり取りなのに、後悔の念が次から次へと押し寄せてくる。このままだといつまでも起き上がれないと確信していたため、無理やり反動をつけてベッドから起き上がる。運んできてもらうのはさすがに申し訳ないと思い、キッチンまで取りに行こうとするが、部屋のドアを開けようとして、ドアノブを握ったまま立ち止まる。やっぱり気まずい。運んできてもらう方がいいかな。ドアノブを握ったままの手から、ひんやりとした金属の冷たさが失われていく。大きく深呼吸し、ええい、ままよ！　とドアノブに力を籠め、勢いよく扉を開けて部屋を出た。

とん、とんと一段一段静かに階段を下りていく。キッチンへ向かうと、ふ

んわりと出汁と卵の混ざった食欲をそそる匂いが漂ってきた。キッチンではちょうど母さんが卵焼きを巻いているところだった。私が下りてきたことに気づいた母さんが、フライパンから私へと視線を移す。

「あれ、来たの。部屋にいてよかったのに。何かあった？」

「ん、いや別に。何となく」

ぶっきらぼうな返答に、母さんはただ一言小さく「そっか」とだけ返した。

「もうちよつとでできるから、待ってね」

そう言うとき母さんは視線を戻し、慣れた手つきで綺麗に卵を巻いていく。

じゅうじゅうと音を立てる卵焼きが黄色だけでないことに気づいた。

「あ、何か混ざってる」

「気づいた？ 特別にしらすとねぎも入れてあげたからね」

「へえ……ありがと」

「受験勉強頑張ってるからね。ちよつとしたご褒美」

母さんはこちらに視線を向けることなく言う。それが何だかとてもむず痒くて、居心地が悪くて、「普通だし」とまたもやぶっきらぼうに返事をしてし

まった。母さんは小さく笑ってから、「ほらできた」とまるで芸術作品のように角が整った卵焼きを見せてくれた。

「切っちゃうから、お皿出しておいで」

私は「はい」と間延びした返事をして、戸棚の中から少し小さめの平皿を取り出す。まな板の上では、一点の曇りもない完璧な卵焼きが、母さんの手によつて等間隔に切り分けられていく。ふわりと出汁と卵の香りが湯気に乗って夜の空気をやわらかく染める。

「………上手いね、卵焼き」

あまりに手際が良く、出来栄えが完璧だったため、気づいたら声に出ていた。すると、母さんは虚を突かれたようにきよとした表情で私を見たあと、ゆっくりと笑った。

「何さ、今更。昔から食べてるでしよう？」

「……でも、今思ったから」

「そう、ありがとうね。ねえ、覚えてる？ 昔のあんた卵しか食べなかったのよ。一時期卵以外は何を出してもいやだいやだって突っぱねる時期があっ

たの」

母さんは包丁を握る手を止め、懐かしむように遠い目を細めた。

「その時期があつたからよ、綺麗な卵焼きが作れるのは」

「……そんなの覚えてない」

ひどく照れ臭くって、目線をきよろきよろと動かしながら、気にしない風を装う。母さんはそんな私を気にせずに「ほら、できたよ」と皿を渡してくれた。綺麗に切られた卵焼きからは、まだほんのりと湯気が立っている。

「へへ、ありがとう。美味しそう」

「んむ、どういたしまして。ちゃんと美味しくできたよ」

「？ あつ、今切れ端食べた？」

「あはは、食べたよ、目ざといねえ。こういう端っこは、作った人だからこそ食べられる特別なところだよ」

そう言つて母さんは、いたずらっ子のような笑みを浮かべた。私もわかる。

特別なところ。きっと卵焼きの端っこには、作ってくれた人の頑張りや、愛情が詰まっている。だから、綺麗な断面だけじゃなくて、少し歪な切れ端も



私が食べたかった。ほんのちよつと残念。

ずっと聞きたかったこと、今なら聞けるかもしれない。

「……………ねえ、高校生になつたらさ」

「ん、なに？」

「えつと、その、お昼ってどうするの？」

本当は「お弁当作ってくれる？」って聞きたかった。でも、母さんは忙しいだろうし、万が一違つたらどうしようって思つて、怖くて。今だって母さんの顔を直視できない。

「そりゃあ、お弁当作るよ」

ぱつと顔を上げると、母さんは当然のここのような顔をしていた。

「まあ高校入つたら夜勤はちよつと増えるかもしれないけど、それでも作れるときは作るよ。……………なに、寂しくなつちやつた？　まだまだ子供だねえ」

「ちがう、気になつただけ」

少し声が震えちやつたかもしれない。でも、嬉しくつて、心から嬉しくつて仕方なかった。まだ甘えられるってわかつて安心しちやつた。私の頬も耳

も熱い。

「あつ、ありがとつ。夜食作ってくれて！」

箸をつかみ、ぱつと背を向けて逃げ帰るように部屋へ戻ると、まだ熱い頬をそのままに卵焼きを食べる。卵焼きの温かさがじゅわつと口の中に広がる。それとシンクロするように、母さんの声もゆつくりと心にしみていった。ねぎとしらすの入ったちよっぴり豪華な卵焼き。何だかいつもよりしょっぱい気がしたけど、すごくおいしい。涙がにじんで、気づけば頬がゆるんでいた。空っぽの皿を見つめるころには、あんなに重かった身体が、ポカポカしてほぐれたみたいに軽くなっていた。いつか、このおまじないのことも、笑って話せたらいいな。ピーターパンが来なかったから、料理が上手になったんだって。最後にばちん、と手を合わせたら、

「ごちそうさまでした」

ピーターパンは来ないけど、寂しくないよ。

## あとかき

皆さんは初めて食べた夜食を覚えていますでしょうか。私は小さな缶のぶどうジュースです。果たして〈食〉かと言われれば微妙な気もありますが、当時の十歳にも満たない私にとっては、深夜に親に隠れてこそこそと飲んだあのぶどうジュースこそが初夜食でございました。主人公は初めて夜食を作ったとき、どんな気持ちで、何を作ったのでしょうかね。

さて、この話の主人公にとって、〈夜〉は二つあります。母親のいる安心できる夜、そして一人きりの孤独な夜。これは私の主観ではありますが、一人きりの夜は、普段よりも音を気にするように思います。それは、防犯のためであったり、恐怖心によるものだったり理由は様々ですが、どんな小さな物音でも耳に入りやすくなります。冷蔵庫のモーター音や、救急車のサイレン。それらが孤独の中では大きく響き、時に不安を増幅させます。けれど、そんな夜だからこそ彼女は台所へと向かいます。食材を探す音、包丁の小気味よい音、油のはぜる音。それらは孤独を強調するどころか、むしろ「自分

がここに生きている」という確かな実感を与えてくれるのです。夜食を作るという行為が、彼女にとっては恐怖や寂しさを和らげるおまじないであり、自分の存在を支える小さな証でもありました。

この話を読んでくださった皆さんの心にも、それぞれの「夜食」が浮かべば幸いです。それは食べ物に限らず、音楽や読書や、ひとりの時間を支えてくれる小さな習慣かもしれません。夜を越えるための自分だけのおまじないを、どうか大切にしてくださいと思います。

最後までお付き合いくださり、ありがとうございます。



100万円のマジック

石橋わたる

道端で一人泣いている少女がいた。すると、通りすがりの男性がハンカチを差し出す。その男性が指を鳴らすと、一瞬でハンカチが一輪のバラへと様変わりする。

「おじさん、だあれ？」笑顔になった少女が問いかける。

「おじさんは、通りすがりのマジシャンさ」

カウンター席で一人うなだれて酒を飲む男がいた。名前は犬塚翔。普通の大学を卒業し、普通の会社就職し、順風満帆とはいかなくとも、平和で平凡な日々を過ごしていた。

あの日までは――。

「マスター、聞いてくれよ」

あからさまに肩を落としたような声が、店内にどんよりと広がる。BARの名は「シルトクレーテ」、名前の由来はマスターに何度か聞いたが、一向に頭に定着しない。

店内にはカウンター席に犬塚を含めて三人、店の奥側にあるソファ席に

カップルが一組と、深夜一時という時間もあつてか、かなり落ち着いた雰囲気である。

「なにか、お困り事ですか」

ここのマスターはとても綺麗な女性で、マスター目当てに来る客もそう少なくない。言わずもがな、犬塚もその一人である。仕事の愚痴をこぼしたり、人生相談をしたりと、特に趣味もない彼にとつて、ここでの時間はまさに至福の時間であつた。

「この前、付き合つてる子がいるつて話したと思うんだけど」

犬塚には付き合つて三ヶ月になる白鳥美香という彼女がいた。大学時代の遠い遠い友達、というか友達とすら呼べないほどの、語学授業で一緒だっただけの虎太郎だか虎之助だかいうやつからの紹介で付き合つた女性であつた。白鳥は決して美女ではなかったが、品があつて、知的な女性だった。

そして何より、犬塚と波長が合い、結婚するならこの人しかないといまで感じさせるような女性であつた。



そして、今から一週間前のことである。

犬塚は彼女からの「結婚したい」という猛アプローチを受け、プロポーズに踏み込んだ。確かに時期尚早な気はしたが、どうせ自分には白鳥しかいないと決め込んでいた犬塚にとって、遅かれ早かれ結婚するつもりだったため、決心をした次第である。何事も早いに越したことはない。

「こちらこそよろしく願います」

プロポーズは成功だった。

「でも弟の手術費に100万円必要なの」

プロポーズは失敗だった。

典型的な結婚詐欺だった。恋は盲目とはよく言ったものだ。犬塚は何の疑いもなく、貯金を全て彼女に手渡した。妻の家族を大切にするのは当たり前のことだと心の底から思っていたのだ。

その日は眠れなかった。100万円をあげたことなど忘れ、ただただ白鳥との婚約生活のことを考えては浮かれていた。おそらく寝てしまった彼女からの返信を楽しみにしつつ、目を閉じた。

しかし、朝になっても、夜が来ても、また朝になっても、返信が来ることはなかった。

事故にでもあったのではないか、そう思い、駅まで無我夢中で走り出す。白鳥の家までは二駅。いや、白鳥の家だと思い込んでいた場所まで二駅だった。

電車の中、自分の力では急ぐことができないという焦燥感に駆られ、唯一の共通の友達である虎野郎に電話をかける。

「おかけになった電話番号——」

すぐに電話を切る。そこにはただ認めたくない現実だけが宙に浮かんでいる。

それなのに、自分の足にはどつかりと重力がのしかかってくる、そんな感覚だ。

駅に着き、もう走るのはやめて、牛歩の如く、重く、ゆっくりと歩き、白鳥の家へ向かう。

「ただ、ずっと寝ていただけかもしれない」

そんな可能性は雀の涙ほどしかないとかわかっていても、犬塚はそう信じるしかない。

少し寂れたアパートの二階。一番角の日当たりの良い部屋。インターフォンを押す。扉が開く。俯いていた犬塚は一縷の望みを賭け、顔を上げる。そこには見ず知らずの老婦の姿があった。

犬塚は、頭が真っ白になった。

「……あの、白鳥、白鳥美香さんは、どちらに……」

絞り出した声は酷く掠れていた。

「白鳥さん？ 存じ上げないねえ、部屋間違いじゃないかしら」

老婦は犬塚を明らかに不審がり、警戒していたが、丁寧に対応してくれた。

「……でも、ここは二〇五号室ですよね？」

「ええ、そうよ。もういいかしら」

様子がおかしい犬塚を見て、危険を察知したのか、老婦は態度を変え、会話を終止符を打つ。

扉が閉まるのと同時に、犬塚の膝はマンションの廊下のコンクリートに沈

んだ。コンクリートの冷たさだけが残っていた。

「結局、恋人も貯金も全て失ったってわけですか」と、グラスを拭きながらマスターは犬塚に同情する。

犬塚は、タバコを取り出し、無心で火をつける。この苦さが今はちょうどいい。恋人を失い、タバコを始めた犬塚は、愛用しているシャツの胸ポケットにタバコを常備するようになっていた。

「ちなみに、その眼帯は……」

「ああ、これは最近泣きすぎて、目が腫れちゃってさ」

そんな会話をしていると突然、カウンター席の一つ空けて隣の席の五〇代ほどの男性に話しかけられた。

「その１００万円取り返しに行くというのはどうでしょう」

その男性はタキシードに、整えられた髭、白髪、丸メガネという、いかにもマジシャンを具現化したような人間だった。頭のとっぺんからつま先まで、胡散臭い見た目をしている。

「厄介な客に絡まれた」そう思いながら、マスターの方に視線を送ると、「やれやれ」という表情を浮かべながらもグラスを拭き続けた。

「マスターが止めないということは、そこまで悪いおじさんではないのだろう。これも何かの縁だ、話だけでも聞いてみるか」そう思い、エセマジシャンの話に耳を傾けてみる。

彼の名は猿川雅史、元マジシャンであると。

「私が君に協力してその100万円を取り返してやると言っているんだ。悪い話じゃないだろう？」

「あんたに何のメリットがあるんだ」と猿川の言葉に犬塚は怪しさを感じた。つい先日、結婚詐欺をされた男は、そう簡単に人を信じることはできない。

不審がる犬塚に対し、猿川は「ただの善意だよ、善意。困っている若者を助けたいだけさ」と陽気に振る舞った。

ますます怪しい。

「じゃあ、ゲームをしよう。マスター、紙コップはあるかい？」

猿川はそう言い、マスターから受け取った二つの紙コップを、底が上に向

くように、カウンターに置いた。

「タバコ、もういいのかい？」犬塚は猿川にそう言われ、灰皿に目を落とす。

「ああ、あんたの話に夢中で吸うのを忘れてたよ」

そう言いながら、タバコの火をグリグリと消した。

「それは申し訳なかったね」猿川は慣れた手つきで、タキシードの中から布製の赤いボールを取り出し、右側の紙コップにボールを入れる。そのボールは丁度スッポリ紙コップの中に収まった。

「カップ＆ボールという遊び、一度くらいやったことがあるだろう？」

カップ＆ボールという言葉は聞いたことがなかったが、おそらく、どっちにボールがあるでしよ的なあれだろう。

猿川は二つの紙コップをシャッフルしながら「もし君が、ボールがある方を当てたら、一杯奢ってあげよう。外したら、私と一緒に100万円取り返しに行こう。どっちに転んでも悪くはないと思うがね？」と提案する。

「100万なんて取り返せるわけないだろ。酒一杯奢らせて帰るとするか」犬塚は上手く乗せられ、勝負に応じる。

油断しているように思えるが、この間、犬塚はボールが入った紙コップから目を一時も離さなかった。

「さあ、どっちかね？」シャッフルを終えた猿川が問いかける。

「左だ」

「それは君から見て左かい？ それとも……」

「俺から見て左だ」

猿川は笑みを浮かべながらゆつくりと紙コップを上げる。

犬塚は自分の目を疑った。なぜなら、そこにボールがないからだ。

「どうやら私の勝ちのようだね」

猿川にそう言われ、悔しさのあまり右側の紙コップを持ち上げる。中には入っているはずのない赤いボールが。

「たしかに左側だったはず……」

驚く犬塚に対し、猿川はこう続ける。

「約束通り、一緒に100万円取り返しに行こうか」

「ああ、わかったよ。そのかわり、どんなズルをしたのか教えろよ」

「ズルとは人聞きが悪いな。簡単な話さ。最初から両方にボールが入っていたのだよ」

猿川はそう言い、左右両方の紙コップを持ち上げる。

たしかに、中からは赤いボールが二つ出てきた。

「でも、なんでさっきは左に入っていなかったんだ」

犬塚は絵に描いたように困惑していた。

「君は純粋な男だね。中のボールを紙コップと一緒に持ち上げたんだよ。古典的なマジックだが、ボールが一個だと錯覚していたら案外、引つかかるものだよ。最初からどっちを選んでも当てることはできなかったってわけさ」  
うすら笑いを浮かべ、猿川はさらに続ける。

「マジシャンが観客に何かを選ばせる時は、もうすでに答えは決まっているのだよ」

犬塚は腹が立った。

「ちなみに、私がタバコの問題を出した時に、君は灰皿に目を落としただろう？ その隙にもう一つのボールを紙コップに忍び込ませたのさ。まあ、い



わゆる、ミスディレクションってやつさ」

聞いてもないことをベラベラと。こういうおじさんにはなりたくないものだ。でも、きつと最終的には、自分になりたくないと思っただけで自分自身もなっていくのだろうなと思ってしまい、このおじさんに情が移ってしまった。

「おじさん、あんたの勝ちだ。100万取り返す策はあるのか」

「もちろんだとも。まず、君から金を騙し取ったのは、おそらく『Rabbit』だろうな」

「Rabbit？」

「ああ、最近、巷で話題の詐欺集団だ。結婚詐欺から振り込め詐欺、マルチ商法にネズミ講、闇カジノまで、その辺の犯罪は全てやっているとんでもないな」

「そんなやつから金をどうやって取り返すんだ？ 詐欺師に詐欺するなんてできるのか？」

犬塚は現実的に厳しいと考えていた。それは猿川も同じである。

「いくらマジシャンでもそれは厳しいな。だから今回狙うのは闇カジノだ」  
自信ありげな表情の猿川を見て、このおじさんならできるかもしれないと  
少しだけ思ってしまった自分に犬塚は落胆した。

しかし、ここまできたらやるしかないだろう。

「闇カジノの場所の目処は立っている。決行は明日の夜、もう日付が回って  
いるから今夜と言った方がいいかな？ このBARで落ち合おう」

「何で場所まで知ってるんだよ」

「マジシャンだからだ」

マジシャンはそんな便利な言葉じゃないだろう、と思いつつ、あまり詮索  
するのはやめた。

「では。マスター、会計は彼につけておいてくれ」

そう言いながら猿川は席を立つ。

「おい！ こっちは100万失って……」

そう言う犬塚に、猿川は間髪を入れずに「100万円は取り返すんだ。問  
題ないだろう？」

猿川はそう言い残し、店から颯爽と出て行った。

「やあ、待たせたね」

「何時間待たせるんだよ」

「許してくれ、マジシャンだから」

段々、マジシャンの定義が曖昧になっている気がする。

BARの外に出ると、一台の黒のファミリーカーが止まっていた。運転席にはおそらく犬塚より少しだけ年上だと思われるふくよかな男性が座っていた。

猿川が後部座席のスライドドアを開けながら「悪いね。木嶋くん。よろしく頼むよ」と挨拶をする。犬塚も状況が飲み込めないながらも「お願いします」と当たり障りのない言葉を車内に放った。

「猿川さん、あんたも人使いが荒いぜ」と木嶋はボサボサの髪をかきむしりながら小言を言う。

猿川は、木嶋の発言をひよろりとかわしながら、犬塚に一枚のカードを渡

す。

「カジノに入るための会員証だ。無くすんじゃないぞ」

顔写真付きのカードを渡され、どうやって作ったのか疑問に思ったが、聞いたところで返ってくるのはあの言葉だろう、と思ったので、聞くのはやめた。

しばらく車を走らせた後、「こここの地下にカジノがあります。俺はここで」木嶋はそう言って、二人を街のはずれにある廃墟ビルの前で車から下ろした。いよいよこの作戦が現実味を帯びてきて、犬塚は唾を飲み込む。

その緊張を察したかのように猿川は「大丈夫だ。君にはマジシャンがついている」と言い、ビルの中に足を踏み入れる。

薄暗い階段を下っているのに、心拍数は上がっていく。

「会員証を」

重そうな鉄扉の前でセキュリティが二人に声をかける。スーツ姿の上からでもわかるくらいムキムキの彼に刃向かったら、きつとひとたまりもないだろう。

予定通り、偽の会員証を見せるとボディチェックが始まる。特に大したもののは持っていなかったが、唯一、胸ポケットにタバコと一緒に入れていたライターだけが没収された。危険物は持ち込めないのだからか。

そして、意を決して鉄扉を開ける。やはり重かった鉄扉が開くと、遮断されていた光と音が一気に飛び込んできた。

耳をつんざくジャズのBGM。高揚感を煽るドラムとトランペットが、心臓の鼓動をさらに早める。

地下というだけあって窓は一つもなく、外の明かりは一切入ってこない。それなのに、至る所にあるスポットライト一つひとつが太陽のように眩しい。犬塚は、まるで異世界に来たかのような感覚に陥った。

先ほどまで居た薄暗いところから、急に明るいところにきたせいか、しばらく視界がやられてしまった。

心許ない視界で辺りを見回すと、身分が高そうな人や強面の人、テレビで見たことがある人がちらほらと、まさに闇カジノという雰囲気である。

カジノの雰囲気は圧倒されていると、カードゲームのディーラーをしてい

る一人の女性が目に止まった。

彼女もこちらに気づき、目が合う。白鳥美香だった。

白鳥は一度目を逸らしたが、ディーラーを交代してこちらを冷たい視線で拘束するように見ながら近づいてくる。

「どうぞこちらへ」

感情がないような声で、白鳥は二人をカジノの奥へ案内した。奥にはカジノの中でも一際目立つ、よく言えば煌びやかな、悪く言えば成金趣味の下品な扉があった。

そこはVIPルームだった。

白鳥は何の躊躇もなく扉を開けると、部屋の中にどっかりと座る男に耳打ちをした。

獲物を狙うような目つきで「君が噂の子か」とその男は犬塚に対し、圧倒的強者のような表情で語りかけた。色黒でオールバックの男は、入口のセキユリテイの一・五倍ほどの体格を有していた。

首元には光を反射するのではなく、まるで内側から光を放つように煌めく

ネックレス、右手にはおそらく売れば100万円は下らないであろう指輪を身につけており、金持ちを体現したような見た目であった。

「私はこの団体のトップ、鬼山だ。君の噂は聞いているよ。何でも、100万円も貰いでくれたそうじゃないか」

聞いてもいないのにベラベラと、うちのマジシャンと一緒にじゃないか、犬塚は思った。

「いきなりラスボスカ、クライマックスに向けて徐々に盛り上げていくのがエンターテイメントなのだが」

沈黙を貫いていた猿川がついに口を開いたかと思えば、またマジックの話だ。

「このカジノで100万円取り返そうって魂胆かな？　ちまちま稼いだってしょうがないだろう。ここはひとつ、私と勝負しよう」

鬼山はテーブルに移動しながら、さらにこう続けた。

「この勝負に君たちが勝ったら100万円返そう。その代わり、君たちが負けたら……わかっているね？」

犬塚は負けてしまったらどうなるのか想像もつかず、生まれたての子鹿のように足が震えていたが、隣の猿川は「うむ。いいだろう」と落ち着いた表情で答えた。

どうせ、マジシャンだから落ち着いているとでも言うのだろうか。

「勝負の内容は……じゃんけんだ。と言ってもただのじゃんけんではない」  
そう言うって鬼山はグーチョキパーそれぞれ三枚ずつあるカードを見せた。

「この計九枚のカードからお互い伏せた状態で三枚ずつ配られる。その手札を使って三回ジャンケンをして勝ちが多い方がこの勝負の勝者だ。もちろん、一度使ったカードは使えなくなる。引き分けの場合はもう一枚ずつ配られ、それで勝負だ」

「なるほど。手札の運と出す順番の戦略性が試されるゲームか。これなら勝ち目はあるんじゃないのか」

この犬塚の言葉に猿川は何か言いたげだったが、条件を呑み、勝負を受け入れた。

「ディーラーは君に任せるよ」鬼山は白鳥に目配せをして、カード配りを任



せた。

犬塚と猿川の手札はグー、グー、チョキの三枚。対して鬼山の手札はパー、パー、グーの三枚。組み合わせ的に鬼山がとても有利な手札である。

実際、普段ディーラーをしている白鳥であれば、たった九枚のカードを思い通りにコントロールすることは容易だ。

そのため、鬼山が有利な手札で、相手のカードも一方的に把握していると  
いう状況が出来上がる。

犬塚たちの手札をすべてグーに、鬼山の手札をすべてパーにしなかったのは、仕組んだことを怪しまれないためである。

「このゲームは運だからな。考えてもしようがないだろう」鬼山はそう言つて、パーのカードを裏向きにテーブルの中央に置いた。

鬼山がパーを選択したのは、相手の手札がグー、グー、チョキのとき、いきなりチョキを出して残りをグーだけにするのは人間の心理的に考えづらい  
と思つたからだ。

一方で、犬塚は猿川に選択を任せた。なぜなら彼はマジシャンだからだ。

猿川は右手に持つ三枚のカードから、真ん中のカードをそっと中央に置いた。

「セットが終わりました。ではじゃんけんポンの合図で、同時にめくってください。では、いきます」

「じゃんけんポン！」

猿川と鬼山は二人で発声したのと同時に、中央のカードをめくった。

鬼山のカードはパー。猿川はチョキだった。

「一回戦、猿川様の勝利」

「よし！ まずは一勝！」犬塚は喜びの声を上げた。

「いきなりチョキを消費するとはなかなかやるな。しかし、やつらの残りはグーが二枚。私はパーとグー。結果は一勝一敗一分けになる。サドンデスに持ち込めば、白鳥が私をかたせてくれるはず。この勝負、もらったな」

鬼山がそう確信していると、猿川の右手からひらりとカードが一枚テーブルの下に落ち葉のようにこぼれ落ちた。

思わず、その場にいた全員がカードに目をやる。落ちたカードはグーだった。

た。

「おっと、これは失敬」

「おじさんなにやっつてんだよ！ 相手にカードを見られるなんて一番やっ

ちやいけないだろう！」

「大丈夫さ。だってマジシャンだから」

そう言う猿川に不満げな犬塚だが、ゲームは二回戦へと突入する。

「じゃんけんポン！」

鬼山はグー。猿川もグー。

「二回戦、両者引き分け」

「引き分けか、次が勝利か引き分けなら……。もし負けてもサドンデスに行

くだけだ」

そう安堵する犬塚に対し、鬼山は「予定通り次は私が勝ってサドンデスで

も勝利だな」と心の中でにやりと笑う。

「では、三回戦参ります」

「じゃんけんポン！」

鬼山のカードはもちろんパー。猿川は亀のようにゆっくりカードをめくる。見守る犬塚は唾をのむ。

「勝ちを願ったって無駄さ。そいつの手はグー。私の勝……」

鬼山はそう言い切る前に言葉を詰まらせた。

猿川のカードはチョキだった。

「な、なぜ……てめえの手札はグー、グー、チョキだったはず」鬼山は白鳥の方を見る。白鳥も動揺していた。

「はい？ 私の手札はグー、チョキ、チョキでしたがね」と猿川はとぼける。周りが驚く中、この場で犬塚だけがタネに気づくことができた。

「そうか、カードを一枚落とした時に、テーブルの上のチョキと手札のグーを入れ替えたのか。これがあの時言っていたミスディレクションってやつか」と心の中で感心していると、鬼山が猿川に右手を差し出した。

「素晴らしい勝負だったよ。約束通り100万円は返そう」

なんともあっけなく負けを認めたことを不審に思ったが、二人は握手を交わす。

「とでも言うと思ったかコラ」

予想通り、鬼山は態度を変え、猿川の手を固くつかみ離さなかった。

後ろの扉からは続々とスーツ姿の男が入室してきては、二人を囲いだした。

「まずい、逃げないと」

犬塚がそう思ったとき、カジノの照明が一気に消えた。

「さあ、マジックの花形、脱出マジックの時間だ！」

聞いたこともないような大きな声で叫ぶ猿川とは裏腹に、犬塚は視界が真っ暗になり、動揺するが、猿川の「眼帯を外しなさい」という声に体が勝手に動いた。

カジノの明るさにも触れず、しばらく目をつぶっていた左目は、暗闇にもすぐに慣れた。

視界を失い、あたふたする鬼山の手を猿川から振り払い、カジノの外へ走った。

「二人ともこっちだ」

外には木嶋が車で待機しており、なんとか逃げ出すことに成功した。

「何とか逃げたんだけど、100万は取り返せなかったよ」

翌日、相も変わらず、犬塚は『シルトクレイテ』にてマスターに愚痴をこぼしていた。

「やあ」

声の方向を見ると、そこには猿川の姿があつた。

「結局、100万はだめだったじゃねえか」

「君はそう言うと思つてね。最後に私と勝負しよう」

猿川は両手をグーにして前に突き出した。

「両手どちらかに鬼山がつけていた指輪が入っている。売れば100万円くらいするだろう」

「最後の握手のときに盗んだのか」

「盗んだとは人聞きが悪い。当てられたら君にやろう。はずしたら私のものだ」

「左だな」

「それは君から見えて……」

「俺から見ただ」

猿川は選ばれた手をゆっくり開く。

空っぽだった。

「残念。私の勝ちのようだ。では」

猿川は犬塚の右肩をポンポンと二回叩き、姿を消した。

犬塚は自分の選択を後悔していると、猿川の言葉を思い出した。

「マジシャンが観客に何かを選ばせる時は、もうすでに答えは決まっているのだよ」

「あの野郎、最初からどっちにも指輪なかったんじゃねえのかよ」

苛立ちながら胸ポケットからタバコを取り出す。

タバコと一緒に、指輪がカウンターテーブルの上にこぼれ落ちた。

「一度失敗したと見せかけて、成功させる。これがエンターテインメントの基本さ」

猿川は一人でつぶやいた。

石橋わたる



あとがき

小さい頃からマジックを見るのが好きでした。新聞のテレビ欄にマジックの文字があれば、片っ端から録画しては、擦り切れるほど何度も見ていました。

動画配信サイトでも、マジックの動画を見ながら練習しては失敗しての繰り返しの日々を送っていた頃を懐かしく思います。家には折れまくりのランプと、折れ曲がったスプーンが多数。

親にマジックを披露すると褒められ、それが嬉しくて続けていました。当時の私にとって、マジックは生きがいの一つと言っても過言ではなかったです。

でも、いつからでしょう。マジックに興味がなくなっただのは。

年齢を重ねるにつれて、録画も動画も見なくなり、折れたトランプも曲がったスプーンも捨ててしまいました。時より、テレビでマジックが披露されていても、タネを見破ってやろうと斜めから見てしまい、純粹にエンターテイ

メントを楽しむという視点を失ってしまったのです。

今回、小説の題材を考える上で、自分のルーツを辿った時、マジックが思い浮かびました。自称マジシャンの猿川は、昔の自分になりたかった存在で、犬塚は今の自分だと思って書きました。猿川を書くにあたって、大切にしたのは、心の内がよくわからない奇妙さと昔の自分のようにエンターテイメントをこよなく愛する姿勢です。一方で、犬塚は今の自分のように、エンターテイメントに対して斜に構えているが、本当は心が躍っているという様子です。この犬塚の心情を描いているうちに、自分も心の奥底ではエンターテイメントに心が躍っていることに気づくことができました。

また、お気づきだとは思いますが、猿川（猿）、犬塚（犬）、木嶋（雉）で鬼山（鬼）を倒すという桃太郎要素が含まれています。その他、さまざまな工夫もあるので、そこにも注目して読んでいただけると幸いです。ここまで読んでいただきありがとうございました。



アシンメトリー

味噌

1

綺麗な子だな、と思った。

夜を全て閉じ込めてしまったのかと思うほどの艶やかな黒い髪、アイドルらしいツインテール。つけまつげをしているのか、生まれつきなのか分からない長いまつ毛。

「チャームポイントはにっこり笑顔です！ この笑顔でいろんな人をメロメロにしちゃいます！」

明るくて可愛らしく、良い意味で子どもっぽい声だ。

「みんなの理想のアイドルになれるように！」とか、アイドルになりたい思いを身振り手振りで伝えている。

他のオーディション参加者たちも、私と同じくその子から目を離せない様子だった。

もう少し、もう少しちゃんと見たい。顔を少し左に向けた瞬間、ぎし、と静寂のさなかにパイプ椅子の無機質な音が鳴ってしまった。審査員は私を一瞥する。

「では次、28番の方、自己紹介をお願いします」

いつの間にかその子のターンが終わっていた。……私の番だ。

「28番、宮口桃、東京都出身、十九歳です」

審査の中で何度も繰り返した言葉を、プログラミングされた機械のように口にする。

私は元々アイドルを目指していたわけではない。誰かに認めてもらいたいという承認要求の塊みたいな理由から、動画サイトに作詞作曲歌唱全てを自分で担当した曲を投稿していた。

人から褒められることも日常生活では少ないし、無名の投稿者だったが、動画サイトではかなりの確率で皆褒めてくれる。たまに「薄っぺらい歌詞」とか「自分に酔うな」とかコメントを残すアンチもいたけど。

そんな中、日課のネットサーフィンをしていたところに突如広告が現れた。「有名プロデューサーがプロデュース、新アイドルグループオーディション開催決定」

汚い世界にあったそれは、ひとときわ輝いて見えた。

……アイドルに、なりたい。

それは承認要求とは違う純粋な夢だ。

私がアイドルになることによって、私のように引きこもってネットの海に飲み込まれそうな人々に少しでも現実に希望を見出してあげたい。

よし、応募しよう。

過去に買ったのはいいもののほとんど使っていなかったメイク道具を引っ張り出し、顔写真と全身写真を撮る。そして基本情報や自己PRを入力して応募完了。

もし上手く書類審査が通ったら次は二次審査、そして最終審査……アイドルになって爆売れしてドームに立って……。

オーバーな妄想が止まらない。そんな妄想をしながら審査を受けていたら、いつの間にか最終審査まで辿り着いてしまったのだ。

正直怖い。なぜこんな私が最終審査にたどり着いたのか正直訳が分からない。あんなにも自分がアイドルになったときのことを想像してニヤついていたのに、いざここまで来ると正直恐怖が勝つ。

「宮口さんはなんでアイドルになりたいと思ったんですか？」

「引きこもってばかりだったんですけど、そんな自分がアイドルになって、可愛くなつてキラキラ輝ける存在になったら、私と同じ境遇を持つ人に勇気を与えられるかな、と思ったことがきっかけです」

……やたらと視線を感じる。左隣を見るとさっきの美少女がキラキラした目でこつちを見ていた。やりづらい。

そのあとの歌唱審査では、私が一番好きなシンガーソングライターの曲を歌った。少し声は震えたけれどもいつものように実力を出せた気がする。

審査が終わって、堅苦しい空気からさっさと逃げるように参加者一同は控室になだれ込む。

控室は先ほどの緊張感が嘘のように華やかな雰囲気に含まれていた。参加者同士で雑談をしたり、次のダンス審査の不安を吐露する子、それに対して励ます子……。

やはり緊張感と恐怖感は拭えない。そんな不安を絶つように、自販機で適当に買った飲料水を飲み干す。



「さっきの歌声、本当にすごかったです！」

唐突に話しかけられて口から水がこぼれそうになる。私の前に審査を受けていためっちゃめっちゃ可愛い子だ。

「えと、どうも」

ペットボトルの蓋を閉めながら27番の子を見る。もう既にオーラが凄まじい。普段暗い部屋でブルーライトを浴びまくる私にとっては眩しすぎる。カーテンで光を遮断したいくらいだ。

「本当にすごいと思ったんですよ！ いいな、私もあんな風に自分を持てたらよかったのになあ」

「……貴方も上手だったと思いますけど」

それっぽいことを言った瞬間、27番の子はずい、と距離を縮めてきた。

「っな、なに」

「次はダンス審査ですよね？ 一緒に特訓しませんか？」

「と、特訓って言っても、練習時間は30分しかないですよ」

「大丈夫です、私結構ダンスが得意で！ 上手く教えられる自信が超々あ

るんです☆」

なんか語尾に星がついているような気がする。

「……何ですか？ 自分の練習時間を増やした方がいいんじゃないですか」「うーん、なんか貴方のことが気になりました。真っ白で、何にも染まり切っていないからこそ、素敵なアイドルにもなれるんじゃないかなって」

27番は首を少しかしげながら人差し指を顎に添えてそんなことを言う。仕事までアイドルだ。

「……私の行く末が見たいと」

「そう！ それが一番私の感情に近いかも！」

こんな戦いの場で他人に協力するなんて……だいぶ変わった人だ。

「……分かりました。特訓しましょう」

「やったー☆ うれしい！」

明るいオーラに圧倒される。ああ、こういう子がアイドルになれるんだろ  
うな。

「宮口さん、ここの振りのとき、腕もう少し伸ばした方がいいかも！」

「は、はい」

「あと、一回後ろ向くときね、一応笑った方がいいかも、ほら、審査員に顔向けてないから休憩ゾーンっぽいでしょ？　でもさう後ろにカメラとかあつて、もし撮られていたら怖くない？」

「あ、そうですね……たしかに」

「こういうの後々ドキュメンタリーで使われちゃうんだから！　だから後ろ向くときもにつこりしょ！　ほら、桃さん笑うとさらに可愛さに磨きがかかるから！」

「え、はい」

急に誉め言葉を投げかけるようなもんだから、困惑と喜びが混ざって変な相槌しか打てない。

とにかく付きっ切りで、27番は私の個性が発揮できるようにダンスの指導をしてくれた。

結局、その後のダンス審査はボロボロだった。右にステップを踏もうとしたらなぜか左に行くし、脳の指令に身体が追いついていない。せめて表情とポージングだけ全力で……と思ったが、ぎこちない笑顔とぎくしゃくしたポージングを審査員に披露してしまった気がする。

27番は完璧だった。振りも間違えることなく、ほとんどなく、なにかの舞台に立っているようなしなやかな動きに魅せられてしまう。悔しい思いなんてもたない。それ以上に、この子がアイドルになったらどう世間を騒がしてしまうのだろうか、そういう思いが勝ってしまった。オーディション参加者に対して勝手に希望を抱くなんて甚だしいと自嘲する。

「あは、ちよつとミスっちゃった」

「……全然そう見えませんでしたけど」

後は結果を待つのみ。私たちは控室でその時を待っていた。

「ね、桃ちゃん」

「……なんです」

「なんとなくだけど、貴方は合格すると思う」

やたらと真剣な表情。

「あのね、アイドルになってほしい」

「え、急に真剣モードですか」

「うん、ガチ」

「え、そうすか」

「あなたみたいな子がアイドルになったら、あなたに憧れる子がたくさん生まれて、アイドル業界が更に発展していくと思うの」

急に規模が大きすぎる話題を出されて、訳が分からない。

「私にそんな力はないですけど」

「ううん、あなたならもっとアイドルを広められる」

雰囲気圧倒されてしまい、私はただ頷くことしかできない。

その子の言葉を上手く咀嚼しきれない私は、不安と期待を抱いたまま結果発表が行われる会場へと向かっていった。

「それでは合格発表に移りたいと思います」

プロデューサーがステージに立つ。

私たちは目線を上げる。期待、興奮、恐怖、緊張、様々な感情が脳内を覆う。私の前には、小さい背中を震わせながら両手をぎゅっと握りしめる子がいた。じめじめとした空気がそのまま体内に侵入して、心臓まで浸食されているように居心地が悪い。

「番号を呼ばれた方はその場で起立してください」

ちらりと左に目をやると、27番はただまっすぐ前を向いていた。綺麗だな。ああ、この子がアイドルになっている姿を早く見たい。

「8番、佐原みぞれさん」

「はい！」

凛々しい声が響く。

8番が呼ばれた瞬間から、不合格者が決まる。そう、1〜7番の子は今不合格が告げられたのだ。間髪入れずにその男性は言葉を紡ぐ。

「28番、宮口桃さん」

「えっ」

私だ。

心臓の音がうるさい。驚きすぎて勢いよく起立してしまったおかげで、パイプ椅子がきゅい、と緊張感のない音を立てた。嬉しい気持ちはあった。だが、疑問が勝ってしまう。

27番は、不合格？

煽るつもりなど微塵もない。しかし、顔を左に向けることを止められなかった。

まっすぐな目で射貫かれる。27番は私のことをじっと見つめていた。

何を考えているのだろうか。なんで私じゃなくてこの子が合格してるの、協力しなきゃよかったか思っているのかな。

「……よかった」

その子は、ポツリと、本心がこぼれるように呟いた。

その声は、私だけにしか聞こえていないんじゃないかというくらいに、か細かった。

この子はどれほどまでに優しいのだろう。悔しいはずなのに、私の合格を喜んでくれている。

「39番、園優菜さん」

私たちの感情など知らずに、淡々と合格者発表は進んでいく。

27番は私から視線を外し、ただ前だけを向いていた。何を考えているのかよく分からないのに、アイドルを追い求める純粋な子だった。

会場は異様な雰囲気にも包まれている。総勢四十人の最終審査で合格者数がたったの三人だというのだから、こんなにもざわつくのは当たり前だ。

「それでは合格者のみここに残り……不合格者の皆さんは控室へ。」

27番は私をちらりと見て屈託のない笑顔で「バイバイ」と手を振った後、出口へ向かっていく。姿が見えなくなったとき、もう一生会えないのかも知れないと思ってしまった。

正直、そのあとのプロデューサーからの説明はほとんど頭に入らなかった。



三人組として活動していくこと、今後約三か月間はレッスンに徹して、そのあとライブハウスでお披露目ライブを行うこと。「ゆるふわでかわいい」がコンセプトのこと。

……合格したからには、あの子の思いを引き継がなければ。  
なぜだか、受け継がないと本物のアイドルになれない気がした。

2

「めにきゅの皆さんでしたー」

女性アナウンサーの抑揚のある声が響く。

音楽番組の収録が無事に終了し、私たちは控室へと戻り、絶賛自撮りタイム中だった。

「初めてあの階段降りましたねー」

「てかてか！ モリタさんに会えたんだけど！」

めにきゅはデビューしてから約半年が経つ。デビューシングルがSNSでこれでもかというくらいにバズり、サビのダンスを踊って動画を投稿する人

が急増中だ。

私がさんさん頑張ってきた努力の結晶である過去の個人チャンネルは登録者数が百二十人なのに、めにきゅの登録者数は既に十万人を超えている。何だか無性に悔しさもある。

「今日も桃ちゃんの生歌がかっこよかったよー」

「そうかな、ありがと」

そう、自分で言うのもなんだが私は持ち前の歌声が高く評価された。生歌も文句なしで最初から最後まで歌いきることができる。ダンスは相変わらず微妙だが、リーダーと優菜さんが私の代わりにダンスを頑張ってくれている。そして、私はあの時誓ったように、27番……あの子のようなアイドルを今でも目指している。髪を真っ黒に染め上げ、記憶を頼りにメイクもあの子に近づけている。アイシャドウやリップは少し青みがあったピンク色で統一し、とにかく色白さと透明感を重視する。実際のところ私はそこまで色白いタイプではないが、無理やり色白肌を作ろうとして、青白い下地を首まで塗らなくっている。

「特にですね、桃ちゃん、『恋心教えてあげる！』ってところが大好きで！」  
「わかるわー、桃の魅力が詰まってる！ かつこいい声でそんな可愛い歌詞  
歌うのずるい、やっぱギャップねギャップー」

とにかく、私たちは今波にのっているアイドルだと思う。正直調子に乗っている自覚はあれど、調子に乗らなきや芸能界では生き残れない気がする。

「ただいまー」

誰もいない四畳半の部屋へ帰宅する。

オーディションに参加する前からずっと住んでいるこの部屋は、寂れた木造アパートのはしっこにある。歩く度にギシギシ音が鳴るし、いつ崩壊するか分からないけれど、家賃は東京都で1、2を争うくらいには安いと思っ  
ているし、木の匂いはかなり落ち着くしでなんだかんだ気に入っている。

さっさと手洗いをして、お風呂の湯をためている間にSNS上でエゴサーチをする。

めにきゅの公式アカウントを見ると、先ほど控室で撮ったばかりの3人の

集合写真が投稿されていた。

「みんな可愛い！」「リアタイしたよー」

誉め言葉だらけのコメント欄を見ると、ニヤつきが止まらなくなる。

だけど、たまに「宮口桃、もっとゆるふわ感を出してほしい」「あんまり笑わないから少し怖い」とか、私に対してのコメントも見かける。

……やっぱり、そうだね。敢えて笑わないアイドルもたくさんいるんだよと反論したくなるが、反論よりも反省が勝ってしまった。リーダーは明るさとかっこよさとかかわいさが共存してるし、優菜さんは言わずもがなゆるふわで可愛いし。

もし、私が不合格であの子が合格して、今この場にあの子が立っているのなら……きつとこういうコメントなんてほぼゼロに等しくて、かわいかわいってたくさん褒められているのだろう。

もっと、あの子のようにならなければ。

もっと可愛いパフォーマンスをしよう。あの子が教えてくれたように、指先まで意識を集中して、笑顔も増やして。あの子のように、あの子のように

……。

『お風呂が沸けましたー』

無機質な音声が聞こえた瞬間、ハツとして現実に戻る。最近こういうことが多い。あの子と私を比べてしまつて、まるで別の私に無理やり手を引かれるように、意識が持っていかれてしまうのだ。

この癖をやめないと。自分の良さを引き出すことに集中して、あの子のことは忘れよう。

心の中で決意を固め、風呂場へ向かうために立ち上がった。

翌日、私は炎上していた。

さつきまで凄くかつこいい決意をしていたのにこのザマだ。

かつて私が自作の曲を投稿していたY o u T u b eチャンネルが見つかり、誰かが拡散したのだ。

思い当たる節しかない。そう、歌詞の治安がとにかく悪いのだ。現代のコンプライアンスにはそぐわない歌詞で混沌としており、現代社会を非難する

曲や自身の非難、更には人類への非難などあまり表に出すべきではない言葉ばかりなのである。

「かわいいがコンセプトのアイドルなのにこれはひどいw」

「いやいや、むしろ好感度上がったんだけど」

SNSでは素人たちの議論で溢れかえっていた。

過去の私を残したかった。だからチャンネルを削除しなかった。あの子に飲み込まれそうな私を、そこだけは本物の私を肯定してくれるような気がしたから。

やっぱりダメなんだ。本物の私は評価されなくて、というか炎上しちゃって。無理やり可愛いパフォーマンスをして、あの子みたいに中身まで可愛くならないといけない。

『世間の声なんて気にしないでいいよー』

あの子のことを忘れようとしたのに、声が聞こえる。

「でも、あなたみたいに可愛くならなきゃ、認めてもらえない」

『あなたは承認要求を満たしたくてアイドルになったわけじゃないでしょ？』

「そうだっけ」

『桃ちゃんみたいな境遇を持つ人に笑顔になってほしいんでしょ？』

「……あー」

そういえばそうだったかも。でも正直今はどうでもいい。

そろそろありのままの私を表現することをあきらめなければならぬ。このままアイドルを続けられ、いつか脱退炎上のループをしてブルーライトを浴びるだけの生活に逆戻りをしてしまう。

覚悟を決めなきや本物のアイドルになれない。

自分の意思なのか、あの子の意思なのか分からない。私はいつの間にか、「YouTubeチャンネルを完全に削除する」というボタンをクリックしていた。すつきりしたと同時に、後悔も残る。

なぜかチャンネルと同時に「私」も消えたような気がする。

炎上から一か月が経った。あの炎上が嘘だったかのように、めにきゅは世間の目を惹いていた。全国ツアーは全席完売、アリーナで行われる単独公演も開催決定された。そして今日もライブハウスで定期公演が行われていた。

私はとにかく吹っ切れた。かわいいパフォーマンズをするようになり、ファンサも今まではあまりしない方だったけれど、「あの子ならこうする」と勝手に想像し、積極的にファンサをするようになった。

「今日の桃ちゃん良かった！ 特にあのステージ上での大ジャンプ、最高！」  
「歌い方変えた？ 前のもかつこよくて好きだったけど、今日超かわいかった！」

すごい。みんな褒めてくれる。最近は非難するコメントが多く、SNSもまともに見ていなかったのに、もつともつとみんなの感想が見たくてスクロールが止まらない！

「桃……」

リーダーは心配そうな目で私を見つめる。心配なんてなくていいのにね。



「桃ちゃん、すごかったよ！最後の煽りがさ、限界を突破した感じでー」  
優菜さんも褒めてくれる。私ってどんどん魅力的になってるのかも！

スキップをしながら電車に乗る。いつも電車の中で下を向いてばかりだったのに、最近は前を向くことが多くなった。こんなに東京の景色って綺麗だったんだ、とか新たな発見が多くて気分が良い。

あの子も毎日こんな気持ちなのかな、目に映るものすべてがキラキラしているのかな。

電車の中から景色を眺めていると、手のひらに収まるスマホからブザー音が聞こえてきた。

「桃、最近どうしたの」「思い出して、アイドルになった理由って何？」

リーダーからメッセージが二件届いた。一分ほど考えたあとに文字を打つ。  
「みんなに褒められたいから」

即既読がついて、五秒くらいで返信がきた。

「違うでしょ」「オーデイションでみんなに勇気をあげたいって言ったの

覚えてるよ」

「そうだったけ？」

「とにかく、最初のころの気持ちを思い出してよ。承認要求なんて誰にだってあるから否定はできないけどさ」「最近おかしいよ」「なんでも相談してよ、言いたくなったらでいいから……」

「わかった、ごめん」

「とにかく、今日みたいな無茶なパフォーマンスはしないでよ、ステージから落ちたらどうするの！ 終わりだよ！」

リーダーは優しい、でもこの気持ちは一人で抱えたい。たまたま隣だったオーディション参加者を神聖視していること、その子を真似て私とあの子だけのアイドル像を作ろうとしていることなんて言えない。さっさと会話を終わらせてたくて、ウサギが土下座しているスタンブを送信する。

相談事なんてどうだっていい。ようやくあの子になりかけて、同じ心情を共有できるということに今は浸っていたいのだ。

「桃ちゃんメイク変えた？ めっちゃ可愛い！ このリップ使ってるの？」  
「サビで俺にレスくれたよね？ うわ、やっぱり！」

握手会でファンから言われた言葉を反芻する。今日は様々なアイドルが集う夏フェスが開催されている。私たちは無事にライブと握手会を終え、控室へ戻る途中だった。

真夏ということもあり、汗が尋常ではないほどに流れてくる。汗でおでこに貼り付いた前髪が鬱陶しい。

ハンディファンが生み出す風も生温くて、暑さからどうしても逃れられない。

『桃ちゃん、こっち』

ふいに、冷たい風が頬を撫でる。

急にあの子の声が聞こえた。なんで。

頭が痛い。なんか、別の何かに乗っ取られかけているようだ。

声が聞こえた方向に目を向けると、黒髪ツインテールの華奢な女の子の後ろ姿がそこにあった。

やっと、あの子を見つけた。

「桃？ どこいくの、そっちはステージだよ。……桃、ライブは終わったんだよ!!」

リーダーを無視して、あの子に誘われるように、私はその子の後を追う。いる！ ずっと伝えたかった。あなたのようなアイドルになった。見てほしい。うれしい。やっぱりあなたもアイドルになったんだね。話したい事がたくさんあるの、ねえ、一緒にステージに立ちたいよ。

「どうもー！ 私たち、『レプリカ』です！」

あの子はステージへの階段を上っていく。私も立ちたい。あなたの隣でパフォーマンスがしたい。ステージへ向かおうとしたが、スタッフに思いつきり肩を掴まれる。

「何やってるの！ 混乱させないで！ 全くだでさ忙しいのに……」  
怒声なんてどうだっていい。私はそのステージを見上げる。やっぱりいた。

あの子が。

ツインテールで、黒髪で、……あれ、みんなツインテールなんだ。黒髪なんだ、ツインテールなんだ、かわいい。黒髪だ。

……あれ、みんな、あの子に見える……。

私の頭がおかしくなっているのか、おかしいのはこの世界なのか分からない。訳も分からないまま、勝手に口が開いていた。

「わ、私ね、あなたのようなアイドルになったよ、ね、一緒に踊りたいよ」  
五人組のあの子たちは誰一人私を見ようとしない。観客に向かって笑顔を振りまいているだけ。

「っ、何を言ってるのこの子は……この子めにきゅの歌が上手い子ですよ、メンバーを呼んで！」

怒声を飛ばしたスタッフの手が更に肩に食い込む。気持ち悪い音しか聞こえない。

つんざく悲鳴のような、何かを壊すような音ばかり。

「っ桃！ 桃！ 誰か水を持ってきてください！」

「あ、あれ、27番だ……やっ与会えた……」

「何を言ってるの！ リーダーよ私！」

「桃ちゃん、ごめんね、こんなに思い詰めてたなんて知らなくて……」

あ、リーダーと優菜さんか……あの子じゃなかった。

何かに飲み込まれそうで息苦しい。飲み込まれたら駄目なような気がして、でも飲み込まれたらもつとアイドルになれる気がする。

リーダーも優菜さんも、アイドル全員があの子に見えてしまった。

……あの日、オーデションにいた27番の子って何だったんだろう。

夢を見た。

カラフルで、どこかのテーマパークみたいな場所。私とあの子が二人つきりでライブをしていた。たくさんの風船が飛び、メリーゴーランドの軽快な

音楽が狂ったようにループしている。歓声が聞こえるのに私たち以外に誰もいない。

気持ち悪いのに、心地よい。なのに切なくて、涙が出そうになる。

何にも決められていない世界。自由に私たちはダンスを踊る。ステップを間違えたつていい。ファンサを必死にしなくても良い。立ち位置も気にしなくていい。

あの子はあの日のような笑顔で、私の手を引いてステージ上で走り回る。足がもたれる感覚なんてない。一緒に空の上を飛んでいるみたいで夢心地だ。

『桃ちゃん、楽しい？』

「……楽しい」

『じゃあもつと楽しくならなきゃ』

「どうやって」

『私になるの』

「どうして」

『だって貴方は私になりたいんだよね？じゃあ私にならなきゃ』

「……そうか」

目指すんじゃないくて、私そのものがあの子になればいいのか。

『そう』

「そっか」

『だから私に、その身体をちょうだい』

横からとん、と押される。私はステージから落ちる。行き着く先は地面ではなかった。暗闇だ。暗闇に落とされる。

怖いのに、安心感がある。もう何も考えなくていい、母に甘える赤ん坊のように。

「みんなうっ！」

いつの間にか私はステージに立っていた。さっきの「レプリカ」とかいいうグループのパフォーマン中に乱入したのだ。

「ね！ 今日、すごく楽しかったよね☆ ……桃のことだけ、見てくれた？



浮気なんてしないよね？」

「しない！」「桃ちゃんが世界一だから！」

「あはっ！ 最高☆☆ ならいいの！ ね、ずーっと一緒だからね？ 約束！」

すごい、全部が輝いて見える。ペンライトってこんなに輝いてたの？  
もういい、今までの私なんていらさない。

やっと本物の【アイドル】になった、やっとあの子に会えた、やっとあの子になった。

そして私も、あの量産されたあの子たちの仲間になれる。みんな褒めてくれる。

4

「チャームポイントはにっこり笑顔です！ この笑顔でいろんな人をメロメロにしちゃいます！」

今回もばっちり決まった！ よしよし、審査員も参加者もみんな私のこと

を見ている！

私はめにきゅでのアイドル生活を謳歌し、めにきゅは王道かわいいアイドルとして大人気アイドルのまま、解散した。

それでも私は止められない！ まだまだアイドルを続けたいし、私のようなアイドルがたくさん生まれるために、「私」を広めていかないと。

ふと、右の子の視線が気になって、ちらりと横に座っている子を見る。

綺麗な子だな、と思った。

クールな表情をしている、というか目に光が宿っていない。

すっごく素敵な子だ、まだ何にも染まりきっていない。こういう真っ白な子が一番染まりやすい。

よし、私がこの子にアイドルを教えてあげよう。この子なら、みんなの理想の、本物のアイドルになれる！

そう、アイドルを量産し続けられる。

## あとかき

『アシンメトリー』というタイトルは、私が中学生の頃に考えた作品のタイトルである。当時の『アシンメトリー』は、種族同士で争い、世界が二分化され、主人公は再び世界が一つになるよう戦うというような作品、魔法少女が主人公の作品など、様々な変遷を経た。その結果、最終的にはアイドルがテーマの作品が生まれたのだから何が起きるか分からないものである。中学生の頃の自分に言うとかかなり驚くと思う。

今回私が執筆した作品は少しダークなアイドル作品となっているが、実のところ私は根っからのアイドル好きである。

この小説を執筆している間、某アイドルグループの握手会に参加していた。名前を呼んでもらえることを期待し、手作りの名札まで用意した。

握手会ではアイドルのキラキラした笑顔が直撃し、顔面国宝とも言わんばかりの可愛さと美しさ、そして名前を呼ばれた嬉しさで脳内はお花畑に。やはりアイドルは素晴らしいと思ったものである。

握手会に参加して感じたことはやはりアイドルは凄いの一言。今回私が参加した握手会は「グループ握手会」と呼ばれる形式で、一周のうちに4人のアイドルと会話することができる。そう、我々ファンが入れ替わるためアイドル側は一人ひとりに素早く対応し会話しなければならない。

アイドルは歌唱、ダンス、ビジュアルに加えてファンへの対応やSNSの運用など様々なものを求められている。やはりアイドルはすごいな、宮口桃も文章外でかなり努力をしたのだろうなと思わざるをえない。そんなことを考えていたら、いつの間にか握手会でかなりお金を消費してしまっていた。

『アシンメトリー』というタイトルの作品をようやく最初から最後まで執筆し、幼少期から憧れていた「アイドル」がテーマの作品を執筆できたことを非常に嬉しく思う。そして、本作を読んでくださった皆様に心より感謝を述べたい。



愛すべき非日常

シロガネ

「夏休みくらい、非日常を過ごしたい」

七月の下旬、夏休みに入る前。

「クラスメイトと、そんな話をしたんです」

九月の始め。まだまだ茹だるような暑さが抜けない中、狭い室内でいろはは目の前の男にそう告げた。

「海が見れて良かったです」

〇〇

「非日常、か」

「うん、よく言うじゃない」

漫画や小説の導入のような話。あるいは、思春期によくある話題だ。

「非日常ね。うん、いいね。やろうよ、非日常」

いろはは目の前のクラスメイトの友人はうんうん、と頷いた。

「え？」

いろはは目を丸くする。ガタン、と頬杖を付いていた腕がズルリと頬から落ちてしまう。大金持ちになりたいとか、恋人が欲しいだとか、空想の願望のつもりだったから。実際にやろう、と言われて、いろははびっくりしてしまった。

「夜の遊園地とか、うーん、年齢制限掛かるかな、そこは。ああ、肝試しとかもいいのかもしれないね」

つらつらと、友人がこれからの空想、いや予定を語る。いろはの胸中にじわじわと嬉しさが溢れてきた。

「他には何がいい？」

こてり、と首を傾げて友人はいろはに尋ねた。

「うみ」

「うみ？」

いろはの住んでいる場所は海沿いではない。ものすごく遠くでもないが、少し電車で遠出しなければあの力強い青を見ることはできない。高校生の身分であるいろはには中々できないことだ。



「海に、行きたい」

海。全ての始まり。そして全てを飲み込んでくれる存在。いろはは幼い頃から、海に行きたかった。

「いいね、すごく夏っぽい」

ふふ、と友人が笑う。

「じゃあ、海は最後、三十一日に行こう！　きちんと宿題は終わらせておかないとね」

「うう……、そうだね、頑張る」

それなりに最初からコツコツやるタイプではあるけれど、今年は予定がいっぱいで、これは気合をいれなければ。

「よければ一緒にやる？」

「え、いいの！？」

目の前の友人の成績はなんだったか、あんまり思い出せないが、悪くはない、はずだ。

「これもまた非日常かもね」

「おお、確かに」

「夏休みには、たくさんの非日常をお届けしてあげる」  
にこり、と黒曜石のような黒い目が弧を描く。

取り込まれそうな、危険な魅力があった。友人自身が、非現実的な存在であるような錯覚を覚えるくらいには、いろはの頭がくらくらした。きつと、茹だるような暑さのせいだろう。

「じゃあまたね！ 近いうちに」

「あ、うん、また」

そういえば、友人はどのあたりに住んでるのだったか。まあ、そこまで気にすることでもないか、と教室から見えなくなるまでバイバイ、というはは手を振った。

○○

「……、う」

アラームではなく、寝苦しさでいろはの目が覚める。身体に張り付くシャツはいい目覚めとはいえない。せつかくの夏休みだが、これでは二度寝する気も起きない。それよりも早くクーラーが効いてるリビングに急ぐべきだ。いろはは半開きの目を擦りながら、よいしよとベットから降りる。狭い賃貸だから、扉を開ければもうすぐそこだ。

「おはよういろは」

「ん、おはよ……」

ソファに座って優雅にアイスコーヒーを飲む父が、テレビから視線を外さずにいろはに言葉を掛ける。

「夏休みだっていうのに、意外と早いな」

「暑くて……」

「ああ、ドア開けたらどうだ？」

「嫌」

親子とはいえ、仮にも年頃の娘に何を言うんだ。

「そうか……」

愛娘の間髪入れずのノーに、いろはの父は少し凹んだ。

「あ、そうだ。明日出掛けてくるね」

「そうなのか。……、彼氏か？」

「違うよ。友達」

遠慮気味に聞いてくる父が少し面白くて笑いが溢れながらも、いろはは訂正した。

「そう……なのか？」

「そうだよ」

「そ、そうか」

「遊園地にね、行ってくる」

「おお、楽しんでおいで。お小遣い、渡した方がいいか？」

「ええ、いや、あー、貰えるんなら欲しいけど」

ちよつと待ってろ、とテレビを付けたまま父が立ち上がる。寝室の扉が父を隠した。

いろはは代わりにソファに座って、テレビをぼーっと眺めた。流れているテレビの画面には中々に壮絶な内容のドラマが流れている。いろはには遠い世界の話だった。

「おう、これ」

テレビを眺めていたら、父が戻ってきた。手には、最高額の紙幣。しかも一枚じゃ、ない？

「えっ、こんなに？」

「夏休みはまだ始まったばかりだからな。これからまだまだ、色々あるだろう？」

ふわり、と父が笑う。そう言われたら、遠慮することも出来なかった。

「……ありがとう」

そっとお札を受け取る。決して、裕福な家庭ではない。父親一人、娘一人の慎ましい暮らしだ。それでも、この数枚、数グラムに大きな愛がずしりと乗っているのを感じた。

「めいっぱい、楽しんでくるね」

「うん、土産話、よければ聞かせてくれよ」

「おっけー、楽しみにしててね！」

ぐ、というはは父親に向けて親指を立てた。いろはが照れ隠しにかっこつけていると、くう、とお腹が鳴った。

「あ、朝ごはん、すっかり冷めちゃったけど食べる？」

「……いただきます……」

しゅう、と別の羞恥に顔を赤くしながらいろははぼそぼそと呟いた。

〇〇

「うっ……」

「大丈夫？」

「だ、ただ大丈夫……」

うっ、というはは口元を抑えて迫り上がる気持ち悪さに蓋をする。周りの喧騒が、壁一枚隔てたように遠い。

「いきなりジェットコースターはハードルが高かったか」

よしよし、と友人に背中を摩られる。

「でも良い非日常だったろ？」

「まあ、そうだね……」

自分はある三半規管が強いほうではなかったらしい。

「どうだった？ ジェットコースター」

「うん、うーん……、楽しかったよ、うん」

いろはの身体はジェットコースターに合ってなかったようだが、気持ちの方は上向いていた。

「楽しかった！」

視界が縦横無尽に動き、風に逆らうような体験はまさに非日常で、いろはの胸はとてもドキドキした。

「それは良かった！ 次はフリーフォールにする？」

「なんで絶叫系ばつかなの……」

友人はにこにこしながらいろはに提案する。

「そっちの方が遊園地！　って感じするじゃない？」

「そうかもだけど」

この友人、中々良い性格をしている。ただ、その強引さがいろはにはありがたかった。遊園地は初めてだったから、引っ張ってくれるほうがありがたい。

「さ、お昼をお腹に入れる前に絶叫系は網羅しておかないと！」

「た、確かに……」

口から昼ご飯が出てしまうのは勘弁だ。そんなの年頃の乙女には許されない。

「……そう言えばさ、今日は珍しく半袖なんだね」

「え？　そりや、こんだけ暑いんだから、半袖でしょ」

「あは、それもそうだね。まあいいや。よし、レッツゴー」

そう言っているのを掴む手の温度は、高くも低くも無かった。

○  
○



「ほい」

「うわっと」

いろはは友人から半ば投げるように渡されたテーマパーク仕様の形になっているチュロスを受け取る。揚げ立てのそれは紙袋越しでも取り落としそうになった。

「いやあ、遊園地様々っていうか、高いねー、やっぱ」

トスリというはと友人、二人ベンチに並ぶ。度重なる絶叫系にグロッキーになったいろはは、ベンチに座って友人が軽食を買ってくるのを待っていた。夏休みなこともあり、園内の飲食施設は軒並み数時間待ちになっていた。こんな炎天下でそんなことをしていたら倒れてしまう。

そこかしこに並ぶカラフルでポップな飾り付けがなされた屋台は、比較的空いており、回転も早かったため、いろは達は屋台に売っているもので軽食を摂ることにしたのだ。

「あ、いくらだった？」

「この値段の八割が容器に掛かっているであろうドリンクと合わせて二千円くらいかな」

ピトリとガシャガシャと飾り付けがされたドリンクを頬に充てられる。いろはうひゃ、と声が出てしまった。

「分かってたけど高いね……」

「いやあ、テーマパーク様々よネ！ 非日常税とでも言う」

「非日常税、ね」

映画館の食べ物、祭りの屋台、そういうものは得てして法外と思われるような値段設定が成されている。いろはも、その値段の高さに幼い頃はまともに買えたものではなかった。しかし普段スーパの特売日などを狙う人々は、その値段の高さに拘泥しないのだ。人々は、『幻想』或いは『理想』にお金を払っている。特別な体験には、対価が必要ということだ。

「おいし？」

「うん、おいしい」

噛めば、砂糖の甘さがじゅわりと広がる。別に特別においしい訳ではないけれど、きつといつも食べるご飯より美味しいのだと思う。

「さて、食べ終わったらのんびりタイムにしようか」

友人はぺろりと指と口元についた砂糖を舐め取る。

「後は、パレードとかだっけ」

「まあそれもメインイベントではあるけどさ、やっぱ遊園地といったらさ」

ね？ と友人はいろはににんまりと笑って続きを促す。

「え？ えーと……」

「もう！ 夕日に照らされて、頂上で二人恥ずかしながらも口づけを交わす

……」

「口づけって……」

「ほらほら」

うーん？ というのは視線を巡らせる。そして一際目立つ遊具を見て、友人の言いたいことを理解した。

「観覧車か」

「ぴんぽーん」

正解だよ、とやっぱり狐のような目で友人は笑った。

〇〇

ガタゴトと、少しずつ高度が上がっていく。夕焼け色に染まった遊園地は、いろはには寂しげに映った。

「今日は初めてのことばかりで楽しかったよ、ありがとう」

正面切って言うのは照れくさくて、いろはは窓ガラスを覗き込みながら背後の友人に告げた。

「いろははファーストキスって済ませた？」

「え？」

いろはは思わず振り返ってしまう。友人は、癖なのか、またもや目元が狐のように弧を描いている。

「いや、まだ、だけど」

恋人がいたことは無いし、生まれた時に家族からそれをもたらっているかもしれないが、如何せん記憶が無いのでそれは体験してないのと同じだ。それに、頭のどこかでもらってはいないと断言していた。

「しとく？ キス」

「いつ、!!」

「……あははっ、そんなにびっくりしなくても！」

くつくつと笑う友人に、いろはは揶揄われたと気づいた。

「もう！ そ、そういう君はしたことあるの！？」

「ええ……、どっちだと思う？」

ツン、といつの間にかいろはの目の前に迫っていた友人が、自分の唇といろはの唇を交互に突いた。その目元も口元も、ゆるりと弧を描いている。

「……、いひっ、冗談だよ！」

あ、八重歯がある、といういろはは漠然と見たままを考えた。そしてはっとする。ぶわっ、と顔が空と同じ色に染まる。いろははぼかぼかと友人を叩いてやった。

「あはっ、ゴメンって！」

「……っ、！」

「あつ、ほら見て、頂上だよ」

その言葉に、いろはは振り返って外を見る。黒が、夕日を呑み込んでいく。いずれ、遊園地も闇に包まれるのだろう。楽しい時間は終わりだとばかりに。

「大丈夫、まだ終わらないよ」

「わぁ……！」

ポツポツと、闇に吞まれかけている遊園地に光が灯る。光はあつという間に、遊園地全てに広がった。見事なライトアップだ。

「夏休みは、始まったばかりだろう？」

やはり、そう言った友人の目元は、狐のように細められていた。

〇  
〇

扇風機の音、セミの鳴き声。なんて風情は、この時代には無い。クーラーで快適であるし、暑すぎるのかセミの鳴き声は近年聞いていない。

「……なんで高校生にもなって一日一言みたいなのを書かなきゃいけないんだ。書くことないよ」

あー、というははシャーペンを組み立て式のローテーブルに投げ出した。

「そう？ 一日一日、決して同じことにはならないよ」

友人は涼しい顔をしてすらすらとペンを動かしている。

「生きるの、楽しそうだね」

「うーん、どうだろうね。そうじゃないと長いジンセイ、やってられないだけかもよ」

にんまりと友人の目が細められる。

「まあ、そうかも」

「それに、今日の分は書けるじゃないか。友人と一緒に家で宿題をした、って」

「……確かに」

面と向かって言われるとちよつと照れくさい。いろはは三日ほど書き溜めていた一日日記に、今日の『非日常』を記す。

そうして思う。ああ、これは夏休みの『非日常』を書き留める作業なのだと。そうすると俄然、いろはは明日の『非日常』はどうしようかとわくわくしてきた。

「夏休みの宿題はためる派かい？」

ふと、友人がそう尋ねてくる。どうだろう、と思い返すが、あまりためるタイプでは無かった。それくらいしか、やることも無かった。

「ううん、結構コツコツやってたよ」

「でも家にいると、ついダラけちゃわない？」

「いや、大体は図書館とか行つてやってたから」

「へえ、凄いな」

いろはは答えながら、どうして図書館で宿題を片付けていたのだろう、とふと疑問に思う。家でやればいいのに。まだ、クレーラーがついてなかった頃の話だったか。それとも、家にいたら集中できなかったから？



「……ほら、家だとダラダラしちゃうから」

多分、そうだ。記憶は曖昧だけれど。

暑すぎて、記憶も朧気なのだろうか。

「合理的だね」

「……まあね」

ポキ、と持っていたシャーペンの芯が折れてしまったことに、いろはは気づかなかった。

〇〇

八月三十日。楽しかった日々もあったという間に過ぎていく。明日は、いろはが待ちに待った海へ行く日だ。

「いろは、随分ご機嫌だな」

「ふへ、うん！ 明日は海に行くんだ！」

尋ねてくる父に、いろはは楽しみを隠そうとせずに答える。

「……そういえばお父さん、最近いつもテレビ見てるね。何か気に入ったドラマとかアニメとかあった？」

父は最近、いろはが見かける度にテレビに向かっている。

「ん、ああ……」

今も、父はテレビを見ているところだった。内容はいちいち確認していないが、そう言えばいつも同じドラマを見ているように思う。

「うーん、どんなドラマだったかな……」

父が首をかしげる。

「いつつも見てたのに？」

あー、だとかうー、だとか、父は要領を得ない返事をする。何だか不気味だった。上向いていた気分が、一気に沈んでしまう。

「やめてっ！！」

「っ！」

女性の鋭い声に、いろははびくりと肩を震わせた。声の発信源は、テレビだった。一体、父はナニを見ているのかと、恐る恐るいろははテレビに意

識を向ける。

画面に映っていたのは、少女に暴力を振るう男性だ。薄暗い部屋の中、少女がやめて、と繰り返している。

「……っ」

どうしようもなくそれを見ていられなくて、電源を切ろうというろははリモコンを探す、中々見つからない。ガタンッ、とテレビから大きな音が聞こえた。いろはは思わずそちらに視線を向けてしまう。画面には、虚ろな目をした少女が映っていた。少女の顔がアップのカットになる。

「え……」

いろはは絶句した。

だって、その少女は。

「……いろはあ？」

「ひっ……」

ゆらりと背後で男が立ち上がる気配がする。先程まで優しくかった父親の声が、ぐにやりと歪む。いや、こちらが、正しいのだ。

「うわわああ！？」

テレビから男の悲鳴が上がる。釣られて見ると、少女が男に包丁を振り上げていた。

ああ、そうか。そうすれば、良かったのかも。

普段なら、きっとそんなことは考えないのかもしれない。でも、もういろはは疲れてしまったのだ。優しい父親なんて、幻想で非日常だった。幻想は、現実ではあり得ないから幻想たり得るのだ。

いろはは足を縛れさせながら、台所へ向かう。いろはは、父が台所に立つ姿は見たことがなかった。調理器具が入っている棚に、包丁が何本か収納されている。普段使いの包丁を一本取り出した。

「いろは？」

父だった男の声がする。いろははゆっくりと、男に近づいて、そして。

「ありがとう。お父さんのまま、死んで」

父と認識できるまま。家族だと思えるまま。そうすればまだ、いろははまともであるから。

ブスッ、というはは勢い良く男に包丁を突き刺した。男は何も言わずに倒れ込む。赤い血溜まりが、広がった。

「……」

これで良かった。だって明後日にこの魔法は解ける。そうしたら痩せつぽっちで痣だらけのいろはは、何も出来ずに殺されていくだけだった。抵抗できたとしても、男が死ぬところを見届けることは無く共に冷たくなっていただろう。

「……うみ」

行きたかったなあ。

ピンポーン、というはが項垂れていると、インターホンが鳴った。何も考えられないまま、フラフラというははドアを開けた。

「やっほー」

「え……」

そこにいたのは、友人だった。

「さ、海に行こうか！」

にんまりと、友人は狐のように微笑んだ。

時計の針は、どちらも一番大きい数字を指していた。

〇〇

二つほど電車を乗り継いで、いろはと友人は海へとやってきた。もう終電もないはずなのに、なぜか電車は動いていた。

駅から少し歩いて、砂浜をさくさくと踏む。闇夜の中、キラキラと藍色が輝いている。寄せては返す波は、いつでも変わらない。

「うみ、だ」

「うん、海だよ」

全ての始まり。生命の母。全てを飲み込み、包み込んでくれる青がそこに広がっている。

「綺麗だね」

「……恐ろしくはないのかい？」

友人の問いに、いろはは頭を振った。

「うん。キレイ、綺麗で優しいよ、海は」

ずっと、海に行きたかった。

ずっと、全てを飲み込んで欲しかった。身を投げて、海に全てを委ねてし

まいたかった。

「いろは」

「……何？」

「これからどうする？」

「うーん……」

「このまま海に飛び込む？ 警察に自首する？ 束の間の夢を見せたワタシ

を殺してみる？ それとも……、ワタシと一緒に世界という劇場を観て回

る？」

アハッ、と友人は笑った。

彼かも彼女かも、名前も知らない友人が。

「ワタシは貴方の選択を尊重する」

海より空より黒い瞳が、いろはをまっすぐに見据える。それはにんまりと弧を描いている。黒髪交じりの白髪が、海風に揺れている。

「……」

いろはは、その黒曜石から目を離せなかった。考えて、考えて、いろはは答えを口にした。

「……警察に行ってくる」

「それはどうして？」

「……今ここで飛び込んだら、君に迷惑が掛かるかも。そんなことないのかも知れないけど、それは嫌だからさ」

「……ふーむ、そっか。分かった。それが君の選択なんだね、もちろん尊重するよ」

うんうん、と書生服の彼、または彼女が頷いた。

「名前、最後に教えて」



「名前？ 元の名前はもう忘れてしまったなあ……、そうだな、じゃあ」

ムボウ、そう呼んでよ、と友人はいろはに笑いかけた。

「バイバイ、ムボウ」

「うん、さようなら、いろは。ワタシは何処にでもいるから、いつかまた出会えるよ」

「でも、それはきっと今の貴方じゃないでしょう？」

その言葉に、ムボウは首を傾げた。

「それって、大事なこと？」

「うん、すごく大事なこと」

「ふーん……、まあ、いつか会えるといいね。君の選択、しっかりと覚えてるよ」

「ありがとう、さようなら、ムボウ」

「うん、ばいばい！」

ムボウはにんまりと目を細めていろはに別れを告げた。何より黒い霧がムボウといろはを包み込む。

「私に日常をくれて、ありがとう」

その言葉が、ムボウに届いたかどうかは分からない。次に会えたときに聞こう、というは黒い霧に身を委ねた。

〇〇

「いや、今回もいいシナリオができたね！」

どことも知れない空間を、ムボウは歩いていた。懐から手帳を取り出して、今回の冒険を記す。

「やはり人間は面白い」

にんまりとムボウは目を細める。次はどんな世界に旅立とうか。

「人間も――、この世界も面白い、全てが非日常だ！」

アハッ、と笑い声を残してムボウは黒い霧の中に消えていった。

あとかき

ムボウの正体、分かる人にはわかります。まあ私も詳しくはないのですが、楽しく遊んでいますよ。ムボウの口調がちよっとブレているのもわざとです。主人公は親からの虐待を受けている、という設定でしたが、正直（幸いなことに）ふんわりイメージで書いているので、解像度は低いです。

さて本編のことを少し。みんなのなんでもない日常が、いろはにとつては手に入らない非日常だったわけですね。最初の場面は警察に自首した場面でした。

「いろは」という名前は、皆さんご存知であろう「いろはにほへと」からきています。現代版にすると「いろは」という名前は「ああああ」「あいう」みたいなイメージですね。もちろん、「いろはにほへと」が現代の五十音順と同じ役割を持っていたかというと思うんですが、そのあたりは目をつむっていただいて。……でも「あい」という名前でも皮肉が効いていてよかったかもしれません。

あとがき

普段は二次創作を中心に書いているんですが、一次創作も今後書いていき  
たいなあ。



ウオトウ力を一箱

相良茂

1 あの日のバトケン

まだ二十歳そこそこだろう。タジク人らしい男は、銃を抱えたままうつ伏せに倒れた。

「これ以上奴らを近づけるな、バトケンを守れ！」

俺は銃声に負けないよう大声で叫んだ。弾丸は死の口笛を吹きながら耳元をかすめる。IMU<sup>(注)</sup>は若い戦闘員を繰り出して防御線を崩そうとしたが、道路が赤く染まっただけだった。まるで俺たちのいる峠だけ世界から取り残されたみたいだな。肌を焦がす日差しの下でこだまするのは、敵味方の怒号と銃声だけだ。太陽は俺たちを干物にするのかと思うほど照りつける。銃撃と太陽にさらされ続けて、集中力が切れてきた。

見たところIMUの軍勢はそれほど多くない。だが、新手が加われば水がホースの裂け目から噴き出すように、物量の差で突破されるだろう。俺たちは、ホースの裂け目に貼り付けられた一枚の防水テープだった。テープの下から水が染み出てくるのは時間の問題だ。すべてを投げ出したくなるが、俺

たちがこの場を離れば、こちら一帯は水浸しになる。

なに、味方が来ればなんともなるさ。バヤン軍曹が装甲車の中で各方面に連絡を取っている。そういえば俺たちが出動する時、訓練で留守だった部隊も、無線で呼び戻しを受けていた。もう少しすれば、俺たちの後方に到着するだろう。あるいは国境警備隊が増援に来れば、敵を挟み撃ちにできる。敵もそれを恐れているだろう。どうりで攻撃を続けるわけだ。

残弾は数発。もう弾倉の替え時だ。俺は土嚢の陰に座り、マガジンポーチに手を突っ込む。弾倉のストックはあと二つ。

「カトウコフ伍長、突撃しましょうか。相手はたかが乗用車四台ですよ」  
セイトが隣でA K、七十四の弾倉を外しながら言う。

「そうしたいのはやまやまだが、爆弾を積んでいるかもしれん。不用意に近づかんほうがいい。ジェンギス、弾丸の追加だ」

「はい！」

ジェンギスが中腰で装甲車に走り去る。

I M Uがバトケン州に侵入したため、俺たちは道路を封鎖すべく派遣され



た。だが、俺たちが土嚢を積んで間に合わせの防御線を築いた時、数台の乗用車が現れ、増援を待つ暇もなく銃撃戦が始まった。装甲車は砲塔が故障してしまい、エディールとジャクプが必死に直している。

両側から絶壁の迫る峠道で敵と出くわしたことは、幸運といえるべきか不運といえるべきか。開けた場所ではないため敵も散開することはできないが、奴らが後退して姿を隠し、両脇の山によじ登れば。あるいはもし、新手が山上から忍び寄ってきたら……。駆けつけた友軍が、俺たちの死体を見つける様子が目の前にちらつく。敵を進ませることはもちろん、退かせることもしてはならない。俺たちの視界におさまる場所で、奴らを足止めしろ。

「皆がんばれ、応援は必ず来るぞ！」

セイトが半ば自分に向かって叫ぶ。

「あの車、クルグズの村人のものだな。あとで敵に弁償させなきゃ」  
ムルザンが俺たちを笑わせようとする。

敵の車が一台、唸り声をあげて動き始めた。突っ込む気か。俺は連射に切り替え、前輪に狙いを定める。

その時、何かの影が俺の左手に飛び込んだ。咄嗟に銃口を向けた瞬間、国中のタイヤを破裂させたような音がした。

影は両腕を広げたまま、ゆっくりと崩れ落ちる。

逆光で見えなかった顔が地面に横たわり、あどけなさや精悍さのせめぎ合う目が閉ざされていく。

日に焼けた頬に、一筋の紅い川が流れ落ちた。

「ジェンギイイイイイイイス」

叫び声とともに目の前のすべての景色が白く溶け落ちた。

俺は全身に巻き付いた景色を振り落とそうともがく。重たい景色は灰色の布団に変わった。心臓の音がアパート中に響き渡っているように思える。俺は左腕で汗ばんだ額をぬぐった。イリーナとユーリヤを起こしていないか耳を澄ませる。時計に目をやると、まだ三時半だった。窓の外では、モミの木がひっそりと佇んでいる。

また夢を見たな。白み始めるにはまだ早い空を眺めやる。今は二〇一七年。最後に銃を撃ってから十年以上が過ぎたが、心のどこかには、いつもあの

日が居座っている。ビシケクは、今年も暑くなるだろうな。度々戦いの夢を見るので、イリーナとは部屋を別々にし、ユーリヤと同室で寝てもらっていた。咽喉が夢の中の太陽を覚えていたので、俺は音をたてないよう台所へ向かった。コップに水を注いでいると、ソ連製の冷蔵庫が慎ましくも厳かに音を立て始める。くすんだクリーム色の冷蔵庫には、どこで手に入れたのか、サングラスをかけたスイカのマグネットが貼りついている。古びた把手には赤地で銀の星がかたどられていた。

シヨロ社への出勤にはまだ早いが、満足のいく二度寝をするには遅い時間だ。まあ、横になって目をつむるぐらいはしておくか。今日はとにかくトラックの運転に集中し、ウオトゥカを一杯飲んで早く寝るとしよう。

## 2 バトケン 一九九九

「犯罪者どもは交渉の呼びかけに応じず、同胞や日本人技術者を拉致したまままだ。我々はこれより西から××村に突入し、敵を殲滅する。前進のみが勝

利と平和をもたらすことを忘れるな。諸君の日頃の訓練の成果に期待している。各員、配置につけ！」

ウルマツト大佐の訓示が終わり、俺たちの部隊は装甲兵員輸送車に乗り込む。二十四日の夕方までに十人ほどの戦闘員を殺したが、IMUは頑強に立て籠もっている。脱出した村人の話では、敵は村のあちこちに潜んでおり、一部が東西の出入り口にバリケードを築いたらしい。クルグズ軍の他部隊が東の道路を突破し、俺たちの部隊は西から突入することになった。

走り出した装甲車の座席で、敵がさっさと逃げ出すことを祈った。村ごと人質にされている住民のことを思うと、車内が一層暗く感じる。

「カトウコフ伍長……震えが止まりません」

ジェンギスが俺の右手でささやく。握りしめた銃が、車内の揺れよりも小刻みに動いていた。

「心配するな、俺たちがついていく。基本を思い出せ。敵より先に、真ん中を狙って二回撃つ。同士討ちや全滅を避けるため、仲間とは一定の距離を保つ。いいな？」

俺は銃を確認しながら念を押す。ジェンギスはまだ震えていたが、無言で大きく頷いた。

「打ち合わせ通り、左に乗っているカトウコフとジェンギス、セイトとムルザンで二組になるぞ。右に乗っているヴィクトルとマクスィム、ザキールとティムールも頼んだぞ。ジャクプ、村に着いたら速度を落とせ。エディール、砲手として周囲をよく警戒しろ」

バヤン軍曹が車長席から指示を出した。

「了解っ」

全員をしぼし沈黙が包み、エンジン音だけが辺りを満たす。

反対側に座っているヴィクトルは俺と同じカトウコフという苗字なので、皆は俺たちを区別したいとき、俺をカトウコフ、戦友をヴィクトルと呼ぶ。

「俺たちは二人ともカトウコフだから、どちらか一人戦死しても困らねえな」と普段は軽口をたたくヴィクトルも、今は黙ったままだ。

熱心なムスリムのザキールは、小声で「神の名において」と呟く。

マクスィムは銃を念入りに点検しているのだろう。

ムルザンとセイットは、数カ月前にマフィアの拠点で実戦を経験した。戦いをさっさと済ませて、浴びるほど馬乳酒を飲もうと話していたな。もっとも今回の相手は、マフィアよりも手強いが。

「ティムール、お前はウズベク人だが、IMUと戦うのは平気か」

エディールが、天井から吊り下げられた砲手席を回しながら言う。

「もちろんさ。自分はクルグズ国民だし、IMUはウズベク人にとっても敵だからな」

ティムールは即答した。兵員室の座席は背中合わせになっているため、ティムールの顔は見えないが、いつもより声に影が感じられる。テロリストが相手とはいえ、同胞であるウズベク人に銃を向けるのは気が重いだろう。

ジェンギスにとって初陣が夜であるのはまだマシなのかもしれない。自分が撃った相手の血の赤さは見えないから。もっとも、目と違い、鼻は暗い中でも鈍ってくれないが。ナゴルノ・カラバフで嗅いだ鉄の臭いは今でも忘れられない。

頭から血を流していたアルメニア人の少年のうつろな目、その少年の手を

引いてわずかな手荷物を抱えていた母親、足を引きずり何事かを呟いていたアゼルバイジャン人の老人のせわしない口元から、兵員室の座席に意識を引き戻す。

「了解、砲手には準備させている。間もなく村境だ。バリケードを突破したら、左右から装甲車を降りて散開しろ」

バヤン軍曹が無線機から顔を離し、潜望鏡を覗く。

「村境です」

ジャクプが鋭く叫ぶ。

「砲手、構え」

バヤン軍曹の声とともにエディールが前を向く。

その途端、装甲車の車体に鉛の弾丸が叩きつけられてきた。前方だけでなく、左右からも。ジェンギスが肩をこわばらせる。

「撃てえ！」

軍曹が叫ぶより前に、エディールは右へ左へと回転する。威勢の良い機関銃の金属音が、車内を満たす。味方の装甲車も前後左右へ攻撃を始めるのが

聞こえた。鉛の小雨は次第に降りやんでいく。

「バリケード制圧した、突入だ！」

バヤン軍曹が指令を出し、ジャクプがアクセルを踏み込んだ。ドラム缶などの障害物、そして瀕死の人間が跳ね飛ばされていく。

「いよいよだ、俺の後に続け」

俺はジェンギスの左肩を強く握る。青年は一瞬こちらを見て頷いた。

「出撃、武運を祈る」

軍曹の掛け声とともに装甲車が止まり、俺たちは側面のハッチを開いて飛び出した。

\*

俺たちは二人ずつ通りの両端に分かれ、塀に身を寄せながら物音を立てないように進む。猫が一匹、慌てたように通りを横切っていく。その向こうに生えているポプラの陰で、何かが動いた。

「誰だ！」

右を進んでいたセイトが叫んだ。答えの代わりに木陰から黒い人影が走



り出す。セイトは逃げようとする人影に撃ち込んだ。相手は声にならない叫びを発して銃を取り落とし、よろめいて左の塀にぶつかった。銃と持ち主の距離は七メートルくらいだろうか。相手は荒い息遣いで塀に寄りかかり、こわごわ両手を挙げる。薄暗い街灯で照らし出された顔に、脂汗と精悍な黒髭が光る。

「動くなっ」

俺は鋭く叫び、AK・七十四の引き金に指をかけたままにじり寄る。ジェンギスが俺の数歩後ろに従う。ムルザンが敵を縛り上げるため、ロープを取り出した。

あと十五メートルの所まで敵に近づいた時、どこからか弾丸がうなりをあげて飛んできた。遠くからも銃声が聞こえてくる。村のあちこちで戦いが始まったようだ。

「敵だ、散れっ」

俺は咄嗟に伏せた。ジェンギスも地面に身を投げ出すのが聞こえる。ムルザンがロープを手に慌てて右端へ走り出す。セイトも右に走りながら敵は

どこだと悪態をついた。見れば、倒れている敵よりも五十メートル前方、斜め右に銃火が閃く。どうやら曲がり角に隠れているようだ。

「右だ、右の曲がり角にいるぞ！」

俺は叫びながら撃ち返すが、なかなか当たらない。ジェンギスの弾丸も、残念なぐらいたずらに射手の居場所を知らせている。道路の上には遮蔽物がなく、こちらの姿は丸見えだ。

「伍長、ジェンギス、早くこつちへ！」

ムルザンが塀に身を寄せて叫ぶ。移動したいのはやまやまだが、敵が右へ行かせまいと狙い撃ちしてくる。せいぜい後ろにずり下がることしかできない。

「ムルザン、お前も早く援護しろよ！」

セイトが怒鳴りながら前方に撃ちまくる。

こんなことなら、初めから通りの右端に行けばよかったな。後ろからも銃弾が飛んできた。くそっ、取り囲まれたか。舗装が不十分な道路は石ころだらけで腹が痛い。

「ムルザン、向こうの敵は任せた、俺は後ろをやる」

セイトが応戦の方角を切り替える。

「うわあセイト、向こうから五人も襲ってきた！」

「ムルザン、何とか足止めしろ！」

そうだ、さっきの敵はどうした。一瞬そちらに目を向けると、降参しかけていた敵は味方の出現で気が大きくなり、自分の銃に這い寄っていく。仕方ない。俺は敵の背中に照準を合わせた。

その直後に、新兵が最後の迷いを断ち切る叫びとともに銃声が鳴り渡り、一人目の敵は使い古した銃の上に崩れ落ちた。

\*

俺たちは今、××村から撤退し、近隣にある○○村の警戒に当たっている。夜の闇は気味悪く、数時間後の夜明けが待ち遠しい。結局、××村を解放することはできなかった。夜間だったこと、敵が巧妙に逃げ隠れたことから、早期の奪還は不可能と判断された。情報統制で詳しいことは分らないが、他の部隊で戦死者が出たほか、民間人も巻き込まれて亡くなったという。無

理に攻め込めば、犠牲者は増えるばかりだ。

「さっきのが、初めてでした」

ジェンギスが呟く。

「お前のおかげで、あの場を切り抜けられたのさ。ありがとよ」

俺は銃を左右に向けながら微笑む。部下が一人目の敵を射殺した後、俺たちは装甲車の援護を受けて敵を追い散らしたが、マクスィムとティムールが負傷して病院へ運ばれ、移動中の車内は一層重苦しい空間となった。いつ自分の番が回ってくるだろう。皆、そのことで頭がいっぱいだった。

「自分、これから普通に暮らしていけるんじゃないか」

ジェンギスが台尻を肩に当て、銃を撃つ真似をしながら言う。

「大丈夫さ。考えるのは、戦争が終わってからにすればいい。今は目の前のことだけに集中するんだ」

「はい……カトウコフ伍長は、いつも勇敢で落ち着いていらっしやいますね。自分はどうしても怖いので、早く伍長みたいな軍人になりたいです」

「はは、俺も最初は怖かったな。というか、今でも怖いよ。戦いが始まった

ら、ただ銃を撃つことに必死なだけさ」

「そうですね……戦うことそれ自体にひたすら意識を向けるんですね」

「そういうことだな……始まる前はどうしたって緊張するが、戦闘中に自分の恐れを見つめる余裕はないしな」

「なるほど、勉強になります。そういえばカトウコフ伍長は、どちらで生まれたんですか？」

「ああ、俺はカザフで生まれてクルグズで育ったんだ。俺はロシア人だけど、クルグズが故郷さ。子ども時代は、夏休みに友だちと山に登るのが楽しみだったな」

「そうなんですか！　自分が生まれたのはオシユ市なんですけど、親父が死んだあと弟が養蜂を」

銃声が闇を引き裂いた。

ジェンギスも俺も銃を構えなおす。見回りをしていたセイトとジェンギスが、息を切らせて走ってきた。

「伍長、敵が攻めてきました！」

「何人だ？」

「暗くてよく分かりませんが、五十人くらいかと。続々と攻めてきます」

「ちよつと多いな、俺たちだけでは村を守り切れん……セイト、ムルザン、ジェンギス。バヤン軍曹に敵が攻めてきたと報告しろ。できれば、この路地の角で装甲車とともに待っていて欲しいと伝えてくれ。ひとまず村を脱出だ」

「伍長は？ 自分も残ります」

ジェンギスが意気込む。ムルザンやセイトも頷いた。

「いや、お前たちは先に逃げろ。俺も後から行く。ヴィクトル、時間稼ぎに手を貸してくれ」

「いいともさ。ナゴルノ・カラバフ以来の仲じゃないか」

ヴィクトルは銃を軽く叩いた。

××村と違い、今俺たちがいるコゴイ通りは両側にポプラが並んでいる。

ジェンギスたちが走り去るのを確認し、ヴィクトルと俺は左右に離れた。

「いいな、ヴィクトル、昔みたいに撤退するぞ」

「了解、〃チェスの駒〃だな。一分ずつ交代で撃とう。俺が最初に撃つから

一分経ったら替わってくれ」

「よしっ」

俺はポプラを盾に銃を構えた。十数人の人影が氣勢を上げながらこちらへ歩いてくる。

「今だ」

ヴィクトルが引き金を引いた。たちまち二、三人の敵が倒れる。相手は慌てふためいて散らばり、躍起になって撃ってきた。俺は一分数えながら後ろへ下がり、射撃を始める。ヴィクトルが後退していくのが目の端に映った。交代で四、五回撃っただろうか。途中で弾倉を付け替えるときには、一人がボルソック（揚げパン）と叫び、もう一人がミヨット（蜂蜜）と叫んだ。俺もヴィクトルも、子ども時代はこれが好物だった。揚げたてのボルソックには、蜂蜜がよく合う。弾倉の交換が済んだら、チャイ（茶）と叫ぶのも十年前と同じだ。

「カトウコフ、あと数本でポプラが途切れるぞ」

ヴィクトルが後ろを振り返って叫ぶ。

「分かった、だいぶ距離が取れてきたし、並木が途切れたら一気に走るぞ」

「了解」

突撃するのは簡単だが、撤退するのは難しくて怖いものだな。いよいよ脱出だ。最後のポプラの後ろに立ち、先頭の敵を撃つ。

「走れ！」

俺たちはダッシュした。弾丸が肩の上をよぎる。曲がり角から、自動車のエンジン音が聞こえる。音源にたどり着けるか否かで、俺たちの生死が決まるだろう。角を左に曲がると、装甲車が砲座を後ろに向けた態勢で待機していた。排気ガスの臭いが、イリーナの作るクレープのようにかぐわしい。

「伍長、早く！」

ジェンギスがハッチから手招きする。

俺たちが飛び込むのを確認し、バヤン軍曹が発車を命じた。

＊

「村を奪われたのは残念だが、勇敢に戦い、味方に損失を出さず撤退できたのはたいしたものだ。お前たちには三日間の休暇と褒美を与えよう。何が



いかね？」

ウルマツト大佐がヴィクトルと俺を交互に見る。八月二十四日に戦闘が始まってから、一カ月が過ぎていた。

「はっ、ではウオトゥカを一箱頂きたいです。今回の戦いでは、若い兵士たちも奮闘しておりますから」

俺は直立して答えた。

「よからう。思う存分飲んで、しっかり羽を伸ばしてこい」

ウルマツト大佐は外出許可証にサインをして笑った。

＊

「ジェンギスも強くなったな。訓練時代とは見違えるほどだ」

セイトがウオトゥカの瓶を片手に、顔を真っ赤にして言う。

「ほんと、ほんと、これでお前も一人前の兵士だな。近所の人たちも喜ぶだろう」

ムルザンがニコニコとカルバサ（サラミ風ソーセージ）をかじる。

「ありがとうございます！ まだまだ足を引っ張ってますが、先輩たちのよ

うになれるようこれからも頑張ります」

ジェンギスが照れくさそうにウオトウカを口に運ぶ。

「お前、長男だってな。弟と違って家を離れて自立しなけりやならんから、入隊前も仕事探しや一人暮らしで大変だったろう。今までよく頑張ってきたな」

バヤン軍曹がジェンギスをねぎらう。ザキールも、ウオトウカの代わりに乳酸飲料を飲みながら静かに笑っている。

「いえいえ、バヤン軍曹殿や先輩たちがいろいろ教えてくれたおかげですよ。そういえば軍曹殿、ティムール上等兵やマクスィム上等兵はどうしていますか？」

「ああ、ビシケクの病院に移って少しずつ回復してきている。二人とも、自分たちだけ戦えなくてすまないと言っていたぞ」

「そうですか、それを聞いて安心しました」

青年兵士は数カ月ぶりに満面の笑みを浮かべた。

「戦争が終わったら、早く可愛い嫁さんをもらってお袋さんを安心させてや

れよ」

ヴィクトルが上機嫌でジェンギスの右肩を叩く。

「はい！　仕事が軌道に乗ったら、親戚にいい人を紹介してもらって、式の日程が決まったら皆を呼びます」

ジェンギスがカルバサを手を皆を見回す。

「おいおい、自分も忘れずに呼んでくれよ。砲手として、陰ながら支えてくれるんだから」

エディールが笑いながら言った。ジャクブも煙草をふかしながらニヤリと笑う。

いくら飲んでも、流した血の赤さを忘れることはできない。だが、せめて休暇の前くらいは浴びるほど飲んで、生臭い記憶を遠ざけたかった。

＊

「ただいま、ユーリヤ。元気にしていたか？」

ドアを開けて顔をのぞかせた娘に声をかける。ユーリヤは目を丸くして台所へ駆けていった。

「ママ、知らないおじさんが来たよ！」

「なにいつてるのよ、お父さんに決まってるじゃない」

「ううん、違うよ。だって髭がいつぱい生えてるもん」

なるほど手を顔にやると、口も顎も髭で埋もれている。そういえば、一カ月髭を剃っていなかった。俺は台所にいる妻に声をかける。

「イリーナ、湯を沸かしてくれないか。久しぶりに髭を剃りたい」

＊

十月になり、日本人たちは無事に解放され、国に帰っていった。

「日本の人たち、無事に帰れてよかったな」

ムルザンが銃を点検しながら言う。

「そうだな、きつと今ごろは家族と一緒に味噌スープでも飲んでるだろう」  
セイトが弾倉に弾丸を詰める。

「いいなあ。俺たちも早く家に帰りたいよ」

「まあ、そうばやくなよ、ムルザン。もう少しで戦いは終わるはずさ」  
俺は努めて明るく言った。

I MUは政府との交渉により、ひとまずクルグズを去っていったが、翌年に再び攻めてきた。

3 バトケン 二〇〇〇

敵の車が一台、唸り声をあげて動き始めた。突っ込む気か。俺は連射に切り替え、前輪に狙いを定める。

その時、何かの影が俺の左手に飛びこんできた。咄嗟に銃を左に向けた瞬間、世界中のタイヤを破裂させたような音がした。影は両腕を広げたまま、ゆっくりと崩れ落ちる。

逆光で見えなかった顔が地面に横たわり、あどけなさや精悍さのせめぎ合う目が閉ざされていく。

日に焼けた頬に、一筋の紅い川が流れ落ちた。

「ジェンギイイイイイイス」

俺は敵の狙撃手を、それ以上に俺自身を決して赦さない。山上に向かって

弾倉が空になるまで撃ち続けた。斜面を一丁の狙撃銃が転がり落ちてきた。戦友を失った装甲車が、悲しみと怒りの火を噴く。突進してきていた車は沈黙させられた。

\*

「兄のことを受け入れるまで、母も自分も、しばらく時間がかかると思います……」

ジェンギスの弟、サマツトは穏やかに、だがきっぱりと言った。

俺は黙礼し、ソファを立ち上がった。

ジェンギスの母アイシャさんは

「息子は……最後まで務めを全うしたんですね……」

と言葉を絞り出し、自室に籠ってしまった。

全財産をはたいても、いや俺の命を投げ出しても、あいつを連れ戻すことはできない。窓から見える天山山脈よりも遙か遠い所へ行ってしまった。パミールの高原を歩き回っても、イシクル湖の底を泳ぎ回っても、二度とあいつの繊細な笑顔を見ることはできないのだ。表通りが妙に眩しい。道を行き

交う人の足音も、自家製の牛乳を売り歩く老人の声も、馬車に乗って市場に向かつていく一家の話し声も、すべてが路上の逃げ水だ。バス停のある大通りへ、どのように歩いて行っただのか思い出せない。俺の目は開いていながら、何も映らなくなっていた。

伍長！

誰かが心のなかで叫んだような気がした。

周りを見回すと、俺は道路の真ん中にいて、車が盛んに行き交っていた。慌てて反対側へ渡り切る。一歩間違えれば自動車にひかれるところだった。もしかしたら、今のはジェンギスだったのかもしれない。あいつは三度も俺の命を救ってくれたんだ。

＊

ウルマツト大佐は窓辺に佇み、しばらく風に揺れる木々を眺めてから振り向いた。

「気持ちには察するよ。自分もアフガンで多くの部下を失った。だが、満期退役まで残りわずかだから、もう少し続けないか」

俺は床に目を落とす。

「十年間戦ってきましたが、だいぶ動きが鈍ってきております。自分の判断力や注意力が低下したことから、若い兵卒を犠牲にしてみました。これ以上軍隊に居ても、クルグズを守ることは難しいかと……」

「そうか……兵役が終了する前だと年金を受給することはできないが、それでもいいか？」

「はい」

「……分かった、上層部に打診してみよう」

「はっ、よろしくお願いいたします」

俺は敬礼した。

＊

俺は今、飲料会社の運転手として働いている。仕事帰りに仲間と近くの小売店に寄り、店先のベンチでチーズやビールをつまむのが月一回の楽しみだ。



家に帰ったら、イリーナが夕食を用意して待っていてくれる。ウオトゥカで晩酌をする、これに勝る喜びはないな。

戦友たちは心から別れを惜しんでくれた。若い兵士たちを残して軍隊を去ったのは心苦しいが、もう限界だ。ティムールも戦争の後遺症で軍隊を離れ、今はパン屋で働いている。

国を守るために戦ったことは後悔していない。だが、戦争はいつだって若者や女、子どもや老人を犠牲にする。それに、敵も俺たちと同じ人間だ。一時はジェンギスの敵討ちのつもりで戦ったが、戦争がもたらしたのは、未来を絶たれた者たちの墓標と、遺族たちの癒えない傷だけだった。もし、もう一度銃をとることがあるとすれば、ただ立場の弱い者たちを守るためだけに戦う。

今でも休憩時間や寝る前など、考える余裕が出てしまうと繰り返す思う。

あいつが駆けつけるのが、あと数秒遅ければ。あるいは敵が引金を引くのがあと数秒早かったなら。だが、あいつが死をもって与えてくれた生を一日たりとも無駄にしてはならない。だから、今日も俺は仕事に出かける。いつ

の日か、もう一度ジェンギスに会って謝れる時がくるまで。

相良茂

(注) ウズベキスタン・イスラーム運動。ウズベキスタン政府の打倒や、中央アジアにおけるイスラーム法に基づいた国家の樹立を掲げて活動したテロ組織。一九九九年にフェルガナ盆地でクルグズ(キルギス)治安部隊と交戦し、日本人技師などを拉致した。

## あとがき

二〇一七年の夏、家族と共にクルグズ共和国に滞在していた時、父と私は偶然ロシア人の退役軍人Yさんと知り合い、様々な思い出を聴かせていただきました。Yさんはソ連時代末期から兵役につき、現在は軍人をやめて第二の人生を歩んでいます。私は挨拶程度のクルグズ語・ロシア語しか話せませんが、父に翻訳してもらいながらお話をうかがい、その方の実直で温かい人柄を感じました。この作品は、Yさんの戦争体験に着想を得て書いたものです。

私は戦後日本に生まれた人間であり、兵役や従軍の経験はなく軍事にも疎いため、軍隊や戦闘のリアルな描写は苦手です。ですが、Yさん、そしてYさんをかばって命を落とした一人の若者の「生きざま」を誰かに伝えたく小説を書きました。二〇一七年の日記に書きつけた、バトケン戦争に関するYさんの断片的な証言を当時の新聞記事と照合し、登場人物の人生を疑似体験しつつ歴史の一断面を描く試みは、ときに楽しく、ときには憂鬱な作業でし

た。

快活なYさんが、戦争の話になると目に涙を浮かべて語られていたことを今でも思い出します。考えてみると、Yさんに限らず私たち人間は皆、生きるこの大変さや病苦、過去の辛い記憶など、本人にしか分からない“なか”を抱えながら必死に生きているのかもしれない。人生という旅路を懸命に生きている皆さんが、カトウコフたちの喜びや苦しみ、悲しみと決意を通して何らかの“生きる力”を見出してくだされば幸いです。ここまでお読みいただき、本当にありがとうございます。

なお、本作品は一部事実に基づいていますが、物語自体はフィクションです。登場人物はすべて架空の人物であり、同名の実在する人物とは一切関係がありません。



なりやまず

幾里

●  
眩い光に満ちた舞臺から客席を見回す。座席ひとつひとつは視認すること  
が出来ない程に小さく見えた。客席の照明は點いてゐないため、觀覽席は黒  
いヴェールを被せたやうに薄暗い。その光景は、無數の齒を生やした口がこ  
ちらに向かつて開いてゐるやうであつた。ピノッキオが鯨に吞まれる瞬間に  
抱いた頼り無さとは、このやうなものであつたのだらうか。

これ程廣い劇場で演奏するのは初めてであつた。一歩進む度に、足音はあ  
つといふ間に遠くへ飛んで行つてしまう。かと思へば、すぐに傍へ返つて來  
る。足音は反響を繰り返すうちに磨かれて、光澤が出て、煌びやかになる。  
この國最大の劇場ともなると、ただの足音までも華やかに飾り立てられてし  
まうのか。見慣れた近所の風景でも、畫家が油繪にした途端に素晴らしい藝  
術作品になつてしまうやうな、さういつた感じがする。結局はどのやうに見  
せるか、それに盡きるといふことか。

視線を天井へ。

この世界に、太陽より明るいものが存在しても良いのであらうか。自然の

攝理に反してゐるのではないか。そのやうな問ひが浮かぶ程に、幾つもの照明が目を灼くやうに輝いてゐる。反射的に目を瞑ると、眼球にこびり付いた光の残滓が見える。強い光に遮られ、どれほど目を細めても天井の最奥まで見通すことは出来なかつた。夜の繁華街で、ビルとビルとの間を覗き込んでゐる時のやうな気分になつた。闇が、蠱惑するやうな眼差しをこちらに向けてくる。深淵もまた、こちらを覗き込んでゐるといふやつだ。

手にジツトリと汗が滲んだ。舞臺照明が放射する熱によるものではなく、恐怖心によつて分泌される冷たい汗であつた。明日、この舞臺では、たくさん音樂が演奏される。観客席は、恐らく人で埋め盡くされる。

人で出来た檻。樂器は枷。衆人環視。娛樂。

●  
目抜通りには人が溢れてゐた。彼等の頭上では旗が穩やかな風に揺れてゐて、その上には透き通る青空があつた。雲と鳥とを我が身に泳がせた、人々を唆すやうに爽やかな青である。街中のスピーカーからは音樂が鳴り續けて



ゐた。勇ましく突き抜けるラッパの音。爽快なスネア。記念日に相應しい、鼓舞されるやうな音楽。

祝日に浮かれる群衆の中に、ギターを背負つて歩く男があつた。彼は吊り目であるために、仲間から狐と呼ばれてゐる。狐は音楽番組に出演するために、放送局に向かつてゐた。戦勝記念日恒例の特別番組であつた。この國には数少ない、娯樂を扱ふ番組であるといふこともあつて、毎年高い聴取率を記録してゐた。

彼のバンドは、今回が初めての出演である。音楽を生業とする者にとつて、この番組に出演することは「箔を付ける」ことを意味してゐた。實際、出演を祝ふ言葉が彼等の許に多数届いてゐた。それらの言葉を思ひ出す度に、狐は眉間に皺を刻み、顔を歪めた。その度に切長の目が威壓感を醸し出して、モーセが海を割るやうに群衆を眞ツ二つに割く。彼はその眞中を進んだ。

彼のバンドは寡作で知られてゐた。それは楽曲の制作が遅いためではなく、×××によつて楽曲の発表が差し止められてしまうためであつた。×××によれば、彼のバンドは頽廢的であつた。新しさと、それに付随する刺激的な

魅力を、そのやうに判断したのであらう。

彼等は樂曲を制作する度に、歌詞の改變や樂曲のトーンダウンを度々要求されてゐた。それはレコード會社が自主規制といふ形で行ふこともあれば、××××××から内閲といふ形で指示されることもあつた。修正に修正が加へられ、レコードにプレスされた樂曲は、原型を留めてゐないことも多かつた。不本意な修正を施したものが自分達の作品として世に送り出されることに、それが商業的に一定の成功を収めてゐるといふ現實に、狐は薄ら寒い心地がする。自分の子供であると差し出された嬰兒が、全く自分と似てゐなかつたときのやうな。

立ち止まる。横斷歩道の白線が覆ひ隠されるほどに通行人の多い交叉點の中央。人々の流れは大きく亂れ、舌打ちがあちらこちらから聞こえてくる。

檢閲を逃れる方法は、無い訳ではなかつた。ライブをやりたいなら、地下で秘密裏にやれば良い。樂曲を賣りたいなら海賊盤を賣れば良い。法律と、生活の安寧を考慮しなければ、檢閲なんて簡単に逃れられる。自由なんて簡単に手に入る。現に、路地裏には無數の出版物や外國の音樂が溢れてゐるで

はないか。

結局、狐には勇氣が無いのだった。

音楽で生計を立てるといふ夢を叶へてしまつて、それを手放すことが出来ない。その一方で、大人しく検閲に従つてゐることに情けなさや恥ずかしさを感じてゐる。

ひとは食はなければ生きて行けない。餌にありつくためには、ひとは國や組織に飼ひ慣らされる以外に手立てが無い。命じられたら××××××になつて、遠い所で戦うこともする。彼等はこの不思議な構造を疑問にも思はず、終ひには疑問に思ふ人を氣違ひ扱ひする有様だ。

狐は、彼等に言はせれば氣違ひであつた。不幸なことに、彼はそれを自覺してゐた。何の疑問も持たずに盲従することが出来たら、それはどれほど素晴らしいことだらう。何の罪惡感もなく音楽を供出することが出来たら、彼は晴れやかな顔でギターを掻き鳴らしてゐたはずだ。丁度、今日のやうな青空の如く。

エレキギター、エレキベース、キーボード、ドラムセットがラジオブースに所狭しと並んでゐる。アンプリファーやドラムセットの傍にはマイクが設置されてゐて、床にはケープルやシールドが縦横無盡に走つてゐる。

マイクは監視のために、ケープルやシールドは捕縛のためにあるのではないかと感じられるほど、ブースには閉塞感が満ち満ちてゐる。その源泉はガラスの向かう、副調整室から睥睨する×××××——検閲に關する人々の事を彼等はさう呼んでゐた——であつた。狐が餘計な事を話したら、×××××は放送を即座に中斷させるだらう。そして、狐は處分を受ける。詳しい事は知らない。

通常、出演者は公開放送用の大きなスタジオで歌唱するのだが、彼等のバンドは小さなラジオブースで演奏することを希望した。修正を繰り返した、繼ぎ接ぎだらけの樂曲を演奏する事に對する恥ずかしさや後ろめたさがあつた。そのやうなものを抱へながら觀客の前に出たくなかつた。

いつそ音量を最大にして、こいつの鼓膜を破裂させてやらうか。ギターを握りながら、狐はそんなことを考へる。感情を解さないやうな、

×××××の冷たい眼光を無遠慮に浴びせられてゐると、沸々と怒りが湧いて来る。今回演奏する全ての楽曲は、自主規制や検閲によつて歌詞を書き換へたものや、知らない作詞家を書いた歌詞に曲を附けたものであつた。本来の、本當の、自分達の曲はひとつもなかつた。

何故？

自分達の音楽は頹廢的だから。

頹廢！

右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。

理解できないもの、あるひは目新しいものを排除しやうとするための論理は、結局のところ、道德の問題に根據を求める。

右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。

道德……。

右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。

辭典に載つてゐる言葉だけが正しく、それ以外の言葉を間違ひだと思ひ込んでしまふ。

右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。  
では、誰がその辭書を作ったのであらうか？  
右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。  
何故、他の辭書を参照しないのであらうか？  
右手で六本の鉄線を亂暴にストロークする。  
誰も、そんなことは考へない。だつて、面倒臭いでせう？  
右

手

で

六

本

の

鉄

線

を

亂

暴

に

ス

ト

ロ

丨

ク

す

る

！

「狐、音が滅茶苦茶だな」

巨漢が胴間聲で狐に尋ねた。彼は仲間から熊と呼ばれてゐた。

「弦を張り替へたばかりなんだ」

×××××は既に退室してをり、睥睨はもう無かつた。身體の内側に熱が

籠ったのか、狐は額に少し汗を掻いてゐた。

「弦を張り替へたんですか。張り切つてますね」

梟も會話に混ざる。瘦身の眼鏡を掛けた男である。

「そんなぢやない」

實際は、錆びるまで弦を放置してしまつてゐたのであつた。

「狐、機嫌悪いな。どうした」

「熊さん。また何かしたんですか」

「俺だつたか！」

「何もされてゐない」

「梟の野郎か」

「僕でしたか！」

「何もされてゐない」

「栗鼠のちんちくりんか」

栗鼠とは、ボーカルとベースを擔當してゐる女のことである。背が小さいために、さう呼ばれてゐた。



「しつこい。俺の機嫌は、今この瞬間に悪くなつた」

頭を掻き篋りながら、狐はブースから出て行つてしまつた。

「怒つちやいましたかね」

「何、煙草だろ」

「狐は群れを作らないつてことですか」

狐は苛立つてゐた。寢不足によるものでもあり、監視されてゐることによる精神的な息苦しさによるものでもあつた。そして、それを自身の内部で處理出来てゐないことに、狐は自己嫌惡した。

「今日の狐は様子がおはひい」

副調整室の隅で煙草を吸つてゐる狐の顔を、栗鼠が訝しげに覗き込んだ。

アーモンドを口一杯に頬張つてゐる彼女の様子は栗鼠そのものであつた。

「いつも通りだ」

「とてもさうは見えない」

栗鼠は狐の肩に兩手を置いて、問ひかける。

「今、何を考へてゐるの？」

「何も考へてない」

「狐のくせに、嘘が下手」

栗鼠は口の中で轉がすやうに笑つた。狐は決まりが悪いやうな顔をして答えた。

「昔のことを考へてゐた。小學校の時のことだ」

「随分と昔のことだね」

「音楽室にマンドリンがあつて、それをずっと弾いてゐた。同級生が休み時間、校庭へ飛び出して行くのを見て、ひどく氣分を悪くしてゐた頃の事だ」  
「うん」

「新しい脚に慣れてきた頃だつた。それでも、走ることは出来ない。それに苛立つて、音楽室に行つたんだと思ふ。音楽を、運動と對極にあるものだと思つたんだな」

栗鼠は黙つて耳を傾けてゐる。

「偶然目に入つたのがマンドリンだつた、といふことだ。音楽といふものは、

もつと前向きな人間がやるものなのかもしれない」

「それなら私、今日で脱退しなきゃいけないな」

栗鼠は天井の照明を眩しさうに見た。

「私は満たされない奴らに向けて歌詞を書いてゐるつもりだ」

狐は俯いたまま黙つてしまふ。煙草の先から燃える音が聞こえるほど、場は静まる。

「××××××は、全員が満たされてゐることにしなければならぬらしいけど」

栗鼠は吐き捨てるやうに言つた。

「いつそ……」

「止めとけ」

狐は栗鼠の顔に煙を吹きかけると、そのまま副調整室を出て行つてしまつた。

廊下で壯年の男が狐に聲を掛けた。レコード會社の社員であつた。

「何してるんですか？」

「様子見だ」

「子供ぢやないんですから、お守りは要らないですよ」

「あまり暴れるなよ。お前らはこれからだ。ここで摘まれるやうなことになるたら勿体無い」

「暴れたことなんて無いんですけどね」

「大人しくしておけといふことだ」

「いつも大人しいですよ」



ライブから数日経ち、レコーディングスタジオに全員が集まっていた。

狐は鞆から楽譜を取り出した。栗鼠も原稿用紙を取り出した。どちらにも修正の跡が切創と血飛沫のやうに飛び散っていた。曲に合ふ歌詞を、歌詞に合ふ曲を……といふやうに、曲や歌詞が修正される度に、両者の擦り合はせを行はなければならなかった。レコード會社のとの契約を履行するために、深夜まで作業をする日が續いてゐた。



×××××、××××××××××××××××××××××。

スタジオの螢光燈は、壽命が盡きかかつてゐた。連日、深夜まで扱き使はれてゐるのだから當然である。その薄暗さの下で狐は煙草を吸ひ、熊は椅子に踏ん反り返つて座り、栗鼠はペンを指先でクルクル廻す。梟は机に突つ伏して寝てゐた。彼は梟と呼ばれてゐるくせに夜が苦手であつた。全員が疲れ切つてゐた。

「もう要らないんじやねえか。曲も歌詞も」

熊が大きく伸びをしながら言つた。彼は飲酒してゐた。

「どうした」

「曲と歌詞に問題が無ければ發賣出来るんだらう？」

「さうだと思ふが」

「曲も歌詞も無くしてしまおうや。さうすれば×××も文句は言へねえだらうさ」

熊は酔ひ過ぎたのか、顔を眞赤にして叫んだ。呂律は所々怪しかつた。

「何を收録するの？」

「そんなの何でも良いだらう」

「そんなヘンテコな物、會社が賣つてくれない」

「ソノシートなら安くて濟む。それに赤字になつても、それが帳消しになる位には俺たち稼いできただらう」

「まあ……」

「意見廣告だ。ダメと言はれたら自腹切つても良いさ」

狐と栗鼠にとつて、それはとても魅力的な提案であつた。二人とも、終はりの見えない修正にも、檢閲の厳しさにも疲れ切つてゐた。音樂の根源的な部分に向き合ふ良い機会かもしれない。話し合ひは大いに盛り上がった。日頃の鬱憤と共に、アイデアが無盡藏に湧き出てきた。レコードのジャケット案から一曲の時間まで、纏めるのに骨が折れるほど多くの案が出た。三人全員が自棄になつてゐた。大きくなる三人の聲量に刺戟され、梟が目を見ました。

「どうしたんですか。仲が良いですね」

三人は、次回作の案を梟に話した。梟は首を捻つて暫く考へた。

「ここまですれば、何かを感じてくれる人がゐるかもしれないね」

彼等は當日のうちに録音を始め、數日でデモテープを完成させた。

表面を再生する。

收録されてゐるのは無音である。音楽ではなかなか表現することが難しいはずの靜謐さを湛えてゐた。耳を澄ましてゐると、集中力が研ぎ澄まされるのを感じた。

裏面を再生する。

收録されてゐるのはノイズである。一言で表すなら無秩序であつた。街のあちこちで録つた雑音に、樂器を滅茶苦茶に鳴らした音を重ねた。大變耳障りであつたが、偶然にも彼等の苛立ちや無力感と同期してゐるやうに感じられた。

これは……

「傑作ですね！」

「良いね」

「でも、絶對賣れないな」



「ああ、それも含めて最高だ！」

早速デモテープを携へてレコード會社を訪ねた。デモテープを聞いた擔當者は大變驚いて、自分の耳が異常を來たしたのではないかと疑つた。

「これは何なのですか」

「修正したものです」

「これがですか」

「さうです」

「なるほど……」

「變ですか？」

別の社員が來て、また別な社員に判斷を委ねる。あるひは再生機器を交換する。これが何度か繰り返された。誰も否定はしなかつた。

歸り際、壯年の社員が狐に聲を掛けた。彼は外出から戻つて來た様子であつた。

「狐、限が酷いな。眠れて無いのか」

「さう見えますか。充分に寝てゐるはずなのですが」

「大變だと思ふが頑張つてくれよ。ここが正念場だ」

「はあ」

壯年の社員は伏し目がちに、ここではない、どこか遠くを見た。

「俺が新入社員だった頃も、こんな感じだったんだ」

ああ、さうなのか。

俺らも暫く活動出来なくなるかもしれないな。

狐はそんなことを考へた。

後日、狐はレコード會社から、デモテープに収録されてゐた樂曲を發賣するといふ旨の連絡を受けた。

ソノシートは飛ぶやうに賣れた。レコード會社には在庫の問ひ合はせが殺到し、どこのレコード店にも行列が出来てゐた。賣り上げは様々な記録を大幅に更新し、從來のレコードとは一線を畫する賣れ行きを見せてゐた。

この社會現象と呼ぶべき動向に、彼等は氣味の悪さを感じてゐた。狐達にとつて、このソノシートは抗議のために撒いたビラのやうなものであつた。

しかし、大衆がその意圖を汲んでゐると思へなかつた。では、何故人々は熱狂してゐるのだらう。

狐達はスタジオにゐた。全員が黙つてゐた。ぐやうに、丸く透明な塩化ビニールを眺めた。光に透かすと、刻まれた溝が繊細な陰翳を作り出してゐるのが見える。ソノシートが收納されてゐた眞白なジャケットは、何の飾り氣も無く、購買意欲をまるで唆らない。何故これが賣れてゐるのか狐には理解出来ない。栗鼠にも、熊にも、梟にも理解出来ない。

レコード會社の社員がスタジオに入つてきた。若い、生眞面目さうな男であつた。

「また取材ですか？　こちらに話せる事は何も無いですよ」

本当に話せる事が何ひとつ存在しないため、ソノシートに關する取材は全て斷つてゐた。

「いえ、取材ではなく、出演依頼が來てまして……」

劇場の觀覽席は、一萬を超える人間で埋め盡くされてゐる。満員であつた。貴賓席には、政治家や貴族の人間が多數見受けられた。會場の警備は嚴重で、出入口だけではなく、舞臺袖にまで警察官が立つてゐた。

次に演奏するのは、現在記録的な人氣を博してゐるバンドである。曲目はもちろん、先日發賣されたソノシートに收録された二曲。ライブでは初めて披露されるといふことで、觀客の期待は高い。

突然點燈する舞臺照明。觀客の拍手と歡聲が瀑布のやうに降り注ぎ、會場が揺れる。舞臺上では四人の演奏者が、拍手が止むのを待つてゐる。彼等は俯いてゐるため、表情はわからない。靜寂が訪れ、觀客は恍惚とした表情でそれを聞く。今日の演奏は録音され、それも賣れに賣れた。この曲達が多く  
の××を慰め、勇氣づける曲となるまで、さう時間は掛からなかつた。

イニシエーション（あとがきにかえて）

人を殺しました。手で首を締め上げたら呆気なく死にました。この日を境に、私は大人になりました。

この儀式は魔法みたいに、子供を大人にするのです。指が柔らかい皮膚に埋まる感触や、骨の軋む音が、自分の中の子供の部分を急速に書き換えてゆきます。内側から改造されているような、奇妙な感覚でした。蛹の中にいる虫は、このような感覚を抱くのでしょうか。手の力を抜くと、肉塊が音を立って地面に叩きつけられました。生命の面影が失せ、ただの物として地面に転がっているそれを見ると、体の内に充実感が芽生えるのを感じました。これが大人なった合図なのだと確信しました。記念品として貰った、肉塊から削いだ耳を眺めながら。

恍惚。

頬が熱を持って、頭には溶けるような浮遊感がありました。お酒を飲んだ時みたいでした。周囲を見渡すと、同じく儀式を終えた新しい大人たちが瞳

に全能感を湛えて立っていました。彼らは全身に自信を纏い、人を動かすエネルギーに満ちた声になっていました。彼らは三々五々、肩で風を切るように歩いてどこかへ行きました。

私はしばらくその場に留まって、片付けられている死体を眺めていました。肉の塊となった彼らは、台車に載せられてどこかへ運ばれてゆきます。儀式に用いられるのはハネ品なので、食卓に並ぶことはありません。ならば、それらはどこへ行くのだろう。そんなことを考えることはありません。空想なんて子供のすることです。現実には目を向けるのが大人です。私は運ばれてゆく死体を知覚しましたが、それ以上は何の感慨も抱きません。儀式を終えてから、指が肉に埋もれる感触や骨が軋む感触が手にこびりついて、私に悪夢を見せました。しかしその感触も、もう手には残っていませんし、悪夢を見ることがないでしょう。

二十歳の人間は遅しく、立派な存在であるように、子供だった頃の私の目には見えていました。しかし、いざ自分が二十歳になってみても、全然そんなことはありませんでした。貧弱な体に、締まった喉から搾り出される通ら

ない声。儀式が終わるまで、皆は私のことを失敗作だと言っていました。

しかし私は大人です。儀式を経たのですから、誰が何と言おうと大人です。少年少女に威張り散らかし、飲酒、喫煙を味わい楽しむ権利があるのです。少年少女は私の姿を見て、大人への憧れを抱き、畏怖し、尊敬するでしょう。まずは、今まで私のことを散々嗤ってきた人々に、私が大人であることを証明してみせます。何故なら私は大人だからです。

あとがき





「閲覧注意」ロイコロリデイウム

湖浜微

ロイコクロリディウムはカタツムリに寄生する線虫の一種だ。その虫は寄生したカタツムリの神経・視覚を乗っ取り、芋虫のような動きでカタツムリを鳥に食べさせる。そして鳥の体内で卵を産み、その糞をカタツムリが食べることによって再び生命のサイクルを廻っていく。

そのロイコクロリディウムに似たものを、一部の私たちは持っているはずだ。

過去・劣等感・恥辱。

それらは私の胸の中で、蠢いている。

「今日のテスト難しかったね」

十分休憩のチャイムが鳴るや否や、千佳ちゃんが私の机へやってきて言った。

「うん、昨日徹夜で単語ゴリ暗記してなかったら赤点なってたかも」

「ねえねえ、大問三の英文読解できた？」後ろの席からなるひ奈留灯ちゃんも身を

乗り出して会話に入る。

「あー、あれやばかったよね。解けてる自信ないなー」

「うちもやばい。ムニムニうちらのこと信用しすぎでは？ 進学クラスだからって」

ムニムニとは私たちのクラスの英語を担当する高校教師のあだ名だ。

「晴菜はどうだった？ 全体的に」

奈留灯ちゃんから話を振られて、えーとね、と私は応じる。

「大問三以外は事前に範囲出されてたから対策できて、私的には上手くいったと思う。大問三は読む時間配分ミスってぎりぎり解けたかな？ って感じ」

「晴さん汽車の中でずっと英単語帳見てたからその辺は自信あったでしょ」

千佳ちゃんが口元をニヤニヤと和らげながら問う。

「めっちゃギリギリだったよー。千佳も知ってるでしょ？ 私が短期記憶苦

手なこと。てか暗記系全体的に弱いのに」

「うっそだー。二年の時の日本史、学年二位でポテチもらってたのに？」

「あれはちよつと得意分野だったからだよ。社会系はなんか暗記できる。政

経以外は」

「政経は先生が悪いよー。授業のやり方、プリント先生が読み上げるだけだもん」

奈留灯ちゃんが拗ねたように頬杖をつく。私は覚えている。奈留灯ちゃん  
は政経のテストはほぼ満点だったことを。あの授業形態でよくあんないい点  
とれたなと思う。

「次何だっけ？」千佳ちゃんが聞く。私は黒板の上に設置された時計を確認  
する。

「次確か千佳ちゃんたちは数学。私は科学となんちゃらのやつ」

「あー化学もどきのやつね。そっかー、青菜は数学ないのかー。いいなあー」  
千佳ちゃんが羨ましそうにこつちを見ってくる。その視線の意図は明白だ。

「そんな目したって数学代われませんかね。第一私数学めちゃくちや苦手  
だし、千佳ちゃんたちより下のクラスにいるんだから、代われたとしても解  
けるわけないよ」

「じょーだんだよっ。はあー頑張るかー。もうそろそろ時間だね、奈留灯ちゃ

ん行こー」

千佳ちゃんと奈留灯ちゃんは筆記用具といくつかプリントをもって別の教室へ移動した。私もテストの教室に向かわないと。

ちらりとレースカーテン、網戸越しの外を見る。この街を囲む山々を見下ろすように、水色の空が雲をちりばめてそこにいた。

『誰も私のことなんて見てやしない』

私は父のお下がりでもらったノートパソコンに打ち込む。書いている場所はブログだ。

『みーんな勉強のことばっか。進学クラスなのはわかってるけど休み時間くらいもう少し楽しい話しようよ。ほんとつままないクラスに入っちゃった(TAT)』

それにクラスの担任（ネットに書き込んだらやばめなのでTって呼ぶね）も全然生徒のこと見てない。成績だけで評価してる。私が進学して公務員になりたいなんて言ってることが本当は嘘ってことに気づきやしない』

『もし私が「死にますー」なんて言ったら先生とかクラスメイトとかどう思うんだろ。「ヤメテー」「命を粗末にしないでー」とかかなwうざww自殺なんて本人の自由意思で決めたことなのに、他人が口出せることじゃないし』  
『全員どっかこっかウザいとあるんだよね。ナルヒとかチカは私とよくつるんでくれてるけど、きつとどっかで私のこと見下してるよ。わかるもん。視線とか口調とか。私の方が勉強できるのに。あーウザい。あいつら一旦全員し』

「晴菜ー、ご飯よー」

母親の声にビクッと肩をすくませ、急いでパソコンを閉じた。心臓がバクバクする。スリープモードだからこの文章が消えることはない。夕食後にもう少し書いて投稿しよう。最後の一文は、止めよう。

私は収まりつつある心臓に手をやり、その心拍を抑えつけた。

ブログを書きだしたのは、自分の癖を治すためだった。

家に帰りベッドに寝そべると、私はいつも脳内反省会議を開く。

あの時、こう言ったら、あの時こう行動していれば、あの時こう振舞っていたら……。

内心の私は絶えることなく「もしこうだったら」の例を挙げ連ね、それが導き出す『最適解』の他人の反応を想像する。しかし所詮は想像・妄想の類。現実でそれらが行われることはないし、起こったこともほんの一握りだ。無駄だとはわかっている。

ある時私はこの癖を母に吐露したことがあった。当時は中学生で、語彙がまだまだ乏しかったけれども、自分の知っている言葉で一生懸命自分の内心を語った。

そんなことを考えてたんだ。と母はぽつんと言った。受け入れてくれたのだろうか？ 恐る恐る顔を上げて目についたのはどこか軽蔑を含んだ肉親の目だった。

「そんなことを考えるくらいならノートとかパソコンに書きだしてみればいいじゃない。あ、そうだ。お父さんの仕事で使ってたお古のパソコンあるからそれあげるわ」



母はそう言い、私に一つのノートパソコンをくれた。それだけだった。

初めて触るパソコンにしどろもどろしながらも、仕事帰りの父に日々少しずつ使い方を教えてもらい、ワープロソフトを使えるようになった。

その真つ白な画面に文字を打ち込むことを最初はためらった。私は白色が好きだ。小中学校の図画工作の時間、配られた白紙の画用紙を先生に急かされるまで何も描き込むことができなかったくらいに。

自分で汚すのが怖いのだ。自分の汚い字で、センスのない配色で、己の思想で。

白色のままであれば、可能性はいくらでも考えられて楽しい。あれを描いたらどうか、いや、これのほうが楽しそうだ、などと。

その現象が、パソコンを前にしたときに起こった。

滑らかでなんの混じりけもない白いページに、あまり主張しない罫線が何本も整列している。

この白紙の完成作品を眺めていたい。正直そう思った。

しかし、母に言われてもらったものなんだし、それを使わないでいると母

が知ったら悲しまれるのではないかと恐れも心の中に滲んだ。そして一番、「この癖を直さなきゃ、あの目で見られないように」という気持ちが強かった。

ええいままよと言葉を、キーボードに叩き込んだ。第一文に書かれた文字列は、

「こんな自分、いなくなればいいのに。」

だった。書いた後に後悔して消した。しばらく熟考した末、

「今日は天気が良くて千佳ちゃんたちとの登下校がなんだか楽しかった」と書いた。

幼稚な文章だ。我ながら思う。しかし、万が一肉親に見られても何も問題にはならない。さっきの文章と比べて。

私は「今日あった楽しかったこと」を書き連ねる日記を書くことにした。

「今日は英語の小テストがあった。事前に勉強していたおかげで十点中九点取れた。一つだけ問題を落としてしまったのがもったいない。次からは気を付けようと思う。」

「今日は奈留灯ちゃんが下校中に自転車ごと転んでしまった。大きい怪我がなくてよかった。絆創膏を備えていて損はないなとこの時思った。」

「待ちに待った定期テストの日。大丈夫、私はやれる。先生も褒めてくれていたし、きっと、いや、必ず高得点を取る。」

「テスト最終日。集中力が切れかけていたが何とか乗り切った。お母さんがお祝いに駅前のケーキ屋さんのモンブランを買ってきてくれていた。しかも夕食はしゃぶしゃぶ。めっちゃくちゃ嬉しい。」

それに、帰りに千佳ちゃん、奈留灯ちゃん、私の三人で打ち上げみたいな、自販機で買ったジュースで定期テスト終わりと、夏休みの始まりに乾杯して、帰りの車を待ちながら飲んだ。いつもより美味しく感じた。大変だったけど結果オーライな日になった！」

こんな感じで、日常で印象に残ったこと、楽しかったことをパソコンに記していき、やがて内容は日記というより日々の愚痴を吐く行為となり、いつしかそれが日常の一部となった。そして今ではブログに手を出している。見る人は少ないが、別に誰かに見せる目的で始めたんじゃない。ちよっと、興

味が湧いただけである。

初めてのブログ投稿では、思ったよりの閲覧数とコメントが来た。まあそれも二、三件のいいねとコメントではあったが、初めて私は「自分は誰かに見てもらっている」という安心感と嬉しさを得た。学校では得られない感覚にハマってしまった。

良いことを書くよりも、比較的愚痴やネガティブなことを綴ると閲覧数が増えた。みんな何かしらに苦しんでいて、私の気持ちに共感してくれているのだ。私の手は益々捗った。

『自分が嫌い。何も周りへ気遣いのできない自分が嫌い。努力してるけど治せないのが嫌だ。それとも努力が足りないのかな。わかんない。そして私のこの努力を誰も褒めてくれないのが嫌い。嫌いなことばっか。ダメ人間なのかな、私。』

なんでみんなできることがお前には出来ないんだ。簡単にやってのけてるのに、私は背一杯努力しないといけない。面倒くさく感じる。こんな自分を

日々同級生や教師に晒していると思うと恥ずかしい。消えてしまえって思う。これって変なこと？』

（変なことだよ。そこ治せっていうの）

心の中の自分が思う。いつもこうだ。考えていることと「内心の世間体」が喧嘩する。

こいつを消したくて、私は日々文字を綴る。

夏休みは、憂鬱だ。

規則正しく起きる必要がなくなってしまうて、毎日やらなければいけないことが少なくなってしまうて、私は暇を持て余してしまう。

そして残り或る時間は、空回りの日記と、ベッドの上での自己内省に充てられる。

ぐるぐるぐるぐる。ぐるぐるぐるぐる。

私が悪い？　ちゃんとできてた？　傷つけてない？　私は正しいことを出来ている？

過去の思い出を思い出して、拾い上げて、「どこかに人格の荒はないか」とまじまじ眺めつづける日々。さながら玉ねぎを調理するときのような、ポジティブな部分を引っぺがして、芯の方にある暗い感情に点数をつけていく。親のお盆に付き合うか、友だちに遊びに誘われるか以外で、私に外へ出る機会はない。

ベッドに張り付いたカタツムリのように、動きがゆつくりとしてしまう。しかし頭は絶えず回り思考する。他の誰かが脳みそを操作しているみたいに。（違うでしょ、あなた自身がそう考えているんだ。他人のせいにするな）

（もう止めよう、こんな自問自答。生産性がない）  
身体を起して少しの間ぼーっと天井を眺める。そしてしばらくして机のパソコンに向かう。

サイトを開き、新しい白紙のページを作る。白色をまた、私で汚していく。

「今日は」

タイプする手が止まる。今日は何したっけ。朝起きて、母さんに挨拶して歯を磨いて、顔を洗って朝食を食べた。そしてその後テレビを見て――その

テレビの内容、何だったっけ。

何かの番組が終わって、お昼を食べて私は自室に行って、ベッドに寝っ転がって午睡をしようとした。眠れずに、自問自答する羽目になったというわけだ。

今日の日記は見た番組でも書こうか。そうぼんやりと思惑していると、断片的に今日見た（あるいは昨日？ 一昨日？）テレビのワンシーンが頭に流れて来た。

『今日の十代の子供たちは、昔やこれまでに比べて段々と弱くなっています。表現がよくありませんでしたね。具体的には、体力面での低下、学習能力面での低下が見られます。これは昨今問題となっているスマホ依存の影響で――』

辛口コメンテーターは確かその後その根拠データを催促されていた気がする。六十代に差し掛かりそうな、私たちから見ても『ちよつと昔の人』。

昔の話を現代に持ってこないでほしい。時代にはそれぞれの教育方針みたいなのが更新されて最適化されていくんだから。そう聡明な奈留灯ちゃんな

ら言いそうだ。

「今日テレビで『現代っ子は昔より劣っている』って言われていた。本当にそうなのか？ 確かに昔より危機感や応用力とかには劣ってしまっているのかもしれない。でも現代の学生たちがそうだったのは時代背景が絡んでいて、それ抜きにしては私たちの今の生活習慣や楽しい事、乗り越えなきゃいけないことは生まれなかつたはずだ。弱いと言われている点については、学生の私たちが改善できる点には限りがあるし、先生や家族などの大人の協力が必要不可欠だと思った。」

やけにいつもとは毛色の違う文章ができた。これが正しいことを言っているのかはわからないけども、自分の意見が吐きだせた気分ですっきりした。

（どうせ間違ってるよ）せせら笑いが聞こえてきそうだ。

（間違ってもいい。本当に危なかったら、誰かがきつと正してくれる）

内心の私は少し黙った後嘆息を漏らした。

（変なところで他人任せだよ、お前。普段は『自分一人でもいい』って思っ



てるのに、都合のいい時だけ他人頼るとか、厚かましいよね)

その思念に至ったとき、心臓の鼓動が早まる。

(厚かましい？ 私が？ 普段の行いも厚かましかった？)

「厚かましい」自分の態度を記憶を手繰って探ると該当していそうなものはいくつも脳裏をよぎっていった。動悸がする。

(お前は厚かましい。もっと謙虚になれ。誰も必要なくなるくらいに。自分のことくらい自分でできるようにしろ)

自分のことってどこまでが自分のこと？身の回りの出来事？それとも他者に指摘されて褒められるくらい？ 程度がわからないよ。教えてよ。

(そんなくらい自分で考えろよ。もう成人に近いんだよ？ みんな成長してる。いつまで子供のままでいるの？)

うねうねと暗い感情が胸の中心で蠢いて動悸を引き起こす。くそ、こいつのせいで。私のせいで。いや、自業自得か。まともに振舞え自分。そうすればまともでいられるはずだ。

私たちは時代のそれぞれに存在する事象を信仰して生きていく。アイドルだったり、ゲームキャラクターだったり、動画配信者だったり、親だったり、友達、先輩だったり、夢だったり、憎しみだったり。

私は何だろう。これと言って挙げる趣味も没頭しているものもない。唯一言えるのは、早くこの胸に燃える命の灯が消えてくれればいいと常日頃願っていることくらいだ。

一つ望めば「もう一つ」。差し出す手は飽くなき欲を示す。

希望が欲しい。この単調で、どんどん狭くなるトンネルのような日々、大きな光が欲しい。

私は何を望んでいるんだろう？ 現実にはRPGのように主人公がたった一人いるわけでもなく、人々から羨望されるヒーローになれる人はごく少数だ。そんな世界に私は一体何を――

「おい晴さん？ 聞こえてるー？ 晴さん」

千佳ちゃんの声にハッとす。そしてファミレス店内のざわめきが一斉に

鼓膜へと戻ってきた。

「ぼーっとしてたけど大丈夫？　夏バテ？」千佳ちゃんがテーブルの向かいからじっとこっちを見てきて、私は萎縮しまいとその目を見つめ笑顔で返した。

「ごめんごめん、ちょっとソシャゲのこと考えちゃてた」

「えーゲーム？　晴菜珍しいね、ゲームするの。何やってるの？」

「えっと、前に奈留灯ちゃんが勧めてくれた音ゲー。結構中毒性あってハマっちゃってるんだ」

「ほんと！？　えー！　嬉しい！　ハマってたんだったら早くいつてよー。フレンド申請するのに」隣に座る奈留灯ちゃんはおやつをもらった犬のように目を輝かせる。尻尾があつたら千切れるほど振っていそうなくらいだ。

「ごめんごめん、後でメッセージで送るね」

「ねーねー、私置いてきぼりなんですけどー」

千佳ちゃんがむすっとした表情で見る。千佳ちゃんはゲームは苦手。代わりに映画やドラマが好きで、家族ぐるみで旅行に行く話をよくしてくれる。

「今日は3人で楽しむ日でしょ、二人だけ盛り上がっちゃってさ」

「千佳ごめんってばー。もう一つデザート頼んでいいよ、私おごるから」

「えマジ？やったー！ 奈留灯だーい好き！」さっきまでの不機嫌はどこへやら、千佳ちゃんはケロッと元気になった。

「それでさっきの続きなんだけど」

「さっきって？」私はよくわからず千佳ちゃんに聞いた。

「ほんとに話聞いてなかったの？しょうがないなあ晴さんは」

「ファミレスでご飯食べた後どこ行かって話だよ」奈留灯ちゃんが教えてくれる。

「あ、ああそうだった。ごめんごめん」

「それで二人は希望ある？あたしはショッピングモール行つて買い物したい！ 三人で秋服見たいんだー」

「私もショッピングモールでいいかな。あそこに可愛い雑貨屋さんあって、最近ゲームのコラボ商品入荷したらしくて」奈留灯ちゃんが言う。

「じゃ、晴さんは？ どこ行きたい？」

「わ、私は……」

正直どこでもいい。この時間もちよつと無駄に感じてしまう。

「私もショッピングモールがいいな」

「よしつ、じゃあそこで決まりだね！」

二人は意気揚々とどこをまわるか話し出す。その光景を俯瞰した様子で眺めながら、私はストローからジュースを啜った。

「ばいばーい」

「晴さんまたねー！ 後期に会おう」

二人が去っていくのを見送った後、私は詰めていた緊張をようやく解くことができた。

身体が重い。夏休み中、どこにも出かけなかったせいかな歩き回る体力が失われている気がした。

ぼーっと頭をもたげてアスファルトを見つめていると、またいつもの声がする。

（みんな楽しめてたかな？ お前だけ楽しんでなかった？）

（空気読めてない時あったよね。マジで何なのお前、小学生の頃から全然変わんない）（きつと二人とも呆れてるよ。悪口言ってるよ。言われて当然だけどな！）

（キモい、ウザい、イラつく。最悪の三コンビじゃん）

私は家に向かってダツと駆け出した。頭の中の声を置いていくように。

見るな、誰も私を見るな、私は何もしてない、私は悪くない！！

体力が尽きて膝に手をついたとき、家の塀から茂った植物の葉が目についた。具体的には、その葉に乗るグネグネと動くそれに。

カタツムリ、である。だが様子がおかしい。触角の部分が緑色で赤っぽい縞があつて通常よりはるかに肥大していた。そして一番気持ち悪いと思つたのが、その蠕動するような動き方だ。カタツムリは角をつつかない限りは動きが遅いと思つていたのだが、その緑の物体は早い動きで伸縮を繰り返していた。

気持ち悪いと思つているのに、私はその動きとフォルムに目が釘付けに

なった。私は比較的怖いもの見たさな傾向がある。だからその様子のおかしいカタツムリにも、過度な嫌悪感を抱かず、むしろ好奇心に駆られた。

スマホで写真を撮り、画像検索する。名前はすぐに出てきた。『ロイコクロリディウム』。寄生虫らしい。

これはカタツムリ側には意識はあるのだろうか。痛みは？違和感は？いやそもそもカタツムリに自我があるのかどうか。私は自身で動かしingとは思えないその緑色に肥大化した触角を眺めて思った。

><<閲覧注意！鍵垢JKの赤裸々ブログの内容暴露!!「閲覧は自己責任で」>>

風吹けば名無し…さん

>1 20XX/9/18 ID:dhshfhefkewn

リンク <http://h.a.r.u.n.a@vullog.jp>.

>2 20XX/9/18 ID:vnffkdhrrhjp  
わお。痛いってwwwwww

>3 20XX/9/18 ID:muaaihwnqol  
学校のことめちゃくちや愚痴ってんじやん。これ特定出来るくね？てかそこの病み垢と同じやん

>4 20XX/9/18 ID:mznbcbsuywri  
http://mitakami.hightschool.jp

>420XX/9/18 ID:mxnzbcnvksl  
>5 ktkr 教師の名前一致やな。確定

>6 20XX/9/18 ID:kuyftfwzrfv  
あーあ、青春ライフ終わりやね☆かわいそーに。この年頃は承認欲求お化け

湖浜微



だから仕方ない。。。とは言えねえよなあああああ w w w w w

<7 20XX/9/18 ID:poiukhdkjs

なんか興奮してゐるニキおる

<6 20XX/9/18 ID:aaddwerdchvg

<8 ポリスメンこの人です

私は放心した状態でその画面を見た。ブログと連携していたSNSのアカウトを見てみると、通知が普段の十倍くらいの量に膨れ上がっていた。

沢山の好奇心が私を見て、私の中身を啄もうと躍起になっているように思えた。つくづくいやらしい。いや、一番いやらしかったのは自分か。「誰にも見られなくてもいい」と思いながら「誰かに見つけてほしい。この気持ち

わかってほしい」と矛盾した思いを持っていた自分が一番。

彼等に咀嚼された私の承認欲求は、果たして彼らの腹の中で生きるのだろうか。いや、きっと一過性の娯楽に過ぎなくなるんだろう。それでいい。それでいいんだ。

（ようやく自分と折り合いをつけるんだね）

うん、そうするよ。もう疲れたしね。

（じゃあ、ばいばい）

ばいばい。

404 Not found このブログは削除されました

あとがき

二重人格とまではいかなくても、私たちが日々葛藤することからを寄生虫（ロイコクロリディウム）という虫に例えて書いてみました。「閲覧注意」という言葉をつけたのは、YouTube などにある閲覧注意の表示書きのある動画のように、忌み嫌われる内心（愚痴や悪口）をコンテンツのように見るものを揶揄できるように書こうと思いました。うまく書けているかは少し不安ですが少しでも楽しんでいただけますと幸いです。

あとがき



プログラム・ブレイブ

菱川立花

♪

はじまり

「ああ、ついにこの日がやってきた。待ちわびておりました。勇者の誕生を。  
この世界は魔王たちの手中に収められようとしています。どうかお助けください」

青年は不思議な夢を見た。誰かが自分に語りかけてくる夢。どんな内容の夢かは覚えていなかったが、いつか自分が世界を救う、そんな夢だった気がした。

はじまりの村

とある小さな村に魔王軍が押し寄せてきた。村の人々は抵抗する術もなく、魔王軍に服従するしかなかった。そんな時、通りすがりの一人の勇敢な青年が剣を振るい、魔王軍の討伐に成功したのであった。

「あなたはこの村を窮地から救ってくれた勇者です。ああ、本当に助かりま

した。そうだ、村の言い伝えにある勇者の剣を引き抜いてみてはくれませんか」

「村長！ あの剣は2000年もの間誰にも引き抜くことができなかった剣です。また引き抜くことができなかったらこの青年は自信を失ってしまうかと」

「いいや、彼は本物の勇者だ。わしにはわかる。さあさあ、一緒に来てください」

「青年、仮に勇者の剣を引き抜くことができなくとも、我々にとっては村を救ってくれた勇者に変わりありません。どうか村長の我儘をお許しください」  
その後青年は村の人々に連れられ、祠に到着した。青年が一呼吸おいて勇者の剣に手を伸ばす。青年は勇者の剣を引き抜くことに成功した。

「おお！ やはりわしの目に狂いはなかった！ ああ、なんとめでたいことか。勇者様の誕生だ」

「ああ、ついにこの日がやってきた。待ちわびておりました。勇者の誕生を。この世界は魔王たちの手中に収められようとしています。どうかお助けくだ



さい」

青年は人々に勇者と讃えられ、他にも魔王軍に困っている町を救ってほしいと懇願された。勇者はその夜宴を楽しんだ。翌朝、村の鍛冶職人が勇者の剣を研ぎ終え、勇者は剣を受け取った。勇者は皆に見送られ、次の町へと向かうのであった。

# 冒険者が集う酒場

次に向かった先の町は賑やかで、酒場にはパーティーを組むために冒険者たちが集まっていた。この町に来るまでの道中では強い魔物に遭遇することはなかったが、この先本格的に魔王軍と魔王を討伐するとなれば一緒に闘う仲間が必要である。勇者は冒険者の中でもひと際目立つ魔法使いに魅かれた。青い髪に青い瞳。彼女はとても美しい容貌をしている。

「こんばんは。君は魔法使いかな？ 君も魔王軍を討伐するためにここへ？」  
「こんばんは。ええと、そんなところですよ。でも一人で冒険するのが怖くなっちゃって、だから、その、一緒に旅をしてくれる仲間を探しているんで

す」

「そうだったんだね。君の魔法使いレベルを聞いてもいい？」

「まだ見習い魔法使いですので、レベルは25です。あ、こんなに低かったらすぐに死んじやいますよね」

見習いとは言っても魔法使いの彼女からあふれ出る魔力量は熟練の魔法使いにも匹敵する、と勇者は感じた。

「君の魔力量は見習いのレベルよりもはるかに多いものだ。魔法使いとしての素質があるんだろうね。僕もまだ勇者のレベルは26だ。小さな村に派遣された弱小魔王軍を討伐したことしかない。君さえよければ共に魔王軍を討伐する旅に出よう」

「そんなあ。とんでもないです。あ、そうだ、あなたは恐らくですけど勇者様ですよ？　だってその剣は古代勇者の剣の証が刻まれているものですか」

話の途中で僧侶の冒険者が二人に話しかけてきた。

「話の途中にすみません。私はレベル30の僧侶です。私をあなた達の旅にお

供させてくれませんか。おや、魔法使いさん。あなたからはそのレベルには見合わない魔力量を感じます。まあ私も魔力量は負けていませんし回復魔法にはかなりの自信がありますが」

僧侶は金色の短髪で眼鏡をかけており、瞳の色は緑色。おまけに長身であり文字通り僧侶の役職が似合う真面目そうな風貌をしている。……僧侶に金色の髪の毛は似つかわしくないが。

「いいね！ とんとん拍子に話が進みすぎていて逆に心配だよ。もっと仲間集めは大変かと思っていたからね。これであと一人探せば安心して旅に出られるよ。戦士がいてくれたら心強いね」

「え、待ってくださいよう！ 私そんな強くないです！ 私は魔力量だけは25レベルでも400ありますがそれだけですから」

「400ですか、この先が楽しみです。勇者殿のレベルはざっと見積もって50くらいですか？」

「あれ、僕、勇者って言ったかな？ レベルは26だよ。そんなに強く見えるなんて嬉しいな」

「勇者の剣を持っていらっしやいますのですぐにわかります。あなたは目置かれる存在ですよ。皆がこちらの様子を伺っています。それにしても26レベルでここまでの覇気があるんですね。是非私を連れて行ってください」

「みんな勇者の剣だつてわかるんだね。すごいな」

勇者はこの世界に一人しか存在しない。勇者だけがこの世界を蝕む悪を一掃できると信じられていた。勇者のパーティーに参加することは光栄なことだ。2000年もの間勇者は現れなかったのだから。

「勇者様が私なんかとパーティー組んでくれるなんて嬉しい！」

魔法使いは無邪気な子どものようにはしゃいでみせた。その様子を見て僧侶は若干引いていた。

「……これから共に旅ができると思うとワクワクします。よろしくお願いいたします」

「もうこの酒場にはパーティーを組みたい冒険者がいないからここを離れるけど、もう一人パーティーに欲しいよね。まあこのメンバーではそこの町

までの道中困ることはなさそうだし、ひとまず3人で行動しようか。次の町にも酒場があるからそこでもう一人探そう」

勇者たちは宿屋で一泊して物資を蓄えてから次の町へ向かった。

### 盟友との出会い

次の町に着いた時には、魔王軍はすでに討伐されていた。この町にはどうやら腕の立つ者がいるようだ。

「おや、もうすでに討伐されていましたか。どおりで途中に魔物がいなかったわけです」

「うう、経験値が欲しかった……」

「魔物を一掃するほどの力を持ったパーティーが存在するのでしょうか。でもとりあえずいろいろ話しかけましょうよ！」

「そうだね、ついでに情報共有出来たらいいね。早速探してみよう」

勇者たちは町の人に声をかけて他の冒険者の情報を探った。どうやらこの町を救ったのは盟友だという。盟友というのは勇者のバディのことであり、

勇者が現れるとき、盟友もまた現れるとされている。

「盟友がこの町にいるとは。うまくいきすぎている気がします。大丈夫ですかね」

「こうなる運命なんだ。遅かれ早かれね。あの家に住んでいると聞いたから早速訪ねてみよう」

勇者たちは早速盟友が住む家を訪ねた。

「こんにちは。僕は勇者。この二人はパーティーを組んでいる魔法使いと僧侶で……」

「おお勇者か！　よくきた！　俺は盟友だ！」

「はや」

僧侶は盟友を見て若干引いている。

彼は盟友にふさわしい恵まれた体格であり、茶髪に茶色の瞳をしている。

「僕は魔王を討伐するために旅をしていてね、パーティーにあと一人強い冒険者を迎えたいと思うていたんだ。盟友に会えるとは思っていなかったけど、この出会いはきつと魔王を倒す兆しなんだ……」

勇者の話を遮り、盟友は興奮気味で話し始めた。

「勇者ってのは赤い目ン玉してるんだな。髪は俺とおんなじ茶色！俺はな、いつか現れる勇者をずっと待っていたんだ。この日のためにたくさん修行をした。まあ、これからよろしくな！」

盟友は勇者の手を力強く握った。勇者はあまりにも力強く手を握られたので思わず顔をしかめた。

「こんなにも早く話が進んでいいのでしょうか。シナリオ通りとか、なんといいか」

「僧侶様ったら！冒険はサクサク進んだ方がいいじゃないですか！盟友様に出会えたことですし、これから本格的な旅になるのですよ。もっと楽しそうにしたらいいのに」

「シナリオ通りに魔王を倒してこの世界に平和をもたらそう！その後は洞窟探検でレアなお宝をジャンジャン集めるんだ！」

「盟友がパーティーに加わったことだしこの先はどんな険しい道になりながらも安心だね。ちなみにレベルはどのくらい？」

「俺は50レベルだ。そこそこだろ？」

「とても強いそうだからこの先は盟友殿に魔物を全部倒してもらいましょう」  
「ははっ、そうしてもらいたいくらいだね。でもね、誰か一人だけ突出していてもだめなんだよ、パーティーは。僕たちも盟友に追いつけるくらいに鍛錬しようね」

「せっかくパーティーが完成したんだ、今日明日くらいこの町でゆつくりしようぜ。俺が行きつけの店に連れて行ってやるよ！」

「わーい！ 何を買ってもらおうかなあ」

「無駄遣いはできませんよ。この先で何かとお金は入り用になりますし」

「うーん、防具の新調は欠かせないから、まずは防具屋に連れて行ってもらおうか」

「冒険を進めてたどり着いた町には良質な武器と防具が揃っていますよね」  
「魔王城に近い町になっていくほど先が大変だからいいものが手に入るのではないですか？ ねえ、盟友様？」

「ん？ まあそうかもな。あ、そうだ、俺の家を宿にしていーぞ！ 両親は



物心ついた時にはもういなかったから今は一人でこの家に住んでいるんだ。好きに使ってくれ！ 今夜は宴を開こうか？」

「急に重い話をしないでください。反応に困りますよ」

「ありがたい。これからの旅について話がしたいから助かるよ」

「僧侶よ、気にするな！」

「別に何も気にしていませんが」

勇者一行はすっかり打ち解けた様子であつた。盟友が育ったこの町で物資を補給したり宴を楽しんだりとあつという間に時間は過ぎていった。

### 勇者一行の旅

各方面で悪さをする魔王軍を討伐するため、勇者一行の旅がようやく始まった。勇者一行は次の町へと向かつていた。

「ねえ勇者さま、そろそろ休憩にしましょうよ。足が痛いわ。もう歩けな——い」

「あと少しで次の目的地の城下町に到着だ。近くに宿屋もないしこのまま向

かうよ」

「足が痛いなら空を飛べばいいじゃないですか。魔法使って大体空を飛ぶものでしょう」

「僧侶様は本当に意地悪ですね！ 空なんか飛べるわけじゃないでしょ」

「残念な魔法使いですね」

「酷いです！ もうこの僧侶やだ！」

「足が痛いなら俺がおんぶしてやるよ！ さあこい！」

「嫌！ 絶対に嫌です！ 体中の骨を折られたら困ります」

「そのために僧侶がいるだろう！」

僧侶は聞こえないふりをした。

「ふふ、にぎやかだね。大変かもしれないが、もうひと踏ん張りだ。進むよ」

「ふええ。疲れたあ」

「空飛べないんだからおぶってもらえばよかったじゃん」

「うっさい僧侶！ あんたもう黙ってろ！」

「まあまあ黙ってましたよ」

道中にはとてつもなく強い魔物がいた。魔王城が近づいている証拠でもある。魔王城の近くには魔王直属の魔物が猛威を振るっているが、盟友がパーティーに加わったことによって強い魔物も時間をかけずに倒すことができた。

「結構強い相手でしたね」

「眠らせる魔法ずるくない？　俺は魔法に耐性がないから何度眠ってしまったことか。」

「眠る度に僧侶様がボカスカ頭を殴っていて面白かったです！」

「お前僧侶なんだから眠りを解く術を使ってくれよな。マジで頼む。頭痛いもん」

「あの程度の魔物が使う魔法ですよ。術なんて使わずとも殴れば目を覚まします。しょうもないことで魔力を消費したくありません」

「お前本当に僧侶なの？　俺は僧侶という存在についてとんでもない思い違いをしていたのだろうか」

皆があまりにも騒ぐので勇者は苦笑いして聞いていた。

「異常状態にならないようにするアイテムを購入しようか。次の町はそこそこ大きな城下町だ。欲しいアイテムを購入しようね」

「魔物を倒してお金も増えたことですし、色々買っちゃいましょう！」

「武器や衣類を新調したいですね。というか、なぜ強い魔物って大体橋のど真ん中に鎮座しているのでしょうか。絶対にエンカウントするようになっていて迷惑です」

「あー、確かにそうですね。試練ってことじゃないですか？」

城下町にて

勇者一行はようやく次の目的地である城下町に到着した。町はたくさんの人で溢れかえっている。

「はあ、やっとなつた。死ぬかと思った」

「歩いたくらいで死にませんよ。安心してください」

「それにしてもこの町は兵士が少ないな。城下町なのに大丈夫か？」

「そうだね、いろいろ気になるし町の人に話を聞いてみようか」

勇者一行は町人に話しかけて様々な情報を入手した。ある町人と話していると、勇者一行とわかるや否や城に案内された。

「ああ、勇者様ご一行ですか！　ようやくいらしたのですね。待ちわびておりましたよ。さあさあ、城へ案内しますからついてきてください」

「あーあ、むやみやたらに話しかけるから……この前だって話しかけたら魔物でしたってことがあったばかりですよ」

皆はこうした僧侶らしからぬ発言にも慣れてきた。

「城主に謁見する機会はどうそうないよ。話を聞いた後で武器とか防具を買いに行こう」

「緊急事態かもしれないしな！　そう焦るなよ僧侶」

「私も新しいものを買いたかったな……いえ、先に城主の話を聞きましょうね！」

勇者一行は町人に案内され応接間に着いた。王が玉座に腰を掛けている一方で後の姿は見えない。

「よくきた勇者殿。最近になって魔王軍が城下町近辺を暴れはじめて手に負

えないのだ。妻が病に倒れてしまったのだが、病に効く薬草が生えている高原はとにかく魔物が多くて倒しても倒しても湧き出てくる。これが油田ならどれほどよかったか。……まあ、我々だけで行くのは難しくてね。直近で魔王軍との戦いがあったのだが、そこで多くの兵士が負傷してしまった。……私たちではもはや魔王軍を倒すことができないのだ。そこで君たちに薬草を取ってきてもらいたい。そして魔王軍も倒してもらいたいのだ。できるな？」

勇者一行は依頼を受けることになった。

「いつも一方的ですよね」

「回り道が多くて疲れるな。魔王をサクッと倒せたらいいのだが」

「私も一回休憩したいです。あ、武器とか見に行きましょう！」

「そうだね、ここに来るまでも大変だったから一日様子をみてもいいかな」

勇者一行は町で物資を蓄え、一日宿で休んだ後、薬草を採取しに向かった。

「この高原には手強い魔物が多く潜んでいるね、ちよいどいい鍛錬になる」

「魔物を倒すとお金がどこからともなく降ってきますしね」

「薬草取ってここら辺の魔物を狩りつくしたらいいんだろ？」

「そんな簡単に言わないでください……もう私結構魔力消費しました……」

「魔物が多いからね。この聖水で魔力を回復したらいい」

「おお！ 安物じゃないからぐんぐん効いてきました！ よーし、このまま皆殺しよ！」

「勇者殿、私にも聖水を使ってください。このままではみなさんの体力を回復できなくなります」

「魔力組はこまめに聖水を使わないと息切れするもんな。マジ感謝してるぜ二人とも」

勇者一行は薬草の採取に成功し、城下町周辺の魔物を狩りつくした。薬草をもって王に報告へ行く。

「実に素晴らしい！ 君たちは本物の勇者一行だ。妻も容態が回復しつつある。本当にありがとう」

「これからの道は険しいだろうが勇者一行なら切り開けるだろう。さあ、いくがよい」

「これからの道は険しいだろうが勇者一行なら切り開けるだろう。さあ、いくがよい」

「？」

「これからの道は険しいだろうが勇者一行なら切り開けるだろう。さあ、いくがよい」

「同じことしか言わないね。どうしたものか」

「よくわかりませんがもうここに用はないのですから次の町へ進みましょう」  
「それもそうだけども、何かがおかしいような」

「町の人たちも様子がおかしいわ。みんな同じ言葉を繰り返してる」

「うーん。魔王の仕業かな？ 早く支度を整えて魔王城へ出発しよう」

その日は宿屋でゆつくりと眠りについた。翌朝、勇者一行は魔王軍が暴れまわる地へと向かうのであった。

### 最終決戦

魔王城はもう目の前。ここに魔王がいると思うと勇者たちは少し足がすく



んだ。しかし魔王城は禍々しさがなくただの城下町にしか見えないのである。いったいどういうことなのか。

「ここが魔王城？　なんか禍々しさが無いというか、むしろ綺麗すぎて怖いです。僧侶様先行ってください」

「私が死んだらこのパーティーは壊滅しますよ。まあ、まやかしかもしれません。油断せずに進みましょう」

「俺が先頭いくぜ！　この雰囲気、俺たちを油断させる算段か。そう簡単にはだまされないからな！」

「本当にここなのかな？　慎重に進んでみるとしよう」

勇者一行は恐る恐る魔王城に足を踏み入れる。魔王城の中もおどろおどろしいどころか、明るくこちらを歓迎しているかのようで薄気味悪い。入ってすぐの大広間には誰かいるようだ。

「ついにここまで来たか勇者よ。貴様らの冒険はここで終焉を迎える」  
（えっ！　なになに！　こんにちは！　ボクは魔王だよ！　ずっとここから出られなくて困っていたの！　もしかして助けにくれたのかな？　暇す

ぎて掃除頑張っちゃった！ えへへ）

勇者一行は早速魔王に気づかれた。動揺を隠せない。

「貴様が魔王か……」

「ああ、そうだ。貴様ら全員皆殺しにしてくれるわ！」（うん！ ボクの名前は魔王だよ！ キミたちは？）

「僕たちは勇者一行だ。ここで決着をつける！」

「やれるものならやってみろ。貴様らの冒険は無駄だったということに気づかせてやる」（ふうん、勇者か。あ、キミたちは自由に話せるんだね！ ボク今まで近くの子に話しかけても反応がないか同じことしか喋らないから退屈だったんだ。だから今すごく嬉しい！）

魔王は突然勇者一行を魔王城の最下層へと突き落とした。そこに待っていたのは魔王の配下たちだ。配下たちは容赦なく襲い掛かってくる。

「くっそ！ こいつら全員倒さねえといけないのかよ！」

「こんな雑魚すぐに倒せますよね」

「ここはひとまず僕に任せて」

勇者の剣は魔物たちの体を引き裂く。魔物たちは苦しそうに消えてゆく。

広範囲に攻撃ができる魔法使いは腕の見せ所である。

「ふん！ 私の魔法にかかればこんな魔物なんて瞬殺ですよ！ おや、この階にいる敵をすべて倒したら上の階にいけるみたいです。ほら、上の階に続く階段が出てきましたよ！」

「不思議ですね。まどろっこしい。魔王が最初から私たちを殺せばいいのに」  
「魔王も内心焦っているんだ。配下が僕たちを倒せたら無駄な労力をかけずに済むしね。さあ、どんどん進んでいこう」

階層が上がる度に勇者一行のレベルも上がっていく。ここでの戦いは今までとは比にならないくらいに自己を成長させる。魔王の元へたどり着くころにはかなり仕上がっているだろう。

勇者一行はついに最高幹部を名乗る魔物と遭遇した。苦戦を強いられて皆、限界を迎えようとしていた。

「上層に行くほど敵は強くなるけど、こちらから攻撃を仕掛けない限り猶予があるみたいだな」

「隙を与えず攻撃してきたら私たちは全滅するというのに」

「……さあ、ラストスパートだ。ここで体力と魔力を回復して挑むよ」

「私頑張ります！ 単体でも火力だせるので！」

勇者一行はついに魔王の配下である魔物を全て倒した。全員レベルが70を超えていた。いよいよ魔王との最終決戦が始まる。

「貴様の配下は全て倒した。残るはお前だけだ、魔王！」

「私の配下は本当に使えない。嘆かわしいこと極まらない。仕方ない、我が直接この手で貴様らを地獄へ送ろう」（やつと会えたね！ どこに行つたの？ 心配したよ）

勇者一行は覚悟を決め、魔王に向かっていった。攻撃はかすりもしない。

「カスめ。そんな攻撃で我を倒せると思つていいのか？」（何をするの!! ねえ、なんで戦いを始めるの?）

「ふふ、魔法なら逃げられないわよ！ 私の業火に焼かれて死んでください！」

「私は後方から回復をサポートします。皆さん目の前の敵だけに集中してく

ださい」

「はは、最初の攻撃なんてジャブだよ、俺の斬撃は重いだろう！ 苦しめ苦しめ！」

「魔王、容赦はしないよ」

「クッ、このくらい大したことは無い。どうせすぐに体力も魔力も尽きて皆死ぬだろう」(ボクは誰も殺していないよ。ずっとここに閉じ込められていて……)

勇者一行は休む暇なく攻撃をしかける。呼応するように魔王も反撃してくる。

「クソっ、まともにくらった……」

盟友は気絶してしまった。

「せめて一撃でやられないようにしてくださいよ。復活させるにも時間がかかりますから。……アレくらって死なないのも不思議ですね」

「ああああ！ お、助かった！ 僧侶ありがとう！」

「私、魔法を跳ね返すバリア張ってます！ 攻撃にだけ気を付けましょう！」

「このまま攻撃を続けるぞ！ 魔王だって限界はある！」

魔王は攻撃を繰り返すも勇者一行の攻撃に押されてしまう。

「こうなったら奥の手を使うとするか。貴様らと違って我はさらに強くなれるのだ」（どうして伝わらないんだろう）

魔王は覚醒して更なる威力を見せる。しかし、勇者一行も必殺技を繰り広げる。魔王は覚醒しても戦況はむしろ悪化するばかりであった。

「窮地に立ったとき、魔王だけが強くなれると思うなよっ！ 僕たちはチムだ。お前は孤独だ！ これで終わりにしよう！」

勇者一行は力を合わせてどんな斬撃よりも重たい渾身の一撃を繰り出した。

「あああああ！ なぜ我が負けるのだ！ こんな弱い人間どもにしてやられた！ 許さん、許さんぞ！」（結局誰にもボクの声は届かないんだな。ああ、死ぬんだ。やっと解放される……ありがとう）

魔王は息絶える直前、その言葉とは裏腹に微笑んでいるかのように見えた。

「ついにやったか……」

「やりました！ うわあああ、勝てましたああ！」

「良かった。誰一人として欠けずによくここまで頑張った！ みんなありがとう……」

「お疲れ様でした」

「残りの薬草と聖水を使って今まで立ち寄った町へ報告しに行こう」

こうして魔王は勇者一行によって倒された。世界は再び平和が訪れ、勇者一行は宴を楽しんだ。楽しかったこと、辛かったこと、僧侶の爆弾発言、思い出を振り返りながら次へのステップを踏みだす準備をした。

エンドコンテンツ

その後は洞窟に潜ってレアなアイテムを収集したり、町の人の困りごとを解決したり、技に磨きをかけたりとゆったりした時間が過ぎていく。

「勇者さま、私この宝の地図に眠る黄金の指輪が欲しい！」

「この洞窟は地下15階まで続くのか。物資を蓄えて潜るとしよう」

「勇者殿は魔法使いに甘すぎます。この前だって強欲な魔法使いが欲しかった七色のペンダントを取りに行きました。疲れしました。私が地下潜るメリッ

トありますか？」

「はははは！ 言うようになったな僧侶！ 宝箱には何が眠っているかわからないものが多いから、もしかしたらヒスイの杖が手に入るかもしれないぞ？」

「それ前も言っていました……結局ありませんでしたよね!!」

「君がここまで感情的になるなんてかわいいもんだな。よし、ヒスイの杖も探しに行こう、これからはみんなの欲しいアイテムを全部手に入れよう！」  
アイテム収集には多くの時間を費やした。洞窟には太古の魔物が潜んでいて冒険のしがいがあった。魔王討伐の時に戻れたような気がした。レベルも最高まで上がり、無敵になったように誇らしい。

……次第にやることもなくなった。魔王討伐という大義名分がなくなっただけからはこの退屈さを他で凌いでいたからである。ここで本当に勇者一行の旅が終わりを迎えることになった。



おわり

冒険の書を削除しますか？

はい

一度消去したセーブデータは元に戻りません。それでも本当に消去しますか？

はい

はい

ただいまセーブデータを消去中です……電源を切らずにしばらくお待ちください……

さい……

完了しました。タイトル画面に戻ります。

「あれ……なんでですかあ」

「そうか、遂に終わりを迎えるんだな」

「いつかこんな日が来るとは薄々わかっていたけど、いざ直面すると怖いね」

「すぐにそんな感情もなくなりますよ。私たちはシナリオ通りにしか動けま

せん」

「たとえシナリオ通りにしか動けないとわかっていても、俺らはわかり合えたんだ。全部操作されていたわけじゃない。俺らの旅は無駄ではなかった。違うか？」

「本当に残酷だと思います。それでも充実した日々を過ごしたことは確かですし、無駄ではなかったと言いたいですね」

勇者一行はこの世界がゲームの中であるということに気づいていた。話しかけても同じことしか言わない人、話しかけようとしても淡々と物語のように進んでいくこと、話す暇がない時、都合よく話が進むこと、違和感しかなかった。それでも自分たちには意思があり、この四人とは意思疎通もできた。なんて残酷なのだろうと思うこともあった。自由な旅とはほど遠くとも冒険は楽しかった。

「思い返せば楽しいことばかりだ。素敵な冒険ができたのは君たちのおかげだ。本当にありがとう」

「いやです……私、もっとみんなと一緒に旅したかったです……まだ手に入っていないものだったであつたし」

「そのアイテムすらも私たちの意思で手に入れようとはしていなかったのですよ。もう十分です」

「もったもただな。まあでも、楽しかったよ。また会えたらその時はよろしくな」

「私たちの存在が消えても、今まで冒険したことは忘れません。私が覚えていますから安心してください。さようなら」

「僧侶様、私、僧侶様のことも忘れませんから！」

「真っ先に忘れてそうですけど」

「俺は忘れない……気がする」

「どうかな」

「最後まで騒がしい人たちだ。名残惜しいけど、これで本当にさよならだ。みんなありがとう」

真っ白な光に包まれ、冒険の書は消えた。だが、新しいタイトル画面の向こうで、微かに彼らの笑い声が響いた気がした。

♪

新しく冒険をはじめ  
はじめから

冒険の書を作成します。電源を切らずにしばらくお待ちください。完了しま  
した。

ゲームを開始します。

おわり

あとがき

私は高頻度で悪夢を見ます。小学生の時に怖いもの見たさでやったゲームがよく悪夢として登場するのです。今回書いた物語は小学校2年生の時にやっていたドラクエ9のデータを消してまた新しく冒険を始めたことを元に書いてみました。ドラクエ自体にトラウマとなる要素は少ないのですが、データを消すときの嫌な音楽が耳にこびりついていて、悪夢のお供BGMとしてよく流れるのです。ついこの間、夢の中で魔物を倒していて実はゲームでした！残念！という実に夢らしい夢を見ました。ゲームの登場人物に実は意思や意識があったら面白そう♪なんて気持ちで書いてみましたが、書き終えた後、ここから私たちを出してよ！と登場人物たちが凄い形相で迫ってくる夢を見ました。夢で良かった。

結局何が言いたいのかというところ、物語を書くにあたって、自分の経験談をベースに妄想を膨らませて書くのが精いっぱいだったということです。作家は凄いですね……

あとがき



私の幸せだとしても

小鳩



「幸せって、コスパいいなあ」

スーパーで購入した70円の幸せを口いっぱい頬張りながら、夜に塗りつぶされていく空に向かって呟く。

今年の春から高校生となった私は今、同じく今年から解禁されたバイト先からの帰路に就いている。スーパーはバイト先と自宅との中間に位置しており、バイト終わりは必ずここに寄り道してから帰宅すると決めている。入店から最短距離で、いつものルートで一直線に向かった私は、スイーツコーナーで立ち止まり、ノールックで商品を手に取る。その目的はいつも70円で売られているシュークリームやエクレアであり、それらを食べ歩きながら帰宅するというのが、高校生の私のマイブームなのだ。吹奏楽部を高校でも続けているため、バイトは部活のない週1回程度しか出来ていないが、体型維持のためにはむしろ都合がいい。思う存分、この甘い幸せをリスのように頬いっぱい詰め込むことが出来る。幸せで満たされた口の中を、今度は75円の幸せで洗い流す。勢いよく流し込まれた若草色の液体と共に幸せは全身に巡り、体中のネジを解して周る。これがチルイというものか。合計約150円で得られ

るこの幸福感の素晴らしさに胸を打たれる。

幸せとは、改めてコスパがいい。

「ただいまー」

「杏奈おかえり。危ないことなかった？」

「何もないよ、心配し過ぎー」

「暗くなってきたら気をつけて帰ってきなさいよ」

「んー」

いつものセリフをいつものセリフで返し、手洗いうがいを済ませる。お母さんは昔から帰るのが少しでも遅くなる度に何もなかったか聞いてくる。心配っていうのはわかるけども、私だってもう高校生だ。

「兄ちゃんただいま」

「ん」

リビングのソファで寝転がっている兄にも一応声を掛けるが、毎回返事がそつけない。私は感情豊かなタイプだと思うが、兄は基本的に無感情で全然

似ていない。この家の子どもは、私とこの2歳年上の兄だけ。

「別にテレビ見てないでしょ。チャンネル変えるよー」

あまり興味のない報道系の番組が垂れ流しになっていたため、チャンネルを変えようとリモコンの照準を合わせたとき、ニュース速報が流れた。最近テレビによく出ていた若手の女優さんが自宅マンションで、意識不明で倒れているのが発見されたという内容だった。前の朝ドラで一氣に有名になったんだっけ。お母さんがいつも観ていた気がする。

「おかーさん。前の朝ドラに出てたあの人、倒れてたってー」

「えー？ 嘘！ 昨日もバラエティに出てたわよ。自宅であつて、自殺かしら」  
まだ自宅に1人で倒れていたというだけで、原因が何なのかは定かではないが、このような報道があると、私もまず真っ先に自殺という2文字が脳裏に浮かぶ。小さい頃と比べて、芸能人のこういうニュースが多くなった気がする。

「どうして1回しかない自分の人生を自分で終わらせちゃう人がいるんだろう。しかもこんなに成功してて顔も可愛い女優さんだよ？ 私がこの人なら

生きているだけで幸せって感じだなあ」

「幸せの感じ方なんて人それぞれ違えんだよ」

私の少し大きな独り言に対して、兄が珍しく反応した。いつもは無視しかないのに。しかも、どこか不快感をこちらにぶつけるような言い方だった。兄ちゃん、あの女優さんのこと好きだったっけ？

「前の朝ドラに出てた女優さん、亡くなったんだってねー」

「ね、信じられない！ あんなに可愛いのに」

「だよねー！ 私もそう思ってたんだけどさー、兄ちゃんに感じ方は人それぞれだーとか言われちゃった」

「お兄さん大人だねえ」

小学校からの親友である玲奈といつものように一緒に登校しながら、昨日の出来事と軽い愚痴をぶつけ合う。私たちはお互いを慰め合って毎日を生きている。

「玲奈今日部活あるー？」

「うん。休みは明後日かなあ」

「んー、残念。せっかくの完全オフなのにー」

「完全オフって、これから学校じゃん……」

今日は部活が休みな上に、バイトも入っていない特別な日だ。休みが噛み合うのならば、久しぶりに2人で遊びたいと考えていたが、この子もバドミントン部の練習があるから仕方がない。

「じゃあ今日は授業終わったら、さっさと家に帰ってまったりしようかなー」

「そうしなよ。部活もやってバイトもやってって働き過ぎ。過労死するよ」

「大袈裟過ぎー。あ、でも今日って宿題出る授業の日だから、図書室で終わらせてから帰ろ」

「いや、真面目過ぎ」

毎週恒例の宿題は、今週も変わらず提示された。たまには例外があってもいいんですよ。下校時刻となり、まだ数回しか利用したことがない図書室に向かった。宿題を図書室でやってしまいたい理由は、雑念を消して早く片付

けたいからという気持ちも当然あるが、外の人通りが落ち着くまで待ちたいからという気持ちが大きい。バイトの帰り道を食べ歩きながらゆっくり帰るのが好きなことも同じ理由。日中の騒がしさが消えた、ゆったりとした時間の流れる、穏やかで私を優しく包みこんでくれるような空間。そういった環境に対しても幸せを感じる。

宿題は簡単だが、調べる部分が面倒で45分程度掛かる。まだ騒がしさを感じる外の世界から隔離された図書室の中で、リラックスしながら作業を進めた。

「ふう、じゃ、帰りますかー」

猫のように身体を伸ばし、ゆっくりと荷物を片付け図書室の扉を開けると、蔓延していた騒がしさは完全に消え去り、私の大好きなゆったり空間がいい感じに広がっていた。これよ、これ。

「せっかくだから、いつもとは違うルートで帰ろうかな」

私たちの登下校ルートは固定されていて、今朝も同じ道を歩いてきた。で

も今日は違う。特別だ。こっちのルートを選ばないのは、いつものルートよりも待ち時間の長い信号が多いから。特に3番目の信号は、タイミング悪く止まってしまうと、カップラーメンを作って食べ始められてしまいそうなくらい待たされる。

朝から長時間机に拘束され、退屈していた体を再び伸ばしながら、いつもとは違う道へと歩みを進める。入学してすぐに1回だけ通って見切りを付けたため、信号が長いことと道なりに進むと家に着くということ以外、あまり印象がない。すぐ横に出ればいつもの見慣れた道が現れるというのに、目の前に広がる新鮮さを不思議に思った。

早速、1つ目の信号に捕まった。3つ目よりはマシだが、ここもまあまあ長い。というか赤信号って全部長い。多分、実際よりも長く感じるように出来ているのだろう。世界で最も暇なこの時間は、スマホを眺めてやり過ごす。

ようやく1つ目の信号が青になった。だが、悲しいことに次の信号でも当然のように私の進行が妨げられる。連続してある信号って、1回止められるとそのあと全部止められるよね。敵と戦わないと進めないゲームみたい。

信号クエスト。

新鮮な町並みをキョロキョロ眺めて時間を潰していると、奥に待ち構える例の3つ目のボスに挑もうとする見慣れた勇者の後ろ姿が目に入った。兄ちゃんだ。最近身長がお父さんを追い抜いた、見慣れた後ろ姿。しかし、横に連れている仲間の後ろ姿には全く見覚えがなかった。

「え、女の子？」

遠くからでもわかる長い黒髪が、風に靡いて踊っていた。それに丈の長いスカートを履いている。私と同じ格好。間違いない。隣にいるのは女の子だ。

「マジかよ兄ちゃん。え、もしかして彼女？ え？」

生まれてからずっと同じ屋根の下で共に暮らしてきたが、色恋沙汰の噂なんて聞いたことがない。本人もそんな話を嬉々として身内に話すタイプでは絶対じゃないし、私たちもそういったデリケートな部分については弁えるタイプの家族だった。それが放っておけばいつの間に学校から2人きりで帰る仲に？ いや、そもそも同性の友達と帰っているところすら見たことがない。しかし、下校開始時間から30分以上経過したこの人通りの少なくなったタイ



ミングを狙って帰る。これは完全に人目を気にしているじゃないか。何だよ兄ちゃん、やることやってんじゃん。

脳内で情報処理に励んでいると、目の前の信号は既に青になるどころか、もう次の点滅を開始していた。やはり信号に奪われている時間は思っているよりも短いらしい。

「ヤバッ」

渡れないとまた地獄の赤信号ループ攻撃に嵌められてしまうため、急発進で慌てて渡る。先に進んでいた2人は、もう前のボスを撃破したようで、とつくに姿が消えていた。

2つ目の信号をギリギリで渡ったおかげか、その後は信号をスムーズに進み、気が付くといつもの道と合流し、見慣れた町並みが姿を現した。いつもと違うルートは、やはり新鮮で楽しかった。というか、いつもの道に飽きてしまっていたのかもしれない。明日玲奈に言って、しばらくメインルートを変更しようかな。でもやっぱり、いつもの見慣れた道も落ち着く。実家のよ

うな安心感というやつだ。私は今、その実家を目指して歩いているのだが。適当なことを考えているうちに自宅に到着した。

だが、ここからが本番だ。家には先に帰った兄がいるだろう。まあ、気まずい。先ほどの光景を目にしていなければ、お互いがお互いをほばいもないものとして扱うため全く問題がなかったのだが、目にしてしまったのだからどうしようもない。私の宿題がもう少し遅く終わっていれば、くそッ。自分の出来のよさを呪う。見なかったことにしておけばいいだけじゃん、と思う人がいるかもしれないが、わざとらしさが態度に出てしまいそうで怖い。いや、出る。私の素直さを舐めないで欲しい。でも、玄関前でこう立ち往生しているわけにもいかない。今日はせっかくのオフ。何のために宿題を学校で終わらせたんだ。このドス黒い雨雲を切り抜けければ、虹色のひとときがそこには待っている。よし、いくぞ！ 覚悟を決める！ 深呼吸をしてー、突撃！

ガチャッガチャガチャ。身体ごと押した覚悟が、開かずの扉によって物理的に跳ね返され、軽くよろけた。1人で何をやっているんだ私は。家にはまだ誰も帰って来ていなかった。さっき信号を進んだあと姿が見えなくなった

のはそういうことか。あの2人はどこかでルートを外れたんだ。クーツ、兄ちゃん、放課後デートとは手慣れているね。まあ、私としても2人きりの気まずい空間を回避出来たのでラッキーだ。玄関横の箱に隠された合鍵を取り出し、改めて家の中に突撃した。

「あー」

暗闇の中で目が覚めた。どうやら寝落ちしてしまっただけらしい。外はまだ紅葉に明るい、部屋の中は夜に吞まれ始めていた。眠るつもりはなかったのに。私は私が思っている以上に疲れているのかもしれない。せつかくの自由時間を睡眠に献上してしまったのは不本意だが、思ったよりもスッキリとした寝起きだったためヨシとした。

「小腹すいたー」

本能のままに生きる私は、部屋の電気を点けるとキッチンにおやつ探索に向かう。お母さんはもうパートから帰って来ていた。

「おはよう。珍しく寝てたわね」

「んー。何かお菓子ない？」

「そこらへんの段ボールに入ってるわよ。でももうすぐご飯だからね」

中くらいの欠伸を挟みながら、段ボールの調査を開始し、無事好きなチョコのお菓子を発掘した。いちごミルク味。これも私の幸せの1つだ。値段は、確か170円くらい。コップに牛乳を注ぎ、陽気に鼻歌を歌いながら部屋に持ち込むためにリビングを経由した。

「あッ」

いつも通り、ソファに寝転がる人物が目映り込んだ瞬間、寝起きの幸せで空っぽな頭の中に放課後に見た全てが濁流のように流れ込んできた。同時に押し出されるように、少しだけ大きな声が口から飛び出てしまった。少しだけ。普段はそっけない兄もその声に驚いた様子で、こちらをガン見する妹に視線を移す。

「何」

「……いや何でも」

一瞬思考が停止してしまつたが、上手く切り返せた。早く部屋に逃げよう。

「いや、絶対何かあるだろ。気になるから言え」

やっぱり駄目だった。私の自慢の素直さは、客観的に見ても凄いらしい。ここまで来たならもうやるしかない。まあ、今はキツチンにお母さんもいるし、2人きりの気まづさはない。むしろ、この無感情な兄を動揺させられるチャンスだ。そう、ピンチはチャンス。私の手には、兄の心臓が握られている。

「兄ちゃん、今日女の子と一緒に帰ってたでしょー。私、見ちゃったよ」

お母さんにも聞こえてしまう声で叫ぶのは流石に可哀想なので、兄にだけ聞こえる声で言ってあげた。優しくて気遣いも出来る優秀な妹です。ついに言ってしまったドキドキと、兄の赤面を拝めるワクワクとでソワソワしていたが、返ってきた回答と表情は、その期待をいとも簡単に裏切った。

「ああ、見たんだ。帰ってるけど」

え、何その余裕そうな反応は。無感情にも程があるでしょ。「帰ってる」ってことは、今回だけじゃないってことだね。へー。私の方が動揺してしま

う。

「ふ、ふーん、凄いな。いつの間に彼女なんて出来たの。意外とちゃんと高校生満喫してんじゃないん」

「いや、彼女じゃねえよ」

「いやいや。確かに2人並んで歩いてる後ろ姿を見ただけだけど、あの時間帯に2人きりで帰るのはそれなりの関係なんじゃないんですか？」

「じゃあ何で時間ずらして2人きりで帰ってるの」

「……」

一呼吸置いて、求めていたものとは違う答えが返ってきた。

「あいつ、いじめられてるんだよ」

話が予想外な上に重く、ますます私の方が動揺してしまった。

「いじめられてるって、兄ちゃんのクラスで？ 部活で先輩ともよく話すけど、いじめどころか、悪い噂なんてほとんど聞いたこともないよ」

「俺も最近まで知らなかったけど、一部の奴らが上手いことやってんだよ。」

いじめっていうかクラスの中心的な奴らに利用されてるみたい。俺はそれ  
も立派ないじめだと思ってるけど。問題にするのは本人が訴えてもなかなか  
難しいと思う」

机にデカデカと落書きされるような、よくイメージされる派手なものでは  
なく、ネチネチした陰湿なものということだ。

「で、そうだとして何であの子と2人きりで帰ってるの。言っちゃ悪いけど、  
解決出来ないならあんまり関わるのは止めておいた方がいいんじゃない？」  
よくないことを言った自覚はあるが、それよりも兄が事態に巻き込まれな  
いかが心配だ。

「前に放課後1人で泣いてるところをたまたま見かけたんだよ。普段は大人  
しいんだけど、明らかに様子がおかしくて、いじめもその時に知った。相談  
出来る相手もないっぽいし、流石にそこから放つてはおけなくなつて、あ  
いいう放課後に付き添って話を聞いてやってるだけ」

兄はこんな感じで正義感は強い節がある。自分の見解に従って行動を決め  
るため、そのようなことをしても不思議ではなかった。

「さっき帰るのが遅かったのってあの子の家まで送ってあげてたから？」

「そう。親は仕事で遅くまで帰ってこないらしい」

「気まずい流れから吹っ切れて、兄への軽い彼女イジリをしようとしていたのに、別のベクトルで気まづくなってしまった。しかし、兄の行動が尊敬に値することは確かだった。」

「わかった、話してくれてありがとう。ハイ、これ報酬」

「普段なら私が独り占めするところだが、手にしていたお菓子の袋を開け、兄に数粒差し出した。」

「これ、甘過ぎて嫌いなんだよな」

「じゃああげねーよ！」

私に対してはいつもの捻くれた兄だった。

「玲奈今日部活はー？」

「ごめん、休みは明日だ」

「くッ、なかなか噛み合わないなー」



あの日から何週間か経ち、また久しぶりのオフの日がやってきた。だが、またしてもバド部との予定は合わず、赤信号の前で一緒に肩を落とす。教科書がパンパンに詰まった、ただでさえ重いリュックが、丸岩のように重く感じる。

「夏休みは絶対遊ぼうね？」

「当たり前。これまでの鬱憤を全てぶつけていこう」

本当に彼女とは気が合う。かけがえのない存在だ。こうして自分のことを慕ってくれる大親友が存在するということも、当たり前ではない大切な幸せの1つだと常々思う。

今日も親友と帰れないのなら、やることは決まっていた。下校時刻を迎え、騒がしい外の世界を、再び図書室でやり過ごす。今日は宿題がないため、カウンター横にあるおすすめ小説コーナーの中から、最も魅力的に映ったものを1冊手に取る。最近は何となく読んでいる暇がなかったが、元々読書は嫌いではない。外が落ち着くまで小説を読みながらじっくり待つ時間は、と

ても有意義で幸せだった。

30分ほど時間を潰し、今度最後まで必ず読むことを誓い小説を戻すと、落ち着いてきた外の世界に飛び出す。兄たちがどこで時間を潰しているのかはわからないが、あと数分待てば現れるだろう。だが、この出待ちを見られる訳にはいかない。見られたら絶対に嫌な顔と嫌味をぶつけられる。兄からの罵倒には慣れているものの、そういった言葉をぶつけられるのはやはり好きではないし不幸せだ。校門が見える位置の校舎の陰に隠れ、彼らを待ち伏せた。

10分ほどが経過し、そもそも彼らが今日一緒に帰る保証はどこにもないことに気付き、とても無駄なことをしているかもしれないという不安に駆られてきたその時、現れた。いつもの見慣れた細長い背中と、見慣れない小さな背中。特に何か話している様子はないが、2人並んでゆつくりと歩いていく。校門を出て、ある程度の距離が空いたことを確認して、私も校門を出た。

現れてくれたまではよかったものの、特段そこから尾行する以外にはやることがない。願わくは手とか繋いでくれないかなと期待していたが、そんな様子は一切なく、ただ歩く2人の後ろを観察した。電柱に身を隠し、気分は

探偵だ。この距離なら気付かれる心配はまあないだろう。このまま静かに2人を見守り、別れたらさっさと帰ろう。

探偵には到底相応しくない甘い考えで尾行を続けていると、2つ目の信号待ち中のこちらに向けられていた小さな背中が、小動物のような素早い動きでいきなり身体をこちらに反転させてきた。綺麗に流れる長い黒髪がフワツと舞い上がり、その隙間から覗かれた瞳とこちらの瞳が、この距離でも吸い込まれるようにして合ったのがわかった。一瞬の出来事だったため全く反応が出来ず、むしろ電柱から顔だけを出し、絶賛ストーカー中ですと言わんばかりの最もまずいタイミングで見られた。向こうからしたら完全に不審者だ。突然の不自然な動きに反応し、兄もこちらを振り返る素振りを見せた。ああ、終わった。咄嗟に電柱に全身を隠したが、今までの経験から何かもう無理な気がするので、降参の意を示すため両手を挙げて大人しく全身を晒した。気分はこれから捕まる指名手配犯だ。既にこちらを振り返っていた兄の表情を見ると、ゴキブリを発見したかのようなとても嫌な顔をしていた。ですよね。

もうこうなつてしまつては仕方ないので近づいてみる。吹っ切れた私は強い。ついに対峙した彼女はやはり小さかった。兄と同じクラスということでも艶のあつた長い黒髪はやはり綺麗に手入れされていて、黒い真珠のような大きな黒目がこちらを見つめていた。一言で言えば美人だった。見つかつてからずつと無言で彼女の整つた容姿をまじまじと観察していたため、得体の知れないものを見るような不安げな表情で私を見ている。

「オイ」

「あ」

明らかに怒りの感情を含んだ低声が鼓膜に響き、観察が強制終了させられ現実に引き戻される。ああ、将来は可愛い女の子を一生観察するだけの仕事に就きたい。

「……あの」

困惑した様子の彼女が恐る恐る口を開いた。そんなに怖がらなくても私は無害だし無力ですよ。

「俺の妹だよ。今年入学してきた」

「ああ、言ってた」

少し安心したような暖かい空気を肌で感じた。本当に心から怯えられていたのだと胸が痛くなった。

「ごめんね、前に帰ってるところ見られてたっぽくて、軽く事情説明した」

「そうなんだ。うん、大丈夫」

「オイ、誰にも言っていないよな？」

「ハイ、一切」

口調がえらい違いだ。基本的に感情表現が乏しいものの、私への嫌悪感はい回の会話からひしひしと伝わってくる。

「マジで何しに来たんだよ」

「マジで何しに来たんだろう」

客観的に言われると、部活もバイトもない貴重な時間をストーカー行為に捧げていることがあまりにも虚しく思えてきた。もう逃げよう。

「邪魔してゴメン。先帰るよ。」

そう言って背中を向けたものの、せっかく目の前に立てたのだから、何か爪痕を残したいような気がしてきた。

「あ、そうだ。これどうぞ」

リュックを地面に落とすように置くと、ポケットから不思議な道具を取り出すロボットのように、ガサゴソと小分けのチョコが入った袋を取り出し、彼女の小さな手に何粒か差し出した。

「え、悪いよ」

「チョコを食べると幸せになりますから。私からの幸せのお裾分けです」

去り際の決め台詞を残し、街の平和を守るヒーローの如く颯爽と立ち去ろうと背中を向けたとき、彼女のクスツと笑う声が聞こえた。目の前の信号は青だった。赤だったらあまりにも格好がつかないところだったから助かった。立ち回りは大失敗だったが、最後が締まると気分だけはいい。初めて人の声で幸せな気持ちになったかも。明後日からの夏休みにも全力で挑めそうだ。

私の人生史上初めて開催された高校生での夏休みは、一言で言うとう忙しい

かった。スケジュールの大半は部活で、後半に行われた合宿での濃密な4日間によつて、私の演奏スキルは確実にレベルアップした。バイトも部活の休みの合間を縫って続け、私は馬車馬のように働いた。勿論、遊びにも全力で取り組み、玲奈とは夏祭りに行つて花火を見たり、ショッピングをしたり、やりたかつたことをたくさんやつた。もう一言追加するならば、最高に幸せな夏休みだった。

夏休み明けの学校は、中学校の頃と変わらず憂鬱だったが、親友と励まし合つたり、チョコを補給したりして何とか乗り越えていった。学校のある生活に再び慣れるために耐える日々を送っていると、また部活もバイトもない日がやつてきたが、またしてもバド部は夜まで練習があるらしかった。私たちは、織姫と彦星のような存在なのかもしれない。

このまま帰つてダラダラ過ごしても微妙な1日で終わってしまう気がして、再び図書室で時間を潰し、あの子を見に行くことにした。夏休み中、当然私は会っていない。校舎の陰に隠れ、前回の反省点を振り返っていると、見慣れた背中が1人で校舎から飛び出し、特に誰かを待つ様子もなくスタスタと

校門から飛び出していった。歩くの速ッ。とりあえず兄だけの尾行を開始することにした。

どこかで合流するつもりなのかと考えていたが、この歩くスピードはそうではないらしい。競歩の練習でもしているのかと思うほどグングンと進んでおり、間違いなく全力で帰宅している。あの子今日休んだのかな？ 1つ目と2つ目の信号は簡単に突破されていたが、3つ目の信号がほぼジャストタイミングで兄を止めた。このまま帰る気なら待った意味がないし、もう話しかけちゃおう。

「オッス兄ちゃん」

「……いたの」

いや反応薄ッ。夏休み明けで病んじやったのかな？ 学校嫌いそうだもんねー。

「また2人で帰って来るのかと思ってたのに、あの子今日は休みだったの？ 夏休みでお預け食らったのに残念だったね？ ってまさか夏休み中こっそり会ったりしてないよね」



「ずっと来てない」

「へ？」

またまた予想外の返答に足を捌われ、気の抜けた声が漏れた。

「え、ずっとって、夏休み明けから？ 一度も？」

「夏休み明けから。一度も」

夏休み明けの不登校。珍しい話ではないが、私の身近で起こるのは初めてだ。そしてあの子の境遇、そうなってしまうた確かな原因を知っている。空気が急に重くなり、呼吸がしづらい。

「兄ちゃんあの子の家知ってるんだよね。様子見に行かなくていいの？」

「もう触れるなってことなんだろ」

「……」

息をするのを忘れ、抜ける気も無くなるほど啞然としてしまった。まだ夏の暑さの残る光に照らされて淡々と状況を話す兄の顔は、氷のように冷え切っていた。声色からは怯えたような、でも、どこか怒りも含まれているような感情を感じた。自分自身に対するものだろう。このままでは兄までおか

しくなつてしまいそうで、体の芯から寒気が押し寄せてきた。

「兄ちゃん、ちよつと寄り道して帰ろ」

最後に兄と2人きりで出掛けたのがいつだったか、私から誘ったことに対して素直に応じてくれたのがいつだったか、どちらも記憶にないが、今日の兄は恐ろしく素直だった。向かった先はバイト終わりに行くいつものスーパー。でも、学校終わりに行くのは初めてだ。例のスイーツコーナーに一直線に向かい、いつものエクレアと緑茶のボトルを2つずつ購入した。兄に何かを奢ることも初めてかもしれない。兄はされるがまま、その様子を静かに眺めるだけだった。

「ハイ、食べて。口いっぱいに」

「何の真似だよ」

「いいから」

ようやく軽く口答えしてきた兄を制圧し、袋を豪快に開けてエクレアを押し付けると同時に、自分も豪快にエクレアに齧り付く。いつもの幸せが口いっ

ばいに広がる。あまりに勢いのよい妹の奇行に圧倒された様子の兄だったが、しばらくして同じように齧りついた。

「どう」

「どうって、まあ美味いけど」

「幸せだよ。この甘さ」

「……」

いつもなら「甘いものは好きじゃない」と口答えをしてきそうなところだが、何かを考えている様子で、静かにそれを頬張っていた。

「これは私が発見した幸せだけど、今日だけは特別に共有してあげるよ」

「本当に何の真似だよ」

「あの時、あの子にチョコをあげたのも同じ理由。私の周りには小さかったり大きかったり色々な幸せが溢れてる。それを実感出来れば、辛いことがあっても毎日頑張って明日を生きていける。この幸せをあの子とも共有したかった」

「前にも言ったけど、幸せの感じ方なんて人それぞれだ。それがお前の幸せ

だとしても、全員の幸せにはなり得ないし、それがその人の幸せだったとしても、それで辛いことを上書き出来るとは限らない」

もう一度否定された私の単純な考え。甘い幸せを口いっぱいに詰め込んでいたはずなのに、酸っぱさや辛さも感じる気がする。でも、言われていることはよく理解出来た。私はあの子が体験した理不尽を体験していないし、あの子がどれだけ辛かったのかもわからない。そんな私がこんな単純な思考であの子の幸せを語るのはあまりにも失礼だと理解している。だけど、何度も見た2人横並びになって帰る姿、あの去り際の笑い声が、この考えを必ずしも間違いいではないと言っているような気がした。

「その人が何をどれだけ幸せに感じるかって、その人の人生に依るんだと思う。あの子は人間関係が崩されちゃって、でも、頼れる人もいなくて辛さの絶頂にいたところに、兄ちゃんがきたんでしょ。放課後だけでも寄り添ってくれた兄ちゃんっていう頼れる人間の登場は、あの子がその時何よりも求めていた幸せだったと思う。辛さを全部上書きすることは出来ないかもしれないけど、和らげることは絶対に出来ていた。2人の熱狂的ストーリーカーである

私が保証する。だから、こうなってしまった自分を責めないで欲しいし、まだ救うことを諦めないで欲しい」

兄の全身にこびり付いていた冷たさが、バリバリと音を立てて剥がれ始めた気がした。すかさず、私が一番好きな緑茶のペットボトルを差し出した。エクレアも丁度食べ終わったみたいだ。

「ハイこれ飲んで。グイッと」

やはり、兄は甘いものが得意ではないのだろう。渡されたペットボトルを受け取ってすぐに蓋を開けると、そのまま逆さまに傾けて一気に飲み干した。

「ワッハハ、凄」

「これ、気持ちいいな」

口の中に溜まっていた幸せを体中に行き渡らせると同時に、剥がれた冷たさは洗い流され、兄の中で何か決心が固まったような気がした。

私だけが知っている幸せも大好きだが、誰かに与えて一緒に楽しむ幸せも、やっぱりいいなと思った。

小嶋

あとかき

このお話の主人公である杏奈の思考の7割は、作者の思考のトレースです。冒頭の「幸せて、コスパいいなあ」というセリフも、作者が杏奈と全く同じ状況で頭に思い浮かんだセリフであり、いつか使えるかもとメモに残していました。物語の根幹です。このセリフ、結構気に入っています。

残りの3割は宿題に対する計画性といった要領のよいところ等。作者は全くの真逆で、創作の締め切りも一切守れず、他のゼミメンバーの皆様には多大なるご迷惑をお掛けしました。改めてここに謝罪します。

ということ、一言で言うならば、杏奈は作者から作者の嫌いなところを抜き取った理想の存在です。生まれ変わったらこの子みたいに生きたい。

話は変わりますが、このお話のテーマは「幸せの価値観」です。こんなお粗末な短編1つで語られるものじゃないよ、といった感じですが、せっかくこんな貴重な機会を頂いているのですから、最も書きたいテーマで執筆すべ

きだと思いました。

杏奈のような日常の些細なことにも幸せを感じる人もいれば、置かれていた様々な要因によって現状に幸せを見出せない人も当然います。誰が何にどれだけの幸せを感じるかという問題は、その人の人生が鏡のように反映される非常に面白いものだと執筆していて気が付きました。

作中のあの子が今後幸せになることが出来るのかは兄次第ですが、杏奈はこれからどんな些細なことに対しても幸せを感じて生きていくでしょう。幸せの価値観の違いは、あって当然であり、価値観が違うからといって批判を受けたり、矯正したりするべきものでは決してありませんが、どんな些細なことにも幸せを感じることが出来る人生は、とても素敵な人生だと思います。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。



## 編集後記

ここまでお読みいただき、誠にありがとうございます。十二色の小説は、お楽しみいただけただけでしょうか。

私は本誌に携わるまで、編集は全くの未経験でした。一昨年度の先輩方が残してくれた引き継ぎ資料を見ながら、小説本文のフォーマットは作成したものの、そこからファイル同士をどのように連結すればよいか、そもそも何をどう編集すればよいのか皆目見当がつきません。知らず知らずのうちに一人で抱え込み、インターネットの大海で途方に暮れてしまいました。

しかし、ゼミのグループラインで救難信号を発したところ、湖浜微さんがファイルワード・ソフトの状態で結合し、それからPDF化することを教えてくれました。また、永田志生さんが「とびら」と本文および「あとがき」をあらかじめ結合したファイルをすばやく作成し、皆が使えるように投稿してくれました（本誌のデータを印刷会社へ入稿してくれたのも同氏です）。さらに、書籍のレイアウトに詳しい幾里さんが、永田さんの作成したファイル

をアレンジし、本誌の編集をリードしてくれたのです。私が編集後記を書いている間、幾里さんは整った奥付を苦吟して作成してくれました。

作品の執筆・校正にあたっては、ゼミのメンバーを三チームに分け、それぞれのチームで旭さん、シロガネさん、幾里さんに副編集長をお願いしました。三人は多忙な中、メンバーの小説を読み、各作品の表現を磨き上げていきました。シロガネさんはゼミの掲示板で作者たちに改善ポイントを伝え、幾里さんはメンバーの作品を印刷してアドバイスを記入し皆に配布するなど、それぞれ熱心に推敲してくれました。また、旭さんには推敲のほか、毎月の文芸誌編集会議の議事録をとっていただき、我々メンバーが今後の予定などを忘れないよう周知していただきました。

永田さんと七輝さんは、三年次に田中綾ゼミが創始した図書館サークル「おぐま座」でサークル・メンバー募集のポスターを作成するなど、デザインの才能があります。お二人の表紙デザインと装幀により、『あやいと』は素敵な一冊となりました。願わくは、本誌が皆様の本棚を長く彩る小さな宝箱となりますように。

この度の活動により、編集長といえども決して独りで本を作っているのではなく、多くの人と助け合って一冊の本を世に出しているのだと実感しました。これは、二年間のゼミにおいても同様でした。ゼミ活動は、一人ひとりのゼミ生が、それぞれの持ち味をときには意識的に、ときには無意識のうちに発揮しつつ相互補完的に動かしていくものですね。ゼミ長・編集長と名乗りながら私が貢献したことは少なく、田中先生とゼミ生の一人ひとりがいてくれたからこそ、二年間のゼミ活動、そして『あやいと』第五号の制作を完走することができました。田中先生のゼミで学んだ時間は、一生の宝です。二年間、懇切丁寧に私たちをご指導くださった田中先生、本当にありがとうございました。頼りないゼミ長・編集長の私を様々な形で見守り、励まし、文芸誌の作品を懸命に書き上げてくれたゼミ生の皆さん、本当にありがとうございます。

田中先生とゼミ生の皆、ちよ古つ都製本工房の皆様、そして本誌に関わってくださったすべての方がいなければ、この本は完成していませんでした。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

北海学園大学文学部一部 田中綾ゼミ  
『あやいと』第五号 ゼミ長兼編集長  
四年 寺田望

## ごあいさつ

まず何より、酷暑の中、創作に打ち込んでくれたゼミ生みなさん、ご苦労さまでした。そして読者の方々には、ご高覧に感謝申し上げます。

このゼミでは二〇一〇年度から文芸誌を発行し、この号は記念すべき通巻一五冊目にあたります。代々、ゼミ誌を公共図書館等にも謹呈しており、個人情報考慮して、今回もペンネームによる作品発表としました。とはいえ、ペンネームを使用することで、よりいきいきとした表現や、今日的なストーリーも可能になったようにも思われます。

三年次のゼミでは、堺憲一編『明日はきつと お仕事小説アンソロジー』所収の小説精読を通して、各自の労働観を深め、ディスカッションも行いました。ほか、近年の〈お仕事小説〉を読み深めたほか、新聞記事を題材とした短編小説の創作にも挑戦しました。そういった取り組みが、今回の小説にも活かされているように感じます。

今回の『あやいと』第五号は、比較的ゆったりとしたペースで進められま

したので、校正責任者の副編集長たちは無理ないスケジュールで担当できたと思います。それらを統括する編集長は、作業量が多くてたいへんでしたが、持ち前の責任感とリーダーシップを存分に発揮してくれました。どうもありがとうございました。早くから表紙デザインに取り組んでくれた担当メンバーにも感謝しています。会計・監査、謹呈作業など一連の作業の経験を、今後の社会人生活にも役立てていくてください。

数年後、あらためてこの『あやいと』をひもとき、学生時代の感性の「いと」をそつと引っ張り出してくれると嬉しいです。

一人ひとりの個性と、第五号の刊行を祝して、乾杯。

演習担当教員 田中 綾

# あやいと 第五号

---

2026 年 1 月 13 日 発行

発行者 北海学園大学人文学部 I 部田中綾ゼミ

発行所 田中綾ゼミ『あやいと』編集部

〒062-8605

北海道札幌市豊平区旭町 4 丁目 1-40

北海学園大学人文学部日本文化学科

田中綾研究室内

E-mail : aya-ta@hgu.jp

装幀 永田志生

印刷所 ちょ古っ都製本工房

---

落丁・乱丁及びご意見・ご感想等ございましたら、お手数ですが書簡

もしくはE-mailにてご連絡ください。